力

の都っ

「自分の

力

よ間 うの

力で解決に挑も

- ■本資料は、大人の助力により手順を踏んで説明すれば、小学5、6年生にも しっかりと内容を理解させることが可能です。
- ■また、本資料は中学生・高校生の学習にも利用できます。
- ■正味60頁(B4用紙16枚)
- ■約94,000字
- ■PDF: 6.73MB
- ■本資料は随時改訂を行っています。ウェブサイトより適宜最新版を確認してください。
- ■本資料は無料でご利用いただけます。

【印刷·製本】

- ・用紙:B4サイズ/16枚
- ・プリンター設定:両面印刷/短辺とじ/印刷の向き(横)
- ・ページ順に揃え、二つ折りにし、回転式ホチキス(100均で入手可能)で「中とじ」します。
- ・ホチキスは、背(外側)からノド(内側)に向けて打ちます。また、天地からそれぞれ6~7cmの 位置に一か所ずつ打つと冊子が安定します。

※選択問題で用いられる各種技法について、20年来メモを取りためてきたものを中心に分類、整理しました。 **(•∀•)**/ もうやめよう! ※本資料、およびウェブサイトに掲載した内容の剽窃・アイデア盗用・改変使用は

中学受験国語 選択肢の判別



- ■受験国語の選択問題でよく用いられる手法を
- ■主に論理的アプローチにより
- ■ⅠⅠⅠ種に分けて整理しました。
- ■※全 | 23種/関連手法含む



- *2024年(令和六年)4月8日改訂版
- *両面印刷し、製本してご使用ください
- *全60頁/B4用紙16枚

★作成:細川

【 接続語 一覧表 】

●語句と語句、文と文、段落と段落等をつなぎ、前後がどんな関係であるかを示す言葉。

分 類	働きと具体例 ※自立語のみ
①順 接	前のことがらが原因・理由となり、後にその順当な結果がくる。(順当:当然なさま)
	だから、すると、 したがって、それで、そこで、それゆえ、ゆえに、よって
②逆 接	前のことがらと対立するようなことがらが後にくる。※対比・不調和・反対・逆とも
	しかし、ところが 、でも、けれど、それでも、が、だが、けれども、だけれども、 しかしながら、それなのに、ですが、だのに
③並 列	二つ以上のことがらを 対等に並べる 。「 並立 」ともいう。
	そして、また、 それから、および、ならびに
4添加	前のことがらに <u>新しいことがらや重要な事柄をつけ加える</u> 。
	また、そして、 さらに、しかも、そのうえ、それから、おまけに、それに、かつ
5選 択	前のことがらと後のことがらの、どちらかを選ぶ。 ※選択的並列
	または、あるいは、 それとも、もしくは、ないしは
⑥説 明	(1) 理由:なぜなら、だって ※根拠 (2) 換言:つまり、要するに、すなわち (換言:言いかえること) (3) 例示:たとえば 、いわば (4) 補足:ただし、なお、もっとも (補足:足りない点を 補うこと。) ※条件・例外とも
⑦転 換	話題を変える。 ※話題転換
	さて、ところで、 では、それでは、そもそも、ときに

■注意

※テストや演習の際などに、各接続語の**区別や働き**を知らずに必死に「接続語探し」をしてチェックに 勤(いそ)しんでいる受験生を非常に多く見受ける。チェック作業に注力するあまり認知的視野を狭(せば) めたり、読解そのものがお座なりになったりといった本末転倒に陥(おちい)らぬよう注意しよう。

※「そして」を「添加・並列」の接続語ではなく「順接の接続語」と捉(とら)え違(ちが)えている小学生が非常に多い。「そして」には前後の因果関係を積極的に示す働きはない。

- ※「添加の接続語」の後には「新しい事柄(ことがら)や重要な事柄」が置かれる場合が多い。
 - ①私は七時に起きた。だから、顔を洗いに行った。
 - ・前後の内容について、因果関係を積極的に示す文脈には『順接』を用いる。
 - ②私は七時に起きた。そして、顔を洗いに行った。
 - ・<u>因果関係ではなく、前の事柄に別の新たな事柄を付け加える文脈</u>には『添加』を 用いる。

※「箱のふたをそっと開けた。(だから/すると)白い煙がもくもくと…」のように、同じ順接でも意味や用法が異なる。接続語は、日常においても話者や書き手の感情の表出、また、主観性や客観性、ニュアンスなど、その時々に応じてさまざまに使い分けられている。中学入試では小学生の語感を試す出題も珍(めずら)しくないので、文脈や場面、状況に応じた言葉の選択、使い分けができるよう、普段から語感を磨き、表現力を高める訓練にも注力しておきたい。

※前後それぞれの「主語・述語を押さえて要約し、文脈をたどる」訓練により判定の精度が向上する。 ※「説明」の項に含めた「たとえば・言わば・つまり・要するに」は、品詞としては「副詞」である。連結機能を持つ一部の副詞は「接続語」として扱(あっか)われる。(※『接続詞』として扱われるわけではない) ※文章を書く際には、接続語の後に「読点(、)」を打つことが原則となっている。

【選択肢の判別 111の視点】

■本資料は、国語の選択問題において解答者を誤答に誘導するために作問者がよく用いる手法の一覧です。本資料に掲載(けいさい)された各手法を知ることで全ての問題が解決できるわけではありませんが、選択肢を論理的、多角的に分析、検討するうえでの一助としてください。

■子どもたちは、大人が当然備えているような様々な**視点**が未発達であり、**検討力**も不十分です。そのため、塾講師や家庭教師は、子どもたちの学力を育成すべく、また、新たな視点を付与すべく、試行錯誤(さくご)を重ね、様々な技術を工夫して指導しています。

随分(ずいぶん)昔からある「定石(じょうせき)テクニック」の一つに、「本文を通読していては制限時間内に全問解き切ることは困難だ。本文は通読せず、先に設問に目を通し、本文で問われている箇(か)所の前後内容によって解答を決めよ」といった手法がありますが、残念ながら現在でも、この非本質的な手法を「正攻法」として、非常に多くの小学生(中学受験生)たちが指導され続けています。

選択肢の判別においてもまた、「『言い過ぎ(行き過ぎ)』、『大げさ』、『極端』な印象を与える選択肢は選ぶな」、「『断定表現』や『限定表現』のある選択肢は選ぶな」、「『全て・どれも・みな』」のような全称(ぜんしょう)表現が用いられた選択肢は選ぶな」、「『強い』印象や『ポジティブ』な印象を与えるものを選べ」、「選択肢の説明文の前半を棒線(ぼうせん)で消し、後半の内容のみで判断せよ」、「プラス、マイナスの印象の違いで決定せよ」、「普段から直感力をよく鍛(きた)えておきなさい」といった、その時、その場だけの「印象や感覚に依存(いそん)する手法」や「安直な機械的処理法」が指導されているケースが相当に見受けられます。これは、高校受験や大学受験の指導においても一般のようです。

論理や思考によるのではなく「印象や感覚による判定法」や「機械的処理法」によって解答を決めるというのは、「サイコロや鉛筆を転がして答えを決める」のと違いはありません。作問者の側は、多くの子どもたちがそのような手法によって国語の選択問題に当たるよう指導されていることを承知のうえで、判断に揺(ゅ)らぎを与え、誤答に誘導しやすいよう、手を変え品を変え、様々に工夫を凝(こ)らして作問をしています。「読む力と考える力」を育て、「本文との速(すみ)やかな照合と検討」によって「論理的、かつ正確な判断」ができるよう、普段から「本質的な読解学習」にしっかり取り組んでおきましょう。
※本資料巻末に掲載した「高速トレース(全脳型高速処理訓練)」、「時間短縮訓練」、「時間配分のしかた」、「速読訓練(フラッシュリーディング)」等の資料も併(あわ)せて参照してください。

■かつて、当方の指導する生徒に、「私は作問者と戦うつもりで問題に当たっています」ときっぱりと言い切る者がいました。問題が解けないことが悔(<ゃ)しい、作問者の仕掛けた罠(ゎな)にはまるのが悔しい、とその生徒は言い添(そ)えましたが、大人(作問者)の思考力に自分の思考力が及(ぉょ)ばない悔しさと苦悩(<のう)、そして、それを克服(にくふく)してゆくために、一つひとつの問題に真正面から向き合ってゆこうとする11、12歳の子どもなりの気概(きがい)が、私にはひしひしと伝わってきました。

中学受験を志(にころざ)す皆さんは、中学校側が求めている生徒像がどのようなものかを今一度考え、それをよく心に受け止め、思考したり苦闘(くとう)したりせずともあらゆる夢を楽に叶(かな)えてくれる「魔法の杖(つぇ)」の存在を信じて安易にそれにすがろうとするのではなく、「直面した問題の一つひとつを、自身が持てる能力を最大限に発揮して解決してゆく姿勢」、「自分の力で自分を育て、作り上げてゆく姿勢」、「自分の人生を自分の力で築き上げてゆく姿勢」の大切さを常に忘れずにいてください。

また、中学受験国語は、論理や思考力だけで全ての問題が解決するわけではありません。日がなー日机(つくえ)に向かうばかりでなく、時に外界へと視野を広げ、自然や世の中のさまざまな事象に目を向け、五感を働かせて、触れ、感じ、想像し、考えてみる。そして、人との出会いや、人との関わりを大切にし、自分の未来にしっかりと目を向け、自分の生き方を一つひとつ見定めてゆくつもりで、自分自身を磨(みが)き、育(はぐく)んでゆく。そうした姿勢こそが、揺(ゆ)るぎない自分という存在の礎(いしずえ)を築き、人間としての幅を広げ、心の豊かさを培(つちか)うための大切な勉強であると言えます。そのことを常に胸の底に置いて、溌溂(はつらつ)と日々の学習に勤(いそ)しんでもらいたいと思います。

■作問に携わる方々には、受験生の思考力や分析力、検討力を測る本来の目的に沿い、その場しのぎの安直な手法や機械的な手法によって容易(たやす)く崩(くず)されないよう、より巧(たく)みに工夫を施(ほどこ)してもらいたいと思います。今後、『三択で絞り込みに迷う問題』や『不適切肢を選ぶ問題』、『本文や図表、資料との確実な照合によらねば判断が困難な問題』等を増やすのも一手でしょう。

また、塾講師や家庭教師の方々にも、子供たちが論理的な思考力と多角的な検討力とを備え、自分の頭をよく使い、思考作業による判断と結果に確かな手応(てごた)えを得られるよう、より本質的で精緻(せいち)な工夫を指導に施してもらいたいと思います。

 $(\cdot\omega\cdot)$

【基本的な論理】

①三段論法(演繹法)	4	⑦飛躍(論理的飛躍)	7
②暗黙の前提	4	⑧論点のすり替え (論点違い/論点ずらし)	7
③前提のすり替え	5	9弁証法	36
④因果関係	5	⑩類推(類比推論/アナロジー)	37
・因果の逆転	5	• 類比論法	37
⑤矛盾	5	⑪仮説形成(アブダクション/リトロダクション)	38
⑥ 背理法	6	⑫帰納法	39

【選択肢の判別 111の視点】※『*印』は関連手法(12種)

(1) 論外	8	(16)表面的説明(形式的説明)	10
(2) カモフラージュ (カモ/偽装)	8	(17) 主 観 (どっかの誰かさんの考え)	10
(3) ファンタジー♡ (お花畑/おとぎの国)	8	(18) コ ピペ(フェイク/ダミー)	11
(4) キラキラワード (うっとりワード)	8	(19) 直前 トラップ (直前に書いてあるもん♡)	11
(5) ホイホイトラップ (撒き餌)	9	(20) 真逆 (逆のこと言ってる)	11
(6) ウソ (違うこと言ってる/デタラメ)	9	(21) 誇 張 (盛ったでしょ)	12
(7) 読み取り不能 (ヨミフ/根拠無し/情報無し)	9	(22) 誇張力モ (言い過ぎ?/大げさ?/極端?)) 12
(8) 根 拠 不 十 分 (前提不十分)	9	(23) 強調力モ(こそ?/まさに?)	12
(9) 意味不明 (イミフ/曖昧)	9	(24) 断 定 (断言/言い切ったな!)	12
(10) 展 開 無 視 (ワープ/展開不一致)	9	(25) 断 定 力 モ (絶対に?/必ず?/常に?)	12
(11) 視 点 違 い (視点ずれ/よそ見禁止)	10	(26) 限 定 (そんだけぇ~♡/限定的一致)	12
(12) 論 点 違 い (ロンチ/論点のすり替え)	10	(27) 限 定 力 モ (だけ?/のみ?/しか?)	12
(13) 方向違い (崖からバンジー/方向ズレ)	10	(28) 全 称 (全部が全部!)	13
(14)要素不足(部品不足/部品落下)	10	(29) 全 称 力 モ (全て?/どれも?/みな?)	13
(15)余計(蛇足/異物混入/お邪魔虫)	10	(30) お楽しみ箱 (びっくり箱) 14	4~15

■承閱 (論冊的承閱)

■飛峰(端準可飛峰)			7.1
(31)飛躍(論理的飛躍)	16	(38)矛盾(両立不可能)	17
(32) 意 志 飛 躍 (そんなつもりないし!)	16	(39) 拡 大 解 釈 (意味広げたでしょ)	17
(33) 意 志 調 整 (積極度・消極度の調整)	16	(40) 単純化(単純な話さ)	17
(34) 期待・願望飛躍 (別に期待してないし)	16	* 1: 無理な一般化 (例外は無いのけ?)	18
(35) 好意飛躍(別に好きってわけじゃないし)	16	* 2: 逆は必ずしも真ならず(逆立ち飛躍)	18
(36) カゼオケ論法 (ドミノ論法/連鎖飛躍)	17	*3:裏返しもまた必ずしも真ならず(裏返し飛躍)	18
(37) - 公注 (百里田老)	17		

— 13 3 3 C 3 N 1 1			
(41)前提のすり替え (聞いてないよ!)	19	(53) 受け入れ前提 (受け入れてたっけ?)	21
(42) 暗 黙 の 前 提 (暗黙の了解)	19	(54) 理解前提 (理解してたっけ?)	21
(43) 人物像不一致 (人物像のすり替え)	19	(55) 認識前提(認識してたっけ?)	21
(44) 人物関係のすり替え (関係性が違くね?)	19	(56)好意前提(好きになってたっけ?)	21
(45) 条件 トラップ (『条件』作ってみた!)	20	(57) 期待・願望前提 (期待してたっけ?)	21
(46) 仮 定 トラ ッ プ(『仮定文』作ってみた!)	20	(58)つまみ食い論法 (チェリーピッキング)	22
(47) 因果トラップ (『理由』作ってみた!)	20	(59) ダミー論法(わら人形論法)※歪曲・曲解	22
(48) 基準 トラップ (『基準』作ってみた!)	20	*4:道徳主義トラップ(道徳をダシにせよ!)	22

- (48) 基準トラップ(『基準』作ってみた!)
- (49)推定妥当(確かにありうる!) (50) 主題違い (要旨違い/主題トラップ)
- (51) 肯定前提(肯定してたっけ?)
- (52)前向き前提(前向きだったっけ?)





* 5: 自然主義トラップ(自然に倣え!)

* 6: 新規主義トラップ (新しければいいの?) 22

*7:伝統主義トラップ (古ければいいワケ?) 22



■技術的基本②

- ①適切な動詞の選択:「ある」「いる」「やる」「する」で済まさず、その都度適切な動詞を探して用いる。
- ②本文表現の尊重: 筆者や作者の意図(いと)により選択された表現を必要以上に変更しない。
- ③文末の心情表現:「安心する気持ち。(体言処理)」、「安心している。(動詞処理)」のいずれの表現 で文末を結んでも可。
- ④意志・推量表現:助動詞の「う・よう・まい」を適宜使用し、正確な表現とニュアンスを工夫する。(例 :去ろうとした。逃げようとした。嘘(ラそ)はつく<u>まい</u>。)
- ⑤希望表現: 助動詞の「たい・たがる」を適宜使用し、正確な表現を工夫する。(例: 帰りたがった)
- ⑥「~ている·~てある」は「~た」に置き換えが可能。(例:『壁に掛かっている時計=壁に掛かった 時計』・『紙に書いてある文字=紙に書いた文字』)
- ⑦ニュアンスの調整:自分の語彙(ごい)力を駆使(<し)し、「説明にふさわしいニュアンス」で表現する。 ⑧語句の補完:説明に必要な語句を判断し、適宜自分の「言葉の引き出し」から取り出して補う。
- ⑨自由スペースでの字数の推定:「自由スペース:マス目の無い解答欄(らん)」では、抜き出し問題等 のマス目のある解答欄等を利用し、要求されている字数を推定する。
- ※一般に「縦一行25字」が平均であるが、模試や各学校の解答スペースに合わせて適宜推定する。
- ⑩指定字数の順守:「~字以内」とある場合は少なくとも八割以上書き、「~字程度」とある時は、極力 その指定字数に近づける。
- ⑪文脈構成:主語と述語の「ねじれ」や「係り受け」に注意し、正確でわかりやすい文脈を構成する。
- ⑩指示語:指示語を使用する際には、文脈上正しい用い方をすること。ただし、指示語を使うと無駄 (ホナだ)に字数を消費する場合が多いので、なるべく指示語を使わない文脈構成を訓練しておくとよい。

■技術的基本③

- ①強調表現:文章に説得力を与えたり、ニュアンスを与えたりするための工夫の一つ。
- ②共感度を高める:対象への深い共感や理解をもとに、それを十分に表現する。
- ③説得力を与える: 読み手を説得する内容や表現の工夫を行う。
- ④抽象表現化:説明に必要な語句を適宜(できぎ)抽象化し、無駄(むだ)の無い、要を得た文章を作る。 「抽象化」が過度だと「具体性」が低下し、逆に「具体的すぎる」と「解答要素をはじき出す」恐れがある ので、制限字数に応じて抽象度と具体性を適宜調整する訓練が必要。平常より「記述や口頭でのア ウトプット」を通して、説明の具体化や、概念語などの抽象表現に変換する訓練を積んでおこう。
- ※概念語(がいねんご):物事の本質や性質について、その内容を抽象化して表す語。友情・信頼・疑問・ 対立・理解・喜び・不安・文化・社会・自然・価値・情報・合理的・因果関係、などの語。※p.28参照
- ⑤文章構成·展開:文章全体の構成や展開を工夫し、無駄のない、まとまりのある文章を心掛けよう。 **⑥文章に流れを作る**: 読み手の十分な理解を意識し、文章に流れを作り、説得力を与えよう。
- ⑦書き出しの変更: 当初の書き出し方で文脈構成に行き詰(コ)まったら、即座に「別の語による書き出 し」に切り替える。 普段から「**文の書き出しを瞬時に切り替えて文脈構成する**」訓練を積んでおこう。
- (8)要約·凝縮(ぎょうしゅく):各部を適宜凝縮する。無駄のない表現で的確に内容を伝える工夫をする。
- ⑨表現の変換:状況に応じ、適切な表現に言い換える。
- ⑩反照代名詞の利用
- ·「自分」という語を適宜利用し、誰の視点からの説明かを明確にする。
- (f)「~など(等)」は安易に用いず、必要な場合に適切な用法を考えて使用する。
- **⑫連結表現:「~で、~で、だらだら**」型の稚拙(チョせつ)で冗長(ヒょラちょラ)な文章とならないよう、連結表 現を工夫する。また、「私の本の表紙の絵の \sim ।のように、「 \mathbb{F} の \mathbb{F} の不適切な連続使用 \mathbb{F} 0を避(さ)ける。

■連結表現

- ・~することで/によって/にともない/にともなう(原因・理由)・~ために(目的/原因・理由)
- ・~にもかかわらず/でありながら/ながらも/ものの/つつも(逆接)・~として(資格)
- ・ \sim するとともに/だけでなく(**添加・並列**)・ \sim に対し/ことに(対象)・ \sim とともに/と同時に(並行)
- \cdot ~ことが(論点) \cdot ~うえで(前提) \cdot ~することなく/せずに(否定) \cdot ~において(時間/場所/状況)

■連用中止法

・動詞や形容詞、形容動詞などの語を連用形で一旦(いったん)中止して、その後に文を続ける方法。「よ く学び、よく遊べ」、「頼もしく、快活な人物」、「静かに、ゆっくりと歩く」など。直後に読点を打つこと。

■その他

•「~ので/から(理由・原因)」、「~が/のに(逆接)」、「~で/して(添加・並列)」を使いすぎると稚拙で 冗長(じょうちょう)な文章となるので注意。

21

21

■技術的基本①

①文末処理

・設問の要求に沿って、文末を正確に対応させる。

・なぜ? どうして? 理由は? …… ~から。~ため。~ので。

▶何ですか? ・・・・・・・・・・ ~こと。~もの。~体言。

・どういうこと? ・・・・・・・・ ~ (という) こと。

・どのような意味? ・・・・・・・・ ~ (という)こと。

・どのような内容? ・・・・・・・・ ~ (という)こと。

・どのような気持ち? ・・・・・・・・ ~ (という)気持ち。

・どのような様子? ・・・・・・・・ ~ (という)様子。

・どのような点? …………… ~ (という)点。

・どうしていますか? ・・・・・・・ ~している。

・どうしましたか? ・・・・・・・・ ~した。

・どうしていましたか? ・・・・・・・ ~していた。

ぜんていじこう ちようふく

②前提事項の重複記入に注意

・「設問文中の前提事項」を重複記入しない。

※例えば、設問で「太郎の気持ちを説明せよ」と求められているのなら、<u>太郎を「暗黙の前提」として説明すればよい</u>のだから、<u>文脈上必要な場合を除き</u>、「太郎は…、太郎は…」のように何度も書き重ねる必要はない。

※「前提事項の重複記入」に意識が向かず、制限字数を圧迫して解答要素をはじき出してしまっている受験生が、上位生を含めて非常に多く見受けられる。

※「抜き出し問題」においてもまた、設問の条件における「前提事項」に注意が向かないと、『ここから、ここまで』という、要求に正確に対応した的確な範囲特定を誤る恐れがある。

③重複表現を避ける

・文脈上必要な場合を除き、記述説明に「同語・同義語」を重複使用しない。制限字数を圧迫する原因となるだけでなく、解答要素をはじき出してしまう原因ともなる。

④倒置•再構成

・「語句の倒置」や「パーツ全体の再構成」を適宜行い、無駄の無い、内容の整理されたわかりやすい 文脈を構成する。

⑤長い主語の構成

・短い主語での書き出しは、「~で、~で、だらだら」と稚拙で冗長な文章になりがち

※例えば、「<u>| 花が</u> →庭に美しく咲いており、……」を「<u>庭に美しく咲いている</u> 花が 、〜」のように、関連語句をまとめて「中心主語」の上に載(の)せ、「長い主語」を構成して書き出すことで、それに続く文脈もすっきりとし、わかりやすくなる。

※「修飾語」についても意味的にまとめる工夫をしてみよう。

⑥語句の短縮

・動詞や語句を適宜短縮する。(例:食物に<u>ふくまれている</u>脂肪=食物に<u>ふくまれる/ふくまれた</u>脂肪)⑦趣旨(Lipt)を文章後尾に置く

・「仲直りして、握手(めくしゅ)した(事柄の前後関係を示す)」と、「握手して、仲直りした(並行的状況を示す)」とでは文意が異なる。趣旨(伝えたい中心内容)は文章全体を支配する。「解答の核(かく)」となる趣旨を文章後尾に固定したうえで文脈を構成しよう。たとえ解答要素が揃(そろ)っていても、趣旨が異なっていれば文章全体を殺してしまう場合もあるので注意。

⑧具体性を高める

・言葉を整理して、具体的でわかりやすい文章を心掛けよう。

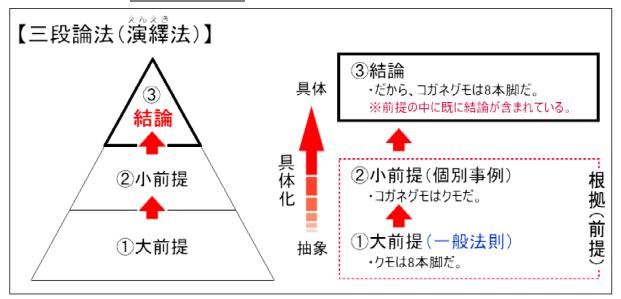
⑨「が」と「は」の使い分け

・「太郎<u>が</u>」と「太郎<u>は</u>」とでは意味、用法が異なる。文意、文脈に沿ったふさわしい表現を選択する。⑩句読点

・一文において、読み誤りや読みにくさを避けるため、「意味の流れが途切れる所」や必要な場所を適 宜判断し、「読点(、)」を打つ。「一つ言いたいことを述べたらテン(読点)を打つ」ことを意識し、各要 素どうしを適切に連結していくとよい。そして、叙述(じょじゅつ)が完結したら文末に「句点(。)」を打つ。

* * * [*] * * * * * * * * * * * * * * *			
■ 満表調 生 (60) 因果の逆転	23	(67) 価値 トラップ (価値判断してないし!)	24
(61) 因果要素の倒置	23	(68) 比較価値トラップ (比較と価値の合体!)	24
(62) 偽装因果 (因果関係作ってみた!)	23	(69) 同語 反復 (循環論法/おんなじこと言ってる)	24
(63)無関係 (関連性無し/虚偽の関連付け)	23	(70) 偽装飛躍 (これ正解かよ!)	24
(64) 踏み込み不足 (寸止め/あと一歩)	23	(71)屁理屈 (ああ言えば、こう言う)	24
(65) 類比論法 (その例えは無関係!)	23	*8:前後即因果(祈ったから合格した!)	25
(66) 比較トラップ (別に比べてないし!)	24	* 9: 疑似相関(見せかけの相関)	25
■すり替え一般 -/-/-/-/-/-			
■ 9 り皆ん一版	27	(92) 非主要(後回しでよくね?)	29
(73) 心情違い (気持ちが違う)	27	(93) 一般論 (一般論はさておき)	30
(74) 理由違い (理由のすり替え)	27	(94) 常識・道徳論	30
(75) 目 的 違 い (目的のすり替え)	27	(95)迂言 (うげん) 法	30
(76) 対象違い(対象のすり替え)	27	(96)要素倒置(要素不足誤認)	30
(77) 定義のすり替え (定義ちがくね?)	27	(97)半分ずっこ (ハーフ&ハーフ)	30
(78) 趣 旨 違 い (脱線/意味違い/意味ズレ)	27	(98) 前後同一 (ダブり/ <u>同語反復</u> / <u>循環論法</u>)	30
(79) 説明不足(具体性欠如/過度抽象化)	27	(99)別の事柄の説明 (別件の説明/不正流用)	31
(80) 語のすり替え。	28	(100) 替え玉 (身代わり)	31
(81) 換言トラップ	28	(101) 偽証トラップ	31
(82) ぼかし語トラップ (はぐらかし/概念語)	28	(102) 反対語トラップ	31
(83) 結論 違い (ゴール間違えた!)	28	(103) 可能性トラップ	31
(84) 道筋違い (コース間違えた!)	28 29	(104)回想部の変造 (思い出作ってみた!)	31 31
(85) きっかけ違い (86) いきさつ違い (経緯違い)	2 9 29	(105) 語 句 矮 小 化 (なんか意味弱まった…) (106) 論 点 矮 小 化 (大した問題かよ!)	31
(87) あらすじトラップ	29	(100)	32
(88) 比喩説明不適 (実在トラップ)	29	(108) それってあなたの感想ですよね!	32
(89) 暗示・象徴トラップ	29	*10:論点混在 (めまいがするわ)	29
(90) 事実の主張へのすり替え	32	*11:単純例示	32
(91) 具体例照合 (落ち着いてあわてろっ♡)	29	*12:否定不能(消極的肯定)	32
■おびき寄せ(印象操作)	22	//1/1/ 工体 + じキ / ニュー/パー・リロー・バン	
(109) おびき寄せ (つぎはぎ/コラージュ作品) (110) おとり (また引っかかったもん♡)	33 33	(111)正答もどき (ゴースト/パラレルワールド)	აა
(10) 62 9 $(xcho)$ $xho(2)$	33		
■心理操作術 <i></i>			
①確証バイアス	34	⑥イエス誘導法	34
②初頭効果	34	⑦事後情報効果	35
③新近効果	34	⑧催眠誘導	35
④アンカリング (初期値提示誘導)	34	⑨ゾンビ効果	35
⑤誤前提暗示	34	⑪サブリミナル効果(隠し誘導文)	35
■その他			
・だって論法	11	・のび太論法・ジャイアン論法	40
・悪魔の証明	13	・犯人を見つける!	41
·自己矛盾	17	·Aさんの帽子は何色か?	42
・レッテル貼り	18	・5人の宇宙人	43
・曖昧語法(二重語法)	25	・今週のジャイアン当番	44
・疑似相関(見せかけの相関)	26	・天使と悪魔と人間	45
・ <u>循環論法</u> ※p.24・p.30参照 ・概念語	26 28	・二つの砂時計 ・消えた1,000円の謎	46 47
・城 ^ス 語 ・ダブルスタンダード(二重基準)	28 32	・	47
			40
■付。録 -/			
・高速トレース(全脳型高速処理訓練)	49	・時間配分のしかた	53
・高速トレースの方法	ΕO	・「就」の正しい字形	54
・再現学習 (ロ頭でのアウトプット) ・読書・音読・読み聞かせについて	50 50	·抜き出し問題での「正解の推定字数」 ·記述力の練成技術	55 56
・読書・音読・読み聞かせについて ・速読訓練(フラッシュリーディング)	50 51	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	50 60
・時間短縮訓練	52		
	h')	・「受験生の君たちへ」(裏表細	F)

■基本的な論理① <u>三段論法(演繹法)</u>



・三段論法とは、「二つの前提」から「一つの結論」を導き出す推論形式で、論理展開の基本とされます。「前提」とは、「結論」を導くための「根拠となる条件」のことです。「前提」は、「論理の土台」であり、正しい論理や因果関係を組み立てるうえでの重要な要素となります。

・読解においては、「思考の迷い」や「判断の揺(ゅ)らぎ」を起こさないために、正確な読解に基づいて「前提」をしっかりと固定する必要があります。

①【大前提】で「一般法則(全体のことがら)」を述べます。

例:クモは8本脚だ。

②【小前提】で「個別事例(一部のことがら)」を述べます。

例:コガネグモはクモだ。

③【結論】二つの前提を「根拠」として、「結論」を導きます。

例: だから、コガネグモは8本脚だ。※前提に既に結論が含まれているために完全に納得される。

■基本的な論理② 暗黙の前提

■基本的な論理② <u>暗黙の則提</u> ・<u>特に言明せずともわかりきった前提</u>を「暗黙の前提(暗黙の了解)」という。

・太郎君:クモは8本脚なんだよ。

【大前提】

・次郎君:だから、コガネグモも8本脚なんだね。

【結論】

・日常の会話等ではこのように表現しても意思疎通に支障はない。それは、「**コガネグモはクモの一種** だ」というもう一つの「前提」が当事者間で暗に「共有」されているためだ。

・両者で暗黙の前提となっている事柄(ことがら)の全てをいちいち確認し合っていては話が進まない。逆に、自分と相手との間で前提が一致していると思い込んでいると、「前提の不一致」により齟齬(そご: 意見などが食い違うこと)が生じたり、水掛け論(両者が自説にこだわって争い、いつまでも結論の出ない議論)に陥(おちい)ったりして人間関係にまでひびが入ってしまうこともあるので注意しよう。

◎中学受験国語の読解学習においては、本文の正確な内容把握により、「明示された前提」と「表現の裏にある前提」に加え、「暗黙の前提」の三つをしっかりと押さえることが大切だ。そして、両者を把握(はあく)するうえで大切なのが「本文の通読」であることは言うまでもない。筆者(作者・登場人物)、作問者、受験者との三者間で「前提を合致(がっち)させておく」必要があるからだ。前提が合致していないと思考に揺(ゆ)らぎが生じ、判断もその都度揺(ゆ)れを起こす。

※表現の裏にある前提: 例えば、選択肢の説明内に「決心した」という表現があったとすると、それはその人物が「それまで迷っていた、それまで決心せずにいた」といった意味が考えられ、また、「仲直りした」とあれば、それは「それまで仲違(なかたが)いしていた、仲直りするかどうか迷っていた」といった意味が考えられるが、それが実際に前提として本文の内容に合致(がっち)するのかどうかを正しく掴(っか)む必要がある。

■大原則

①設問の要求を正確に把握する

・設問がまず「何を要求しているのか」を正確に捉え、正しい方向に沿って思考すること。また、「その 要求を、自分に与えられた解決すべき問題としてしっかりと受け止める」ことで、見当違いの思考やミスが必然的に無くなっていく。

②趣旨(しゅし)を固定する

・「自分が伝えたい内容を明確に固定する」こと。正確な読解に基づき、趣旨を明確に固定すれば、 解答要素は自動的に集まってきてくれる。ただし、「切り貼り型」の機械的な文章にならないよう注意。 ※単に「本文の内容を書き写しただけ」、「粗筋を書いただけ」の答案にならないようにも注意。 ③正確で、伝わりやすい表現を工夫する

・「正確で、伝わりやすい表現を工夫すること」は、「表現の本質」だと言える。超難関校を目指しながら、単に「切り貼(は)り」をしただけのような、機械的で稚拙(ちせつ)な、読み手に何も伝わってこない記述答案しか書けない受験生が驚くほど多い。入試答案を採点する先生のうんざりした表情が目に浮かぶようだ。自分の将来のためにも、「自分の考えが読み手や聞き手によく理解されるような表現力や説明力」をしつかりと磨(みが)き、備えておこう。

※また、現在の中学受験は「<u>算数さえ強化すれば何とかなる</u>」という時代ではない。「<u>国語はできて当たり前</u>」にしておかなければならないだけでなく、「四教科の学習バランス」や「分野間の学習バランス」をも勘案(かんあん)し、適宜(てきぎ)「調整」しながら強化、補完等を図ってゆく必要がある。

■基本

①主語•述語

- ・一文一文、文意が正しく伝わるよう、主語・述語の整った文章を心掛けよう。 ②係り受け
- ・趣旨や文脈が乱れないよう、係り受けを意識して正しく表現する。
- ③誤字・脱字
- ・誤字・脱字の無いよう、「書きながら確認」する注意力が必要。

④句読点・符号は一字扱い

・一般に「句読点、符号等は一字扱い」が原則となっている。原稿用紙の書き方の決まりと、模試や入試での書き方の決まりとは異なるため、句点や読点を次行の冒頭に打たねばならない場合がある。 ⑤口語体(会話表現)や俗語を使用しない

• 💮 •

- ・「〜けど」、「〜じゃなく」、「あったかい」、「おんなじ」等の口語体は使用しない。また、「違くて」、「ばれる」等の俗語(ぞくご)も使用せず、「違い、知れる」などと言い換える。「むかつく」は俗語ではないが粗暴な印象を与えるので「腹が立つ」、「腹を立てる」などと言い換える。
- **⑥文体統一**・文体は**常体**(「**~だ、~である**言葉」)で統一する。 ※ちなみに「**です・ます言葉**」は「敬体」という。
 (⑦文中語句・自分の言葉
- ・「本文中の語句を使用して」とある場合には、本文中で使用されている語句をなるべく多く使用する。
- ・「自分の言葉で」とある場合には、説明に必要な語句を除き、本文中の語句はなるべく使用せず、自分の語彙(ごい)力を駆使(くし)して説明する。
- ⑧不明確な比喩(ひゆ)表現の使用は避(さ)ける
- ・例えば、「**海のような心の持ち主**」という表現は、たとえている内容が「広い、大きい、静かだ、穏やかだ、包(つつ)み込むような深さ、荒々しい……」というように受け取り方がさまざまに異なり、客観的な説明が成立しない。
- ⑨自分の使える漢字は使う
- ・普段の言語生活がそのまま一枚の答案に反映する。言葉に関わる姿勢を保って学習をしよう。
- ⑩無駄なく、正確な内容で表現する
- ・一文50~60字で無駄なく正確な内容と文脈で表現する力を身に付ければ、あとは「趣旨に沿った文 どうしのふさわしい連結」によって、「一文100字」であっても流れのよい趣意の正確な叙述(じょじゅつ)ができるようになる。「連結」の際に、「~で」、「~して」、「~ので」、「~が」を多用しないよう意識しよう。

■暗黙の前提(暗黙の了解) ※基本的な論理②『暗黙の前提』(p.4)参照!

・「わざわざ言明せずともわかりきった前提」を「暗黙の前提」という。記述上の高度な技術の一つとして、「暗黙の前提」の利用がある。簡単な例では、「建物の中から外へ飛び出す(12字)」という表現では、「建物の中から飛び出す(10字)」、あるいは、「建物から外へ飛び出す(10字)」、「建物から飛び出す(8字)」としても、意味的にほとんど違いは無い。文脈上、「飛び出す」行為に「中から外へ」の意味が暗黙のうえに了解される。ためだ。「暗黙の前提」を記述説明に利用する場合には、文章全体の流れや、文意、文脈を踏(ふ)まえ、文字数も勘案(かんあん)しながら適宜(てきぎ)表現の調整を行うとよい。

【記述力の練成技術】

■表現の本質

・開成中学で開示された模範解答に、記述解答の採点基準として、かつて次のように記されていたことがありました。「言葉の係り受けが正確であること、文章のつながりが適切であること、読みやすく誤字のない表記であることなども、重要な要素です(平成14年度/2002年度入試)」、「本文中の言葉や自分なりの言葉を使って、説得力のある文章を作りあげる力が大切です(平成15年度/2003年度入試)」、「解答にあたって求められているのは、…(中略)…正確な、伝わりやすい表現が工夫されていることです(平成16年度/2004年度入試)」。

・これを読んでわかることは、表面的には「単に機械的に切り貼りをしただけのような記述答案や、趣意のはっきりしない記述答案には十分な評価を与えられない」といった技術的な側面での評価基準です。しかし、一歩踏(๑)み込んでみると、そこにあるのは、「自分の考えをしっかりと持ち、それを論理的、かつ正確に、他者に対してしっかりと伝える力」を素養として備えた者に入学してきてもらいたいという、人間同士の生身(なまみ)のコミュニケーションを前提とした、開成中学の発するメッセージの深遠な本質です。

・普段、机に向かうばかりが勉強ではありません。時に外界に目を広げ、五感を働かせながら、一つひとつの事象や問題について、触れ、感じ、考えてみる。一つひとつの問題について、それを「自分の中でしっかりと受け止める」こと。そして、「自分が考えたことや感じたこと」を「他者に対し本気で伝えたいと欲(ほっ)する」こと。さらに、それを「工夫しながら表現し、正確に伝えんとする」こと。

・開成中学は、受験生に対して、実は何も特別高度なことを要求しているわけではありません。書くうえでも、話すうえでも、「伝えることは表現の本質」であり、社会を生きてゆく中で、人と人との関わりやコミュニケーションを根本に据(サ)えて、「伝える力の大切さ」という、ごく基本的で当たり前のことを認識し、そのうえで、将来をきちんと見据(サ)え、着実な歩みとともに、しっかりと学業に取り組んでもらいたいという、そんな意味のこめられたメッセージと受け取ることができます。

・「伝え合うこと」の意味をよく考え、それを自ら深く受け止め、言葉に関わる姿勢や取り組みを今一度見直し、普段の言語生活をより豊かに変えてゆくこと、自分自身を磨(みが)き、自分自身の生き方を見定めながら、未来に向けて意志的に歩みを進めてゆく、そんな自分自身に育ててゆくことが、学ぶ者の姿勢として大切です。

■《開成基準》で記述訓練に取り組む

・「正確な、伝わりやすい表現を工夫する」、「説得力のある文章を作りあげる力」。開成中学は特別に高度な記述力を要求しているわけではありません。求められているのは、「自分の考えをしっかりと持ちなさい」、「それを他者に対して正しく、確かに伝えられる自分でありなさい」、「基本を疎(はるそ)かにしてはいけない」、というだけの至極(にごく)当たり前のことに過ぎません。難関校に限らず、いずれの中学校を受験するにしても、これを《開成基準》としてよく心に刻(きざ)み、強く念頭に置いて記述学習に取り組むことで、君の記述答案の水準は今後、劇的に変化してゆくことでしょう。

・ちなみに開成中学では、「漢字の書き取り」については、「解答にあたって求められているのは、正確に書かれた読みやすい漢字であることです(平成16年度/2004年度入試)」としています。自分が書く文字についても、「伝える手段」の一つとしてあらためて捉(とら)え直し、いずれの中学校を受験するにしても、また、普段の生活においても、読み手のことを念頭に置いてきちんと書いて伝えられるようにしましょう。

・尚(なお)、現在、配点上、あるいは、内容を重視して採点する都合、入試においては「**漢字の書き取り** 問題ではトメ・ハネ・ハライは見ない」、「記述答案での『ら抜き言葉』の使用は問わない」、「句読点についても見ない」と公言する中学校が増えていますが、君たち受験生は、学ぶ者として、あくまで自分に厳(きび)しく、基本を疎かにしない《開成基準》を常からよく守って学び、対応してゆきましょう。 ぞくこ ※ら抜き言葉: 見れる、着れる、出れる、来れる、起きれる、食べれる、考えれる、決めれる等の俗語。

■記述指導

・集団指導や個別指導でいくら「詳細な解説」を受けたとしても、あるいは、先生から答案に「丁寧な添削(てんさく)」を受け、コメントを細々(にまごま)と熱心に書き込んでもらっても、その後の「仕上げ作業」が伴(ともな)っていないのであれば、いつまで経っても精度の高い記述答案を書き上げられるようにはなりません。返却された添削答案をさらりと眺(なが)めて、「ふうん……」で済ませてしまってはいませんか。

・塾の先生に、質問という形で、少しであっても時間を割(さ)いてもらい、大人の視点による指摘(してき)を受けながら、先生と生徒との生きた言葉での直接のやりとりを通して、両者が納得のいく水準、精度にまで記述答案を練(ね)り上げていくような取り組みを継続しないと、結局は「書きっぱなし、やりっぱなし」に終始し、本来的な記述力の向上を図ることは不可能です。継続的な訓練により、子どもたちの記述力、表現力がその最高水準に達するのは、まさに受験直前期の1月(あるいは、入試本番)です。塾の先生は、自分の担当する生徒たちが質問に来てくれるのを待ってくれています。遠慮(えんりょ)をしてはいけません。自身の記述力を磨(みが)き、最高水準にまで高めるために、受験直前に至るまで、塾(の先生)を徹底的に利用しましょう。・ただし、突然の訪問は避(さ)け、先生の都合を予(あらかじ)め確認し、依頼の気持ちを自分の言葉で誠実に伝えてください。そして、先生に解決を丸投げするのではなく、疑問について「何を

どう改めるべきか」を自ら熟考(じゅっこう)し、「自分なりの準備」を十分に済ませたうえで質問に

向かってください。そのうえで、「自分の考え」を、自信を持って先生にぶつけてみてください。



・ある主張(結論)が成り立つための大もととなる「本来の前提」を、「それとは合致しない別の前提」に すり替えたうえで論理展開すること。

- ・花子さん: 夏休みの宿題、もう全部終わったもんね!(前提: 自力で宿題を処理)
- ·愛子さん: 先生にバレなきゃいいね! (前提: 花子がズルい手を使って宿題を処理)
- 花子さん: もうっ! 違うってば! 意地悪!(結論:友情がさらに深まる……!)
- ・「花子さんは実際に自分一人の力で全ての宿題を早く片付ることができた(**正しい前提**)」のですが、愛子さんはその「**事実=前提**」を承知しながら、「花子さんが何かズルい手を使って宿題を早く片付けることができた」という「別の前提」に「わざと変更=すり替え」を行って意地悪く応答しました。
- ◎「前提のすり替え」は、選択問題においても誤答に誘導する手法としてしばしば用いられる。本文を流し読みや飛ばし読みをしていると「前提の誤り」を見抜くことができず、<u>判別を困難にする</u>。本文における「前提」と選択肢の説明における「前提」とが合致するかどうかを見極められるよう訓練しよう。

■基本的な論理④ 因果関係

・ある事柄が「原因(前提)」となり、その「結果」として別の事柄が引き起こされる関係を「因果関係」という。

・「勉強しないでこっそりゲームをしていたので(原因/前提)、怒られた!(結果)」

・読解学習においては、「原因」と「結果」との間の「関連性や連続性」をしっかりと掴みながら本文を読もう。日常においては、ものごとについて考える際に「論理的矛盾(むじゅん)や論理的飛躍」が起きないよう注意し、また、何か問題が起きた際には、「結果」から遡(きかのぼ)って「原因(前提)」を探り、確かめ、検討する、という手順を踏んで対処しよう。

◎ <u>因果の逆転</u>:選択問題においては、「受験生が多いから、塾が多い」という内容を「塾が多いから、受験生が多い」のように、本文における「本来の因果関係を逆転」させて説明し、誤答への誘導を図る場合がある。「本文中に書かれてあるか、無いか」といった「要素の有無」や「要素の正否」のみを判断基準にしていると「因果の逆転」に気づかない恐れがあるので注意。

■基本的な論理⑤ <u>矛盾</u>

・二つの主張のつじつまが合わないこと。論理的な食い違いがあり、筋が通らないこと。 撞着ともいう。

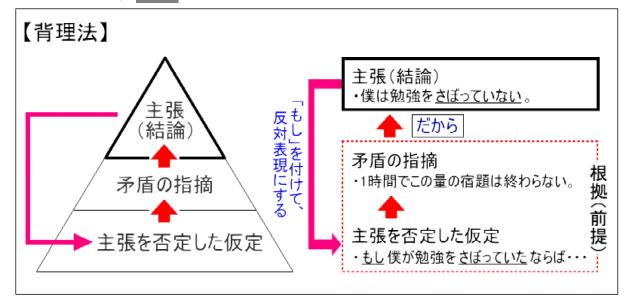
・昔、中国の楚の国で、矛と盾とを売っていた商人が、「この矛は、どんなにかたい盾をも突(つ)き通すことができる。また、この盾は、どんなに鋭利(えいり)な矛であっても突き通すことができない」と言って誇(ほこ)った。



すると、見物人が、「では、その矛でその盾を突いたらどうなるか」と問うたところ、商人は返答に窮(きゅう)してしまった。

- ・「この矛はどんなにかたい盾をも突き通すことができる」という主張[A]と、「この盾はどんなに鋭利な矛であっても突き通すことができない」という主張[B]は、論理的に整合しない。つまり、[A]の主張を「正しい」と認めた場合は[B]の主張が「誤(ぁゃま)り」となり、逆に[B]の主張を「正しい」と認めた場合は[A]の主張が「誤り」となって、二つの主張を両立させることが不可能なのだ。
- ◎選択問題においては、記憶や勘に頼らず、選択肢の説明が「<u>本文の内容と矛盾しないか</u>」、「<u>説明</u> そのものに論理的な食い違いは無いか」を、本文と照合しながら、論理的に検討しよう。

■基本的な論理⑥ 背理法



・「背理法」とは、「①: ある主張」について、「②: その主張を否定した仮定(『もし』を付けて反対表現にする)」を行い、それにより生じる「③: 矛盾」を示すことで「仮定の誤り」を導き、結論として「④: 当初の主張が正しい」ことを間接的に証明する方法です。ただし、主張(結論)が本当に正しいかどうかは検証によって確かめられる必要があります。

①「お母さん、僕、勉強サボってないよ」

【主張】

②「もし勉強をサボっていたのなら……」

【主張を否定した仮定】

③「1時間でこれだけの宿題が終わるはずがないよ」

【矛盾の指摘】

④「だから、僕は勉強をサボってないよ」

【結論=主張】

※さぼる:フランス語の「サボタージュ(意業)」を語源とし、「意ける」という意味で大正時代から使われているが、俗語(ぞくご)なので、記述答案やあらたまった場面では使用すべきでない。 **※俗語**(ぞくご):あらたまった場面では用いられないような、品の無い、くだけた言葉。

・別の例文: ①「私は<u>犯人ではない」</u>→②「<u>もし</u>私が<u>犯人なら</u>」→、③「<u>犯行</u>時刻に、犯行現場であるA町にいたはずだ。でも、その時私はB町にいたし、証人もいる」→④「だから、私は犯人ではない」

◎日常においても、私たちは無意識的に背理法を使って思考したり、会話したりすることがあります。 上記の例文と図を参考に、背理法を使った簡単な例文を考えてみてください。

 ①「
 」【主張】

 ②「
 …」【主張を否定した仮定】

 ③「
 」【矛盾の指摘】

 ④「
 」【結論=主張】

◎選択問題での応用:「もし『ア』が正しいとすると、『▲』という矛盾が生じる。だから、『ア』は正解ではない」というように選択肢を背理法で消去できる場合があるので、是非練習してみてほしい。

①空欄Aに選択肢『ア』は入らない。

【主張】

② も しAに 『ア』 が入るなら……、

【主張を否定した仮定】

③時間の流れから見て、文脈が不自然だ。

【矛盾の指摘】

④だから、空欄Aに『ア』は入らない。

【結論=主張】

【抜き出し問題での正解の推定字数】

■抜き出し問題

- ・「抜き出し問題(書き抜き問題)」は、「設問の要求を正しく把握し、正しく方向づけて考え、要求に合致(がっち)する箇所(かしょ)を正確に判断し、過不足なく正しく書き写す」問題です。
- ・抜き出す箇所の字数条件については、例えば①「20字以内で」と字数幅を自分で判断する必要のある場合や、②「15字以上20字以内で」のように一定幅が提示される場合、また、③「7字ちょうどで」のように完全に字数を限定される場合等があります。
- ・特に、①の「〇字以内で」という条件での抜き出し問題を指導で扱う際に、生徒に「正解の文字数は何文字以上あると推定されるか?」と問うと、大抵(たいてい)の場合、「『最低でも8割以上』と教わった」と答えます。この「指定字数の8割以上」という基準は本当に正しいのでしょうか。実際には何文字を基準とすればよいのでしょうか。

■作問基準

- ・「○字以内で」のような条件が設定されている問題について、これまでの経験をあらためて振り返ってみてください。「20字以内で」、「25字以内で」、「30字以内で」、「35字以内で」というように、そのほとんどが**きりのよい字数**であったことに思い当たります。
- ・作問者が正解と決定した箇所の字数が仮に「10字」である場合、作問者によって、あるいはその時々によって字数条件を変えて「15字以内で」と設定したり、「10字以内で」と設定したりすれば、解答者側は一定しない判断基準に困惑するだけでなく、学習上も大変不都合です。
- ・そこで、作問者側は、「10字以内で、という条件下では正解の字数は6字以上」、「15字以内であれば11字以上」、「20字以内であれば16字以上」、「50字以内であれば46字以上」というように、一定の字数範囲を暗黙 (あんもく)に決め、これを一つの「作問基準」としています。

■正解の推定字数

- ・以上により、「『正解の推定字数』は、指定字数から4字を引いた字数以上=『マイナス4字以上』」となり、これを今後の判断基準としてください。
- ・受験生の多くが認識している「正解の推定字数は8割以上」という基準で判断しようとすると、例えば、「25字以内という条件下では20字あれば正解」、「30字の場合は24字、35字では28字、50字では40字、70字では56字あれば正解」のように誤って判断してしまう恐れがあります。「正解の推定字数は8割以上」という基準は、「20字以内で」という指定字数を超える字数条件では通用しません。
 - ■抜き出し問題での『正解の推定字数』は、(指定字数の)『マイナス4字以上』」! あるいは、『指定字数を加えて計5字以内』!
 - ■抜き出し問題での『正解の推定字数』は、指定字数の『8割以上ではない』!
- ・『正解の推定字数は、マイナス4字以上』、あるいは、『正解の推定字数は、指定字数を加えて計5字以内』と判断基準を決めておけば、その基準に合わない解答範囲を明かな誤りと判断できます。また、再検討によって、より精密に解答範囲を絞(Lig)り込むための一つの視点ともなります。
- ・ただし、この基準は絶対的なものではなく、ごく希(まれ)に、字数的に基準を外れる場合があります。 このような問題では、受験生が「設問の要求」に対して、各種情報に基(もと)づき、解答箇所を「ここからここまで」と正確に、かつ客観的に判断する力があるかどうかを試されていると考えてよいでしょう。
- ■前提事項に注意 ※基本的な論理②『暗黙の前提』(p.4) 参照!
- ・記述問題において、例えば、設問で「<u>太郎</u>の気持ちを説明しなさい」と求められているのなら、<u>太郎</u> <u>を「暗黙の前提」として説明すればよい</u>のだから、<u>文脈上必要な場合を除き</u>、あらためて「太郎は…、 太郎は…」のように何度も書き重ねる必要はない。「前提事項の重複記入」に注意が向かないと、必 然、制限字数を圧迫して解答要素をはじき出してしまう。
- ・これと同様に、「抜き出し問題」においてもまた、<u>設問や本文</u>における「前提事項」に注意が向かないと、『ここから、ここまで』という、要求に正確に対応した範囲特定を誤る恐れがあるので注意しよう。

【就】の正しい字形

・漢和辞典に掲載(けいさい)されている漢字は、中国の「康熙字典」という漢字辞典を典拠としています。「就」の字は、「九(だいのまげあし・おうにょう)」という部首に属していますが、この部首に属する漢字には二つの系統があります。漢和辞典を見てみると、「九(だいのまげあし)」という部首の項目内に、一つ目の系統として、「九(オウ)」という字が掲載され、一方、二つ目の系統には「九(オウ)」の右上に「点」を打った「尤(ユウ)」、「就(シュウ)」等が掲載されています。「九(オウ)」には「まがったすね、せむし」などの意味があり、足や体に障害を負って不自由であるさまを象(かたど)った象形文字です。一方、「尤(ユウ)」は「とがめる、もっとも、とりわけ、すぐれている」などの意味をもった指事文字であり、両者の由来は全く異なっています。

・康熙字典では、第一の系統(象形文字)にある「九(オウ)」の字は「少し右に飛び出してから下ろす」 形となっていますが、、第二の系統(指示文字)にある「尤(ユウ)」は「真っ直ぐ下ろす」形となっていま す。このことから、同じく第二の系統にある「就」もまた第十一画は「真っ直ぐに下ろす」ことになり、これを「正字」とします。

・ところが、康熙字典には、「少し右に飛び出してから下ろす」字形の「九(オウ/象形文字)」が、「<u>九(ユウ/指示文字)の異体字」として別に掲載されてもいることから、「就」の字もまた「少し右に飛び出してから下ろす」字形で書いても、「異体字」としては間違いであるとは言えないのです。</u>

※以上の内容は、大修館書店「漢字文化資料館Q&A:262」に掲載された記事に依拠しています。

・ただし、小学生の場合、6学年配当漢字である「就」は、当然異体字ではなく、「真っ直ぐに下ろして書くのが正しい」として正字を学ぶ必要があります。

※異体字:正字(標準の字体)とは異なるが、意味や発音、用法が同じであるため通用する字体。

■視覚的誤認について



・ゴシック体は、太く角張った線でデザインされた書体で、見やすく目立つため、見出しや広告などによく使用されています。左図(5ず)のとおり、第11画目の縦線が第10画目に触れているだけであっても、線が太い(線幅が広い)ために右に飛び出しているように錯覚(5つかく)されます。この錯覚は、文字が小さくなるほど強くなる傾向(けいこう)にあります。左図を目から離(はな)して見てみてください。また、ラインマーカー(マーキングペン)の太字を利用して、ゴシック体を真似(5ね)て3cm角程度の大きさで「尤(ユウ)」の字を書いて、錯覚の状況を自分でも確かめてみましょう。

■教科書体



筆先を斜めに置いた形から、筆をわずかに 右に返し、そのまま真っすぐに下ろすように 書かれたデザイン。 ・教科書体とは、小学校の教科書で用いられ、手書き文字に近い字 形をもとにデザインされている、「書く学習」のための書体です。

・「就」の字の第11画目の入筆部を見てみましょう。第10画に触れるようにして、毛筆のように斜(なな)めに太い「筆あと」がついています。しかし、よく見ると、第11画の線は決して斜め右下に長い線として飛び出してはいません。入筆部の上辺だけを見てしまうと、第11画目が斜め右下に飛び出しているように錯覚されてしまいます。この錯覚は、文字が小さくなるほど強くなる傾向(けいこう)にあります。左図を目から離して見てみてください。

・第11画目は、「乳」や「乱」の部首である「おつにょう(つりばり)」とほぼ同じ形をしています。「おつにょう」を書くときに、私たちが目立つほど右に長く飛び出して書かないのと同じことです。

※「枕(まくら)」や「沈(しず-む)」の旁(つくり:漢字を構成する右側の部分)については字源が明らかになっていませんが、ことさらに目立つほど右に飛び出して書く理由がありません。錯覚という観点から見ても同様です。

■【就】の正字



・小学校で習う『就』の正字」は①のほうですから、極端に右に飛び出した②のように書いてはいけません。ただし、②は「異体字」といって、一般にはよく使用されている字形です。

■基本的な論理⑦ 飛躍(論理的飛躍)

・正しい筋道を追わずに論理が飛び越して進むことを「論理の飛躍」という。「前提」と「結論」との間に隔(へだ)たりがあり、因果関係が不明確な場合が多い。

【前提①】花子はおしゃれだ。

【前提②】花子は女の子だ。

【結論】 だから、女の子はおしゃれだ。

・花子以外の女の子の性質を前提に置かずに、「女の子というものは、一般に皆おしゃれなものだ」と 「飛躍した結論」を導いています。

・一例に過ぎないものを無理に「一般化」したり、「結論」を支える「前提」が不確かであったりと、「論理的飛躍」は日常的にも起こりやすい。対人関係においても、これによって齟齬(モご: 意見などの食い違い)や摩擦(まさつ)が生じてしまわぬよう注意しよう。

◎選択問題では、誤答に誘導するために「論理的飛躍」の手法がしばしば用いられる。思い込みが強かったり結論のみを急いでいたりすると「飛躍」に気づきにくく、判別も困難になる。「前提」と「結論」との間の「関連性・連続性・因果関係」を的確に捉(とら)え、また、「そうかもしれないし、そうでないかもしれない」といった「可能性の視点」も持って、客観的、総合的に判断しよう。

◎選択肢の説明内容が「『言い過ぎ(行き過ぎ)』、『大げさ』、『極端』だと感じられるものは選ぶな」、「『強い』印象やポジティブな印象を与えるものを選べ」、「『断定表現』や『限定表現』のあるものは選ぶな」、「『全て・どれも・みな』」のような全称(ぜんしょう)表現が用いられた選択肢は選ぶな」といった、思考によらない「印象や感覚によって判断する手法」や「安直な機械的処理法」が小学生(受験生)に指導されているケースが相当に見受けられる。本文の内容(前提)に基(もと)づいて論理的に検討し判断するというのではなく、その時その場だけの印象や感覚、あるいは機械的処理法によって解答を判断するというのは、鉛筆やサイコロを転がして解答を決めるのと違いはない。

■基本的な論理® <u>論点のすり替え(論点違い/論点ずらし)</u> ※『だって論法』(p.11) 参照!・論点とは、「議論の中心となる問題点」のこと。<u>論点を意図的に変更することを「論点のすり替え」</u>という。

・花子さん:愛ちゃん、あんた、約束守ってねって、言ったでしょ!(正しい論点)

・愛子さん:ふんっ! 花ちゃんだって約束破ったことあるじゃん!(別の論点)

・花子さんは「**愛子さんが約束を守らなかったこと**」を<u>論点</u>として追及しているのですが、愛子さんはその**論点を**かわし、「過去に花子さんが約束を守らなかったこと」を<u>新たな論点として都合よく変更</u>してしまいました。

◎日常においては、特に互いに意見を主張しあう議論の中で、つい論点が逸れてしまったり、そもそ も論点が明確でなかったりといった経験をすることがあるだろう。自分の据(+)えた論点はもとより、相 手が「何を論点として主張しているのか」をしっかりと押さえながら、感情に流されず事実に基(もと)づいて論理的に主張を展開するよう心掛けよう。

◎また、自分の。誤った意見を正当化したり、正しい主張に見せかけたりするための**詭弁の一種**として「**論点のすり替え**」が用いられることがあるので、議論をする際にはこれも念頭に置いておくとよい。 ※詭弁(きべん):誤っていることを意図的に正しいと思わせるように仕向けた、ごまかしの議論。

◎選択問題においても、誤答に誘導する手法の一つとして「**論点のすり替え**」がしばしば用いられる。 「本文における各所の論点」、「設問における論点」、「各選択肢における論点」について、それぞれを しっかりと押さえ、それを軸(ヒ<)に正しく方向づけて思考しよう。

【選択肢の判別 111の視点】

- ■以下の判別法によって全ての問題が解決するわけではありません。視点や検討力が未発達な子ど もたちに提示できる、ものごとを多角的、論理的に検討する際の視点の例としてご参考ください。な お、一つの選択肢に複数の手法が用いられている場合があります。
- ■『*印』の項目は関連手法12種です。主要な手法にこれを合わせると、合計123種となります。

★(1) 論外

・設問の要求に対し、選択肢の説明における内容が明らかに間違っている。「読み取れない」、「本文 の内容に沿(そ)わない」、「嘘(ラそ)」、「根拠無し」、「情報無し」、「無関係」、「趣旨違い」、「方向違い」 など、比較的除外しやすい。

※「選択肢を全部検討する時間は無いので、消去法によって最後に残った選択肢を正答と判断して よい」と指導されている受験生が少なくないが、各選択肢の吟味(ぎんみ)が不十分だと、(2)「カモフラー ジュ」や、(42)「暗黙の前提」等、「正解でありながら正解と思えなくする手法」が用いられた正答肢を 「確信を持って消去」してしまう恐れがあるので注意が必要。

※「設問で何が要求されているのか」を確かめもせずに、また、「本文を照合せず、記憶に頼(たょ)って 選択肢どうしの読み比べだけで判断する」受験生が相当に存在することを作問者が承知のうえで作問 していることを忘れてはならない。

★(2)カモフラージュ(カモ/偽装)

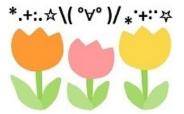
・文中語句を敢(ぁ)えて使用せずに言い換えたり、抽象化したり、あるいは一歩踏み込んだ説明をし たりすることで、「正解でありながら正解と判断されないように偽装(ぎそう)してある」。十分な検討をせ ずに、専(セーンば)ら「印象や感覚」、あるいは「機械的処理法」に頼(たメ)って解答を決める受験生が相当 に存在することを作問者は心得ている。(1)「論外」として早々に除外してしまわぬよう注意しよう。普 段から「言い換え」や「抽象化」、「踏み込み理解」の視点を持って読解学習や記述学習に取り組んで

※カモフラージュ: 偽装。ある事実を覆い隠すために他の体裁を業うこと。カムフラージュ。(フランス) 語)

★(3)ファンタジー♡(お花畑♡/おとぎの国)

・事実に基(もと)づかない空想的な虚構(きょこう)や、都合のよい勝手な解 釈や突飛(とっぴ)な解釈が尤(もっと)もらしく述べ立てられている。素材文を 「はじめに結論ありき=自分が期待する結論に沿うように都合よく想像 *.+:.☆\(°∀° しながら読む」のではなく、「事実を踏まえて客観的、論理的に読み、捉 (とら)える | 習慣を身に付けたい。(1)「論外」の一種。

※ファンタジー:現実にはありえない、幻想(げんそう)的、空想的な世界。 ※お花畑:一面に広がるのどかな花畑から連想される、喜びと幸福に満 ちあふれ、まばゆく、美しくきらめく愛と光の洪水(こうずい)の中で、うっとり とした気分に浸(ひた)りながら、希望の歌を口ずさみ、舞(ま)い、踊(おど)つ



ては、心地よく安楽に暮らしてゆける、永遠の平和と安息が約束された、素晴らしい夢の世界。また、 理想にとらわれて現実を認識することができない人が生きる、夢想や幻想(げんそう)の世界。 ※突飛(とっぴ):常識からひどく外れていて、思いがけないさま。

★ (4) キラキラワード(うっとり♡ワード/キラキラフレーズ) ☆ \(°▽°)/ ☆ \(°⊙°°)/ ↔ \(°⊙°°)/ ↔ \(°⊙°)/ ↔ \(°⊙°°)/ ↔ \(°⊙°°)/ ↔ \(°⊙°°)/ ↔ \(°⊙°°)/ ↔ \(°⊙°°)/ ↔ \(°⊙°) ・「力の限り(全力で/一生懸命に/精一杯)・決してくじけない(あきらめない)・困難に向き合う(立ち向 かう/を乗り越える)・意志を貫(つらぬ)く・信念を貫く・現実に向き合う(を受け入れる)・前向きに生きる・ 未来を見つめる(切り開く/へと踏(ふ)み出す)・自分を信じる(見つめ直す/大切にする)・自分の可能 性を信じる・自分自身に向き合う(打ち勝つ)・自分らしく生きる・自分に正直に生きる・ありのままの自 分・一瞬一瞬を大切に・成長をとげる・絆(きずな)を大切に(を結ぶ)・真の友情を育(はぐく)む・心の支え となる(よりどころとする)・共に支え合う(理解し合う)・手を取り合って(携(たずさ)えて)・心に寄り添(そ) う・生きがいとする・幸福をかみしめる(つかみとる)」などのように、精神力によればいかなる障害も克 服(こくふく)できるとする「精神論」や、「人間の生き方・生きる姿勢」に通ずる表現等、情緒(じょうしょ/じょう ちょ) や信念に訴(うった) えかける語句を作為(さくい)的に使用して目立たせ、誤答肢に誘導する。美しくキ ラめくものに幻惑(げんわく)されて正常な判断力を失わないよう注意しよう。(109)「おびき寄せ」の一種。 ※幻惑(げんわく):ありもしないことに惑(まど)わされること。 きょうない。それである。

【時間配分のしかた】

※以下は一つのモデルです。状況により、適宜アレンジしてください。

《 以下の全作業を、試験や演習の開始直後30秒以内に行ってください! 》

【1】問題全体の把握

・今、自身の眼前にある料理の種類や分量を予め確かめてから食事を始めるのと同様に、 今、眼前にある問題の全体像を掴(つか)みます。

①大設問の構成と問題内容を確認

・問題用紙と解答用紙を見ながら、大設問の数や、選択問題、抜き出し問題、記述問題、 漢字や知識の問題など、問題構成や分量などを瞬時に概(おおむ)ね掴みます。

②文種、文章量を確認

・「文学的文章」、「論理的文章」、「随筆文」、詩や短歌・俳句などの「韻文」など、文種に よって読み方や処理の仕方が異なります。文種を確認することで頭脳を予め準備状態に 置き、適宜(てきぎ)頭脳の切り替えが行えるよう備えます。

【2】時間配分

・問題全体の把握が済んだら、各大設問ごとに逆算的視点で時間配分を行います。

①時間配分を行う

・以上にもとづき、制限時間のうち5分程度を予備としてとっておき、試験時間内に全問解 答することを前提に、残りの時間を各大設問に適宜速やかに割り当てます。

②時間の記入

・配分した時間は、問題用紙の大設問を示す番号の上などに書き記しておきます。

【3】時間配分の仕方

(1)漢字·知識問題

- ・漢字や知識問題が独立した形で出題されている場合は、これを文章題より先に時間配 分します。ちなみに、漢字の読み書きの問題が10問の場合、受験者に知識があれば反射 的に解答できる種の問題ですから、1~2分を配分します。必要以上に語句・知識問題に 時間を充てると、後々読解問題や記述問題を処理する時間が圧迫されてしまいます。
- ・知識関連の問題が独立した形式で複数出題されている場合は、それらを「合わせて何 分」というように時間設定します。

(2)文章題

- ・自分が比較的得意とする文種であれば、その大設問の処理時間は短めに配分します。
- ・訓練状況や、文種、文章量、本文の内容、記述問題の分量等によって配分する時間も その都度変わりますから、普段から時間短縮のための訓練を徹底して継続し、配分する 時間を適宜調整できるようにしておきましょう。

《 以上の全作業を、試験や演習の開始直後30秒以内に行ってください! 》

・以上の作業が終わり次第、速やかに問題処理に入ります。随時時間を確認し、目標とする処理時間 を強く意識して問題解決に当たってください。



【時間短縮訓練】

※「時間短縮訓練」は、個別指導等により<u>平常より「精度重視型」の取り組みが『日々継続的に行われている』ことを前提としています</u>。この取り組みが実現していない状況下では、以下の「時間短縮訓練」は十分な効果を見込めない可能性がありますのでご注意ください。

- ・「解答スピードだけは速いが、読解や解答の精度が低く、答案全体の仕上がりが雑」という特徴が、 特に国語を得意としない受験生に共通して見受けられます。「スピード」を優先するあまり、「読解と解 答の精度」を犠牲(ぎせい)にしてきた結果です。「精度より、解答欄を全て埋めきることにこそ重点を置 く」というのは、国語学習における本末転倒です。そればかりか、「本文を通読せずに解けばよい」とい う非本質的な手法や、普遍性の無い安直な小手先テクニックに幻想(げんそう)を抱き、それを「よすが」と して、ますますこの「底なしの悪循環」から逃れられなくなっていきます。
- ・「精度を犠牲にせず制限時間内に全問解決する」には、学習におけるそれまでの取り組み方を<u>「精度重視型」に完全転換</u>し、併(ぁゎ)せて<u>「時間短縮訓練」を日々着実に継続する必要</u>があります。<u>平常</u>における訓練無しにテストや入試本番の時だけこれを実現することなどありえません。

【自宅での演習時における時間短縮訓練】

- ①時間配分を行う
- ②ストップウォッチやタイマー等で時間を計測する
- ③本文を通読する
- ④読解と解答の精度を上げることに重点を置く
- ⑤入試本番を意識し、良い意味で自分を心理的に追い込み、全力で問題解決に当たる
- ⑥問題処理中は常に時間を意識しつつ、頭脳の回転力を高速で維持する
- ⑦頭脳の回転力をさらに高めるため、解ける問題の処理をどんどん進める
- ⑧訓練開始当初、時間内に解き切れない場合は延長時間をとり、<u>自分の頭を使って最</u>後まで徹底的に考え抜く
- ⑨得点は精度の結果なので当初は気にしすぎず、1か月後の自身の進歩・向上を明確に見据(す)えて、それを当面の目標とする
- ⑩訓練を重ねるごとに、徐々(じょじょ)に延長時間を短く設定していく
- ・精度重視型の取り組みに転換した当初、暫くの期間、個々の状況によっては<u>目標の時間内に全ての問題処理が終わり切らない</u>ことがあります。その場合には、**躊躇**(ちゅうちょ)**せずに延長時間を設けて** ください。大人の力を借りる前に、「<u>まずは限界に挑(いどむ)む気持ちで、自分の頭を使って最後まで徹底的に考え抜く力の育成</u>」を最優先してください。
- ・そして、時間短縮のための訓練を重ねるごとに、延長する設定時間を徐々に短縮してください。元来人間には、訓練によって能力や技術を確実に向上、進歩させる力が備わっています。また、一定期間内での訓練機会を多く設けるほど、時間短縮の能力向上が確実に早まります(指導経験上、断言します)。訓練を開始する時期や受験生個々の状況にもよりますが、一つの目安として、通常三か月ほどで、精度を犠牲にすることなく、時間内に解答欄全てを埋め切ることができるようになります。
- ・国語の偏差値が50前後以下の受験生の場合、学習の取り組み方を「スピード優先・精度犠牲型」から「精度重視型」へと完全転換して1~2か月の間、テスト本番で制限時間内に「文章題二題のうち一題がまるごと解答できない」といった現象が起きる場合があります。しかし、それを恐れて再び「スピード優先・精度犠牲型」の取り組み方に戻してしまうと、「底なしの悪循環」に舞(ま)い戻り、そのままそこから脱することなく入試本番を迎(むか)えることになるでしょう。



■当方自身の経験として、集団指導時代(~2002年)には、「演習は常にテスト形式で臨み、制限時間が来たら、解けていても、解けていなくても、そこで一切手をつけてはならない」といった方法で生徒たちの解答スピードの向上を図っていました。しかし、この方法だと、生徒たちは自分が処理できなかった問題について「自分の頭を使って最後まで考え抜く」習慣がつかず、「問題の解決を大人に丸投げ」し、解説を聞いてそれでわかったつもりになって済ませてしまう、といった弊害(ヘいがい)を感じるようになったという経緯があります。

★(5)ホイホイトラップ(撒き餌)

・本文中の「キーワード」や「キーフレーズ」、また、(4)「キラキラワード」や「魅力的・理想的な語句」 等を華(はな)やかに散りばめて目立たせ、逆に「正答肢」には「言い換えられた語句」を使用してカモフラージュ(偽装)して誤答肢におびき寄せる。「読む力」や「検討する力」が不足し、目立つ言葉や断片情報にばかり気を取られて感覚的な判断をしがちな受験生が誘導されやすい。自分から喜んで罠(ゎな)に掛かっていくようなマネが繰り返されぬよう、思考力をしっかりと身に着けよう。「何度も何度もやすやすと同じ手に引っかかりまくり!」でいてはいけない。(109)「おびき寄せ」の一種。

※ホイホイ(と): 獲物(えもの)がたやすく、次々と罠(ゎな)に掛(ゕ)かって来るさまを表す擬態語。

※トラップ: 罠(わな)。

※撒き餌(まきえ):魚や小鳥などをおびき寄せるために、餌をまくこと。

★(6)ウソ(違うこと言ってる/デタラメ/でっち上げ)

・説明内容そのもの、あるいは説明の一部が完全な虚偽である。表現や文脈の調整によって、それらしい、説得力のある説明に見せかけてあるので、「本文中のキーワード」につられたり、「説明から受ける印象や感覚」によって安直に判断したり、あるいは、「記憶に頼(たよ)って選択肢の読み比べだけで判断」したりすることのないように。また、単眼的に「要素の有無」や「要素の正否」だけを基準として判断するのも危険。「選択肢の説明の一文一文を読解」し、「多角的に分析・検討」する地道な訓練を継続しよう。(1)「論外」の一種。

※でっち上げ:事実でないことを本当らしく仕立て上げること。捏造。

★(7)読み取り不能(ヨミフ/根拠無し/情報無し)

・その説明内容を一切本文から読み取ることができない。ただし、正解でありながら言い換え等により正解と思えなくする(2)「カモフラージュ」や、(42)「暗黙の前提」等の手法が用いられた「正答肢である可能性」も排除してはならない。(1)「論外」の一種。



★(8)根拠不十分(前提不十分)

- ・一見、本文の内容に即(२<)した適切な説明に思えるが、その説明全体、もしくは、その説明に含まれる一部要素が、 $\boxed{ + 分な根拠に基(もと)$ づかずに導かれた内容」となっている。「確かな根拠(前提)に基づく確かな結論」を導く論理的な吟味 (ξ) 人み)の訓練を徹底しよう。(31)「論理的飛躍」の一種。
 - ・太郎君: 花子と愛子は、やっと仲直りしたようだね。
 - ・次郎君:二人は絆(きずな)を今以上に深めて、互いに支え合って生きていくのさ。
- ・次郎君は、花子と愛子二人の間に今後生起するさまざまな状況や変化を前提に置かずに、あるいは、不十分な根拠をもとに、今後の二人の発展的な人生について「飛躍した判断」を下しています。

★(9)<u>意味不明(イミフ/ちょっと何言ってんのか分からない/曖昧)</u>

・何が言いたいのか、さっぱり意味がわからない。あるいは、意味内容が曖昧で捉えにくい。ただし、 正解でありながら言い換(か)え等により正解と思えなくする(2)「カモフラージュ」や、(42)「暗黙の前 提」等の手法が用いられた「正答肢である可能性」も排除してはならない。(1)「論外」の一種。

★(10)展開無視(ワープ/展開不一致)

・本文における「時系列」、あるいは、「展開や変化」に合致しない説明となっている。「制限時間内に全問を解き切るためには本文を通読してはいけない」と指導されている中学受験生は少なくないが、「本文の情報を部分的、断片的に拾(03)い上げていくような読み方」、あるいは、「記憶に頼(t4)って選択肢の読み比べだけで判断する」、といった「スピード重視・精度犠牲型」の取り組み方を続けていても対処は困難だ。本文全体における「大きな流れ=時系列や展開・変化、構成」等を通読段階でしっかりと掴(07)か、「この時点ではまだそのような心情を抱(01)にない」、「この時点では以前の主張を修正している」というように、問われている箇所(01)を「基点」として「それ以前に起きたこと(述べられていること)と、それ以後に起きること(述べられていること)」等との連続性や関連性を全体視点で判断できるよう訓練を積んでゆこう。

※展開:時間や筋道に沿って出来事や話が進行していくこと。

★(11)<u>視点違い(視点ずれ/よそ見禁止)</u>

・選択肢の説明において、無関係な「視点要素」が組み込まれている。例えば、絵画を見るきに「目を向ける点(視点)」が「芸術性」なのか、あるいは「技法」なのかによって捉(とら)え方は変わる。あるいは、「素人(Lろうと)」や「専門家」など、「観察する立場(視点)」によっても捉え方は変わる。「何に着目するのか」、あるいは、「どのような立場から見るのか」によって物事の捉(とら)え方は様々に変わるので、本文の内容をよく踏(ふ)まえて、その「視点要素」がそもそも必要なのかどうか、関連のあるものなのかどうかについてよく検討しよう。

※視点:キーワードや概念(がいねん)など、ものごとを考えるうえで着目する点。物事を観察する立場。

★(12)<u>論点違い(ロンチ/論点すり替え)</u> ※基本的な論理®『論点のすり替え』(p.7) 参照!

・「設問における論点」とは「無関係な論点にすり替え」て説明されている。また、「論点を微妙にずらしてある場合」や「論点が曖昧(ぁぃぁぃ)な場合」もあるので注意。「見せかけの説得力」に騙(だま)されないよう、「設問における論点」をまず正しく掴(っゕ)み、「正しく方向づけて論理的に思考する」訓練をしっかりと積んでおこう。また、記述説明する際や、普段の会話、議論等においても、論点を明確に据(す)えたうえで、書き、話し、主張するよう心掛けよう。

※論点:ものごとを論じるうえでの問題点。議論の中心となる問題点。

★(13)方向違い(崖からバンジー/方向ズレ/見当違い/前外れ/明後日の方向)

・「設問の要求」に対し、「異(にと)なった方向性での説明」となっている。「設問の要求」を正しく把握(は \underline{b} もく) せず、「思考の方向」を正しく定めぬままに判断しようとする受験生が相当に存在することを作問者は心得ている。見当違いの方向に全力で突き進んで崖(がけ)から派手に転落せぬよう、設問の要求を正しく把握し、正しく方向付けて思考する訓練を怠(おこた)りなく。(1)「論外」の一種。

★(14)要素不足(部品不足/部品落下)

・説明が完結するための要素や条件が不足している。「要素不足」に気づかれないよう、表現や内容を微妙(びみょう)に調整してある場合が多い。また、問われている箇(か)所の前後数行を読むだけでは「求めるべき要素」を読み取れない可能性があるので、全体視野で本文の文脈や展開、構成等を捉(とら)える訓練を積んでおこう。

★(15)<u>余計(蛇足/異物混入/お邪魔虫)</u>

・説明を成立させるための要素は全て揃(そろ)っているが、実は密かに「偽要素」も付加してある。「偽要素の埋め込み」に気づかれないよう、表現や内容を微妙(びみょう)に調整してあることが多く、「正しい要素が全て含まれていれば正解」といった機械的、単眼的な判断法では見抜けない。恐れがある。

★(16)表面的説明(形式的説明) ※(64)『踏み込み不足/寸止め/あと一歩』参照!

・例えば、「ある倉庫が火事になった」という事柄(ことがら)について、その理由が、①「燃える物がそこにあったから」という説明、②「漏電(ろうでん=電流が回路以外にもれて流れること)が起きたから」という説明、あるいは、③「漏電によって発火し、資材に引火したから」という説明を受けた場合とを比べると、「根本的な原因への踏み込みの度合い」が異なるため、納得できる度合いもまた大きく異(こと)なる。このように、選択肢の説明において、①のように、上辺(うゎベ)をなぞっただけの表面的、あるいは形式的な説明に止(とど)めて、「根本的・本質的な説明」にまで踏(ふ)み込まずにおく説明のしかたをする。説明内容自体に矛盾や誤(ぁゃま)りがあるわけではないため、つい上辺(うゎベ)の説明に引っ張られて誤答に誘導されてしまわぬよう注意しよう。尚(なお)、説明における踏み込みの度合いを調整し、①よりは深いが、②のように「本質(根本・核心)にまではあと一歩」というところで止(とど)める応用手法については、(64)『踏み込み不足/寸止め/あと一歩』を参照のこと。

★(17)主観(どっかの誰かさんの考え)

・本文の内容に沿(ਣ)った客観的な内容とは異なる、無関係な主観的内容の説明であったり、主観的な「偽(にせ)要素」が組み込まれていたりする。客観的な視点や客観的な把握(はあく)力が未発達な小学生を誘導しやすい。相対的視点をもって「自分の見方」と「他者の見方」とを区別し、「この説明は不特定他者の主観であって、筆者(作者・登場人物)自身の考えとは無関係である」と見抜けるようになろう。(109)「おびき寄せ」の一種。

※主観:自分(その人)だけの考え。

※客観:自分の考えから離れて、他者の立場から考えること。

【速読訓練(フラッシュリーディング)】※全脳型分析的速読法

・科学的には、「<u>右脳によって高速で文章を読む、いわゆる『速読術(速読テクニック)』は、『高度な読書力』の向上には繋(つな)がらない</u>」という研究結果が出されています(速読トレーナー自身が速読トレーニングを受けているという『深刻な笑い話?』もあります)。「大意 (たいい=あらまし) を何となくつかむむ練習」にはなりますが、本来的な文章読解には何の効果もありません。そもそも「本来的な速読力」とは、大量の書物を読破した経験を持つような人が備えた特殊、かつ高度な能力であって、形だけを真似(まね)た訓練をいくら積んでも同質の能力を備えることは原理的に不可能なのです。文章の内容を速く正確に理解するには、まずは平常における「適切な速度での通読訓練」と、「右脳と左脳のフル駆動(くどう)による高度な分析(ぶんせき)的学習」が最低要件となります。

・左脳をフルに駆動させる「読解学習=分析的学習」を済ませた後、続けて「高速トレース」と「再現学習」によって当該(とうがい)教材の内容把握を確実なものとし、そのうえで、学習の最終的な仕上げとして、また、「より実戦的な速読力のための訓練」として、『フラッシュリーディング(右脳と左脳とを同時に駆動させながら分析的に速読する訓練)』の導入をお勧(サナ)めします。

・脳内で一字一字を音声化して読む「黙読(もくどく)」をすると「音読」と同じほどの時間を要してしまうため、『フラッシュリーディング』では「視読(しどく) = 脳内で文字を音声化せずに読むこと」を行います。「文における意味上のまとまり(ブロック)ごとに、写真を撮(と)るようにしてまるごと右脳に投射(とうしゃ:文字情報を視覚によって瞬時に脳に取り込むこと)しながら、次々と高速で視点移動をして本文を辿(たど)ってゆきます。ただし、それと同時に、左脳をもフルに駆動させ、逐次(ちくじ:順を追って次々に)、および瞬時に内容整理をしながら、分析的に本文を読み進めます。文章の内容把握は事前に済んでいるので、この頭脳作業は『全脳型の分析的速読を主眼とした訓練』となります。

※フラッシュリーディング: 2018年(平成30年)、当時インターナショナルスクールに通学していた当方の生徒(6学年女子)が名付けてくれました。

①『フラッシュリーディング』においては、「一文字一文字を丁寧に追う読み方」をせず、文章における「一文」を構成する「いくつかの意味内容のまとまり」を意識しながら、そのブロック内の数文字分をまるごと、『写真を撮(と)るようにして瞬時に脳に投射』しながら、後に続くブロックへと順次滑(なめ)らかに視点移動してゆく読み方をします。

※例えば、この項内、①の文の場合、「符号を除いた文字数」は約130字、「**意味上のまとまり**」 は10前後です。

②「読点(、)と句点(。)の位置」を意識し、「文」や「文脈(語や文どうしの論理的なつながり)」に意味的な断絶が起きてしまわぬよう『投射読み(フラッシュリーディング)』を進めます。

③慣れないうちは、一定のリズムをつけて、各ブロックをゆっくり視点移動させるとよいでしょう。視点移動のしかたやスピードは柔軟(じゅうなん)に変えて構(かま)いません。

④気張(きば)って機械的な目の動かし方をするとすぐに目が疲れますから、背筋(せすじ)を張り、気持ちを落ち着け、ある程度文章から目を離して『物理的・認知的視野』を広く保ちながら『投射読み(フラッシュリーディング)』をしてください。

⑤ストップウォッチやタイマー等で時間を計測してください。同じ文章で「フラッシュリーディング」を数度繰り返すと、その都度投射スピードが高速化されます。慣れるにしたがい、「数ブロックを一度に『投射』」したり、「一文」や「数行」をまるごと同時に脳に投射」してみましょう。脳の回転力に勢いがついてくると、速く視点移動するほうが却(ゕぇ)って読みやすくなります。

⑥読解学習で使われた様々な「分析(ぶんせき)アンテナ」をフルに稼働(かどう)させ、右脳と左脳を同時に働かせながら、高速、かつ正確に文意、文脈を辿(たど)りつつ、逐次(ちくじ)、および瞬時に「情報どうしの関連付け」や「内容整理」を行い、「文章全体の多角的・総合的な把握」を目指します。いわゆる「速読術(速読テクニック)」とは異なる「本来的な速読訓練」を積むと、数行(数文)をまとめて読み進めながら正確に内容把握ができるようになります。(ただし、これについては相当な訓練が必要です)

⑦以後も教材ごとに同様の訓練を継続することで、全体視野の向上、情報の取り込み方や分析・整理のしかた、処理力や処理スピード等の向上に徐々(ヒュヒュ)に反映してゆきます。一本一本の教材を大切に扱い、そして最大限に活用しましょう。

⑧テストや入試本番に向けたシミュレーション(模擬練習)として、「速読(フラッシュリーディング)」をしながら同時に線引きやチェックをする訓練も導入してみましょう。複眼的・全体的視野で要所を押さえながら読解する訓練となるため、近視眼的・形式的な線引きや見当外れのチェック等の無駄(むた)な作業が格段に減り、「読解に有効な本来的な『分析的チェック作業』」が身に付きます。また、「線引きやチェック作業自体が主目的となって本文の内容把握がぞんざいになる本末転倒」に陥(おちい)ってしまっている受験生にとってもその改善に有効です。

※尚(なお)、「高速トレース」や「ロ頭での再現学習」、「速読(フラッシュリーディング)」、「分析的チェック作業」の訓練用に、別途何も書き込みされていない状態の当該教材を予(あらかじ)めコピーして利用するとよいでしょう。

【再現学習(口頭でのアウトプット)】

・確実に『(高速)トレース』ができたかどうか、学習による理解、獲得が十分であったかどうかは、<u>トレース作業後に、学習内容や解法、記述内容等を子どもに『口頭で再現(アウトプット)』させてみれば</u>確かめることができます。

・『高速トレース』に続き、『再現学習』においては、①「設問の要求に沿って」、②「トレース作業において確認、獲得された情報を一気に総合し」、③「その判断を言語化によって論理的に、かつ的確な表現で『口述(アウトプット)』します。その説明は、聞き手がよく理解できる内容であり、話者と聞き手の双方(そうほう)が納得のいくものであることが重要な条件です。この時、『高い再現性』が認められない場合は子どもの理解度やトレースの質が十分でないと判断できますから、指導側や保護者の側が、子どもの理解度や表現力をいっそう高めるための取り組みにあらためて注力することができます。

・指導する側は「教えたつもり」になって自己満足に陥ることのないよう常に自戒しなければなりませんが、子どもにとっては「<u>わかったつもり・学んだつもり」で済(ナ)</u>ませてしまわぬよう、「本来的な復習」の一環として、ご家庭における『トレース学習』と『再現学習』の導入をお勧(ナナ)めします。

※尚(なお)、本来は『高速トレース』の後に『再現学習』を行いますが、慣れないうちは先に『再現学習』を行い、しっかりと解法や学習内容等を『ロ述(アウトプット)』できることを確認したうえで『高速トレース』を行うとよいでしょう。

■左脳は言語や論理、分析、判断等の機能を受け持ち、右脳はイメージや感覚、全体的な情報処理、全体把握等の機能を受け持っています。

【読書について】

・「うちの子は読書が好きで、一冊の本を20分ほどで読んでしまうのに、国語が全然できない」といったご相談をよく受けます。「右脳によって作品を楽しんで読む」ことそれ自体は、感性や情緒(じょうしょ/じょうちょ)、想像力等を育むうえでの効果も高く、大いに推奨(すいしょう)されるのですが、思考力や分析力、論理性が要求される国語の読解問題に専(もっぱ)ら右脳によってセンス的に対処することは極めて困難です。「左脳をよく働かせ、主体的に自分の頭を使って考えながら読み、解き、書き、獲得(かくとく)し、また、口述によって論理的に説明する」取り組みにも注力しましょう。また、一編の文章題を徹底的に読解、分析する取り組みは、不十分な理解のままに何冊も本を読むより、読解力の向上においてはよほど効果的であると言えます。

【音読について】

・「『音読が効果的だ』と聞いてずっと続けてきたのに、うちの子は国語が全然できない」といったご相談をよく受けます。文章の内容把握が十分に為(な)されていない状況でいくら音読に時間を割(さ)いても、「滑(なめ)らかに字面(じづら)を追いながら発声する練習」にはなっても、それが<u>読解力の向上に直結しているとは限りません</u>。文章の内容把握には心理や主張の理解、文脈や展開の把握など、多角的視点や論理的思考力が求められ、相当な集中力や根気も必要です。もし国語学習に音読を導入される場合には、<u>右脳と左脳をフルに駆動させた分析的な読解学習を十分に済ませた後に行うほうが、獲得したことを昇華(しょうか)させ、「自分の力」へと変換させるうえでの効果が高く、合理的であると言えます。</u>

※昇華(しょうか):物事が、ある状態からさらに高度な状態へと飛躍すること。

【読み聞かせについて】

・「子どもが幼い頃には『読み聞かせ』もしたし、音読もさんざんさせてきたのに、うちの子は国語が全然できない」といったご相談をよく受けます。子どもが「自らの頭をよく使いながら主体的に人の話を聞く姿勢を育てる」視点が無いままに一生懸命読み聞かせを続けていても、逆に子どもに「人の話を受け身の姿勢で聞き、ものごとを受け流す習慣が身に付いてしまう」といった弊害(ヘいがい)も一つの側面として考えられます。子どもが他者の話を主体的に聞き、獲得する姿勢が育つよう、もっと左脳を働かせる工夫をしながら読み聞かせをしてあげてください。

★(18)<u>コピペ(フェイク/ダミー)</u>

・本文中から一部をそっくり引用して説明らしく見せかけてあるだけで、実は設問の要求には何も答<u>えていない</u>。「本文に書いてあるから」、「線部の近くに書いてあるから」といった安直な判断の仕方を せぬよう注意。(109)「おびき寄せ」の一種。

※コピペ:コピー・アンド・ペーストの略。俗語(ぞくご)。他の文章から必要な部分の写しを取り、それを別の場所に貼(は)り付けること。

※フェイク: 偽物(にせもの)。本物に似せて偽装した作り物。ダミー。

★(19) 直前トラップ(直前に書いてあるもん♡)

・問われている箇所(かしょ)の「直前」に書かれてある内容をそっくり引用して説明してあるだけで、実は設問の要求には全く対応していない。問われている箇所の、特に「直前」に書かれてある事柄(ことがら)にしか注意が向かない受験生が相当に存在することを作問者は心得ている。「線部の直前に書いてあるから」とか、「本文にそのまま書いてあるから」といった単純な理由で選択してしまわないこと。「『設問の要求』を正しく捉(とら)え、正しく方向づけて思考する」訓練、「自分の頭をよく使って読み、よく考えて解く」訓練を怠(おこた)りなく。(11)「コピペ(フェイク/ダミー)」、(109)「おびき寄せ」の一種。

★(20) 真逆(逆のこと言ってる)

・選択肢の「説明そのもの」、あるいは、「選択肢に含まれる一部」が、本文とは「真逆の内容」となっている。本文を照合せずに、専(もっぱ)ら記憶に頼(たょ)って選択肢どうしの読み比べばかりに注意を向けていても正確な判断は困難なので、客観的で論理的な検討力をしっかりと鍛(きた)えておこう。

【だって論法】

・相手の主張とは別の論点を持ち出し、自分の言動を正当化したり、言い逃れをしたり、自分の責任を帳(ちょう)消しにしようとしたりして強弁(きょうべん)する論法。

①お前だって論法(ブーメラン論法)

- ·ジョン:おい、カンニングするなよ!
- ・ポール:お前だって、今、俺の答え見てるし! (論点のすり替え/言い逃れ)

②あいつだって論法

- ・警官:あれま、20キロも速度オーバーだぁ。今日はツイてなかったねぇ…(^O^)/」
- ・運転手: そんなぁ、勘弁(かんべん)してよお……。あっ! ほら、見てよ! <u>あいつだって</u> すっごいスピード出してるじゃん! 早くあいつ捕(っか)まえてよっ! (論点のすり替え /言い逃れ)

③みんなだって論法

- ・ママ: いけません。 ゲームなんか買ってあげません!
- ・子ども: ねええ、買ってよお。みんなだって持ってるんだからあ! (正当化/強弁)
- ※「だって」に代えて「~も/~の場合も」等が用いられることも多い。
- ※強弁(きょうべん):無理に理屈をつけて言い張ること。強く言い訳(わけ)をすること。
- ※基本的な論理®『論点のすり替え』(P.7)参照!





★(21)誇張(盛ったでしょ)

・説明の内容が、実際よりも程度を大きく捉え直して説明してある。小手先テクニックに見られるような、思考もせずに「言い過ぎだ、大げさだ。だから消去!」などといった安直な判断のしかたをせず、「内容に正しく見合った説明となっているかどうか」を検討、判断する力を養(やしな)ってゆこう。

※誇張(こちょう):ものごとを過度に大きく、または小さく形容して表現すること。

ぞくご

※盛(も)る:上辺(ラゎベ)を飾(ゕざ)り繕(つくろ)って、実際よりも話を大きく見せかけること。俗語。

※小手先テクニック: その場をしのぐための、普遍性のない、にわか仕込みの浅はかで安直な技術。

★(22) 誇張カモ(言い過ぎ?/大げさ?/極端?)

・小手先テクニックに見られるような、「『言い過ぎ・大げさ・極端』な印象を与える選択肢は選ぶな」といった、思考を前提としない「印象や感覚による安直な判別法」が指導されている小学生(受験生)が相当に存在することを作問者は心得ており、それを逆手(ぎゃくて)に取り、作為(さくい)的に『誇張表現』を用いて目立たせることで、正解でありながら正解と判断されないように偽装(ぎそう)してある。本質的な思考力と検討力とを養い、「内容に正しく見合った説明となっているかどうか」を判断できるようになろう。(2)「カモフラージュ」の一種。

※誇張(こちょう):ものごとを過度に大きく、または小さく形容して表現すること。

★(23)強調カモ(こそ?/まさに?)

・小手先テクニックに見られるような、「『~こそ/まさに~』のような『強調表現』が用いられた選択肢は選ぶな」といった、思考を前提としない「安直な機械的処理法」が指導されている小学生(受験生)が相当に存在することを作問者は心得ており、それを逆手(ぎゃくて)に取り、作為(さくい)的に『強調表現』を用いて目立たせることで、正解でありながら正解と判断されないように偽装(ぎょう)してある。思考もせずに「強調表現があるから言い過ぎだ、大げさだ。だから消去!」などと安直に判断せず、本質的な思考力と検討力とを養い、「内容に正しく見合った説明となっているかどうか」を判断できるようになろう。(2)「カモフラージュ」の一種。

★(24) 断定(断言/言い切ったな!) ※(25) 『断定力モ』参照!

・本文においては「~だろう(推量)」、「~かもしれない(可能性)」、「~ようだ(推定)」といった「非断定的な認識や判断」が読み取れるにもかかわらず、選択肢の説明においては「正しいもの・確かなもの・完全なもの」として「断定(断言)」されている。ただし、必ずしもその説明に『絶対に・必ず・常に・決して』といった明確な『断定表現』が用いられているとは限らないので、本文との照合と検討により、「断定」と「非断定」とを、あくまで『内容によって判断』できるようになろう。

★(25) 断定カモ(絶対に?/必ず?/常に?/決して?) ※(24) 『断定(断言)』参照!

・小手先テクニックに見られるような、「『絶対に・必ず・常に・決して』のような『断定表現』が用いられた選択肢は選ぶな」といった、思考を前提としない「安直な機械的処理法」が指導されている小学生(受験生)が相当に存在することを作問者は心得ており、それを逆手(ぎゃくて)に取り、作為(さくい)的に『断定表現』を用いて目立たせることで、正解でありながら正解と判断されないように偽装(ぎそう)してある。思考もせずに「断定表現があるから言い過ぎだ、大げさだ。だから消去!」などと安直に判断せず、本質的な思考力と検討力とを養い、「内容に正しく見合った説明となっているかどうか」を判断できるようになろう。(2)「カモフラージュ」の一種。

★(26)限定(そんだけぇ~♡/限定的一致) ※(27)『限定力モ』参照!

・本文における内容について、その「一部」についてしか説明されておらず、そのため、『限定的には 一致している』が、本来求められる説明としては不完全である。説明内容の方向性自体は間違っていないため、本文との照合が不十分だと誤認を招いて誘導される恐れがある。記憶に頼(たょ)って選択肢どうしの読み比べだけで判断せず、本文との照合と検討を徹底しよう。

★(27)限定カモ(だけ?/のみ?/しか?) ※(26)『限定(そんだけぇ~♡)』参照!

・小手先テクニックに見られるような、「『だけ・のみ・しか』などの『限定表現』のある選択肢は選ぶな」といった、思考を前提としない「安直な機械的処理法」が指導されている小学生(受験生)が相当に存在することを作問者は心得ており、それを逆手(ぎゃくて)に取り、作為(さくい)的に『だけ・のみ・しか』などの限定表現を用いて目立たせ、正解でありながら正解と判断されないように偽装(ぎそう)してある。思考もせずに「限定表現があるから言い過ぎだ、大げさだ。だから消去!」などと安直に判断せず、本質的な思考力と検討力とを養い、「意味や内容に正しく見合った説明となっているかどうか」を判断できるようになろう。(2)「カモフラージュ」の一種。

【高速トレース(全脳型高速処理訓練)】

※「トレース学習」は、個別指導等により、読解内容、設問の要求把握、解法、記述構成や表現、その他知識事項に至るまで、子どもが<u>当該(とうがい)範囲(はんい)の学習内容を十分に理解、獲得しえた状況を前提として行います</u>。そのため、子どもが「なんとなくわかったつもり」の状況だけでは「トレース学習」は成立しませんのでご注意ください。

※「対話型」ではなく、講師が一方的にまくし立てるようなスタイルの授業を受けている場合には、子どもにはその解説内容が頭に入っていないことが多く、その場合、『高速トレース』は不可能です。子どもに解説内容が理解できているかどうかを確かめるため、まずは「ロ頭で再現」させてみてください。

・左脳は言語や論理、分析、判断等の機能を受け持ち、右脳はイメージや感覚、全体的な情報処理、 全体把握等の機能を受け持っています。国語の読解学習においては、左脳の機能だけで問題を処理できるわけではなく、右脳をも同時に駆動(<とう)させて問題解決に当たる必要があります。

・読解や解法等の論理的・分析的学習により「頭脳の回転力」が低下する恐れがあるため、当該範囲の学習後に「高速トレース」を行うことで「頭脳の回転力」を回復させ、また、継続的な訓練により「思考の高速化」を図ります。さらに、実戦における脳の機能的シミュレーション(模擬練習)を兼ね、即時の問題解決力の発揮へと繋 $(n\alpha)$ げていきます。

■「高速トレース」の方法

①高速での追跡確認

・学んだ内容や解法などを高速で確認する。

②時間を計る

- ・ストップウォッチやタイマー等で**トレース時間を計測**する。自分をよい意味で心理的に追い込み、普段眠らせている**潜在力を発動させる**。
- ③可能な限り高速で、あるいは瞬時に行う
- ・頭脳の回転力を回復させる。また、思考の高速化訓練、思考の切り替え訓練ともなる。

④声に出さない

・頭の中でだけで作業を行う。

⑤言語化は最小限にとどめる

- ・頭の中でしゃべると、声に出すときと同じ思考時間を要し、思考が高速化されない。
- ⑥右脳と左脳のいずれをもフルに駆動(くどう)させる
- ・逐次(ちくじ=順次)に、そして瞬時に、分析的に情報を整理、把握し、判断する。
- (7)「獲得する」意識をもつ
- ・学んだことを流してしまわず、「自分のもの」にし、「自分の力に変換」する。
- 8「高い再現性」
- ・トレースを終えた後に、各問題の考え方や解法を口頭で確実に説明できること。
- 9正確、確実に
- ・トレース内容の正確性は、口頭での再現時における正確性にそのまま直結する。
- ⑩聞き手に対し「しっかりと伝える」
- ・トレースを終えた後の「ロ頭での再現学習」において、<u>説明内容をしっかりと聞き手に理解されることを念頭に置く。「伝える力」の訓練の一環でもあり、記述力や表現力にも反映する。</u>

・ある程度訓練を積むと、「文章題1題分を30秒以内にトレースできる」ようになりますから、指導や学習に導入される方はこれを一つの基準としてください。トレース作業の高速化と実質化に慣れると、学習内容によっては塾での授業中のほんのちょっとした時間(一問あたり数秒)を使ってトレースを行い、現場でその都度復習、および獲得作業を済ませてしまうことも可能です。

・指導する側においても、子どもの口頭での再現状況を確かめることで理解度の確認ができ、適宜補 完指導を行うことができます。また、当該(とうがい)箇所(かしょ)における指導の不備を認識できた場合に は、指導法を改善・改良してゆくための手がかりともなります。

※「高速トレース」という名に、「高速での全脳型追跡・処理・獲得訓練」といった意味と、「思考機能の向上と高速化、潜在力の発動、獲得力・再構築力・再現力・表現力の向上」といった狙(ねら)いを込めました。

【偽金貨はどれだ?】

■問題 たくさん

・金貨が沢山入った袋が三つあります。そのうちの一袋は全て偽金貨です。本物の金貨は1枚100gですが、偽金貨は1枚当たり本物より10g重くなっています。偽金貨の袋がどれかを探したいのですが、秤(はかり)は一度だけしか使えません。偽金貨の袋を探すには、どうすればよいでしょう。



■答え

- ・一つ目の袋から1枚、次に二つ目の袋から2枚、続けて三つ目の袋から3枚金貨を取り出し、計6枚の金貨を秤に載(o)せればよい。
- ①もし三つの袋が全部本物の金貨だとしたら、取り出した金貨6枚分の重さを足すと、**600gちょうど**になる。
- ②もし一つ目の袋に入っているのが偽金貨なら、取り出した偽金貨1枚分だけ、つまり、10g重くなるから、秤では610gになる。
- ③もし二つ目の袋に入っているのが偽金貨なら、取り出した偽金貨2枚分、つまり、**20g重くなる**から、秤では620gになる。
- ④もし三つ目の袋に入っているのが偽金貨なら、取り出した偽金貨3枚分、つまり、30g重くなるから、秤では630gになる。

■口頭でのアウトプットに挑戦!

・上の解説内容をもとにして、今度は大人を聞き手として、あなた自身がこの問題の解き方を口頭で説明してみてください。ただし、あなたの考え方が聞き手に正確に理解されるよう、説明する内容を予(あらかじ)めよく整理したうえで、論理的に、また、伝わりやすさを工夫して説明に臨(のぞ)みなさい。

★(28) 全称(全部が全部!) ※(29) 『全称力モ』参照!

・ある事柄(ことがら)について、「一部についてはそう(▲)である」のように、本文においては筆者の「限定的な認識や判断」が読み取れるが、選択肢の説明においては「全てがそう(▲)である」といった内容にすり替えられている。ただし、このような場合においても、「全て/どれも/みな」のような『全称表現』が必ずしも直接用いられているとは限らないので、記憶に頼(たょ)って選択肢どうしの読み比べだけで判断せず、本文との照合と検討により、<u>あくまで『内容によって判断』</u>できるようになろう。

※全称:「全て・どれも・みな」のような、ある範囲全体の物事について断定する表現。

★(29)全 称カモ(全て?/どれも?/みな?) ※(28)『全称』参照!

・小手先テクニックに見られるような、「『全て・どれも・みな』のような全称表現のある選択肢は選ぶな」といった、思考を前提としない「安直な機械的処理法」が指導されている小学生(中学受験生)が相当に存在することを作問者は心得ており、それを逆手(ぎゃくて)に取り、作為(さくい)的に『全て・どれも・みな』のような全称表現を用いて目立たせ、正解でありながら正解と判断されないように偽装(ぎそう)してある。思考もせずに「限定表現があるから言い過ぎだ、大げさだ。だから消去!」などと安直に判断せず、本質的な思考力と検討力とを養い、「意味や内容に正しく見合った説明となっているかどうか」を判断できるようになろう。(2)「カモフラージュ」の一種。

※全称表現:「全て・どれも・みな」のような、ある範囲(はんい)全体の物事について断定する表現。

【悪魔の証明】



- ・晋三君:悪魔なんか存在するわけない!
- ・清美さん:じゃあ、悪魔が存在しないことを証明してみせなさいよ!
- ・晋三君:むぐぐつ……。
- ・清美さん: <u>証明できないんだから、悪魔は存在する</u>ってことじゃないの!
- ・晋三君:どうやって調べれば証明できるんですかっ!!!
- ·清美さん: 疑惑(ぎゃく) はさらに深まった!
- ·晋三君:ずるいよ! 悪魔の罠(Þbな)だ!
- ・「悪魔の証明」とは、証明することが困難な事柄に対して「存在しないこと」の証明を求める詭弁 $(e^{-(k)})$ 。「あること=存在すること」を証明するには実際に事例を集めればよいが、「ないこと=存在しないこと」を証明する事例を集めるのは事実上、ほぼ不可能である。
- ・清美さんは、議論以前に「悪魔は存在する」とまず結論づけ、この結論を前提として、「もし不在が証明されるなら悪魔が存在しないと認めてもよい」と、もともと証明困難な選択肢をダミーとして敢(ぁ)えて提示し、譲歩(じょうほ)の余地を与えるふりをして相手を「二分法の罠(ゎな)/p.34(5)参照」に掛け、人身攻撃と印象操作によって貶(ぉとし)めつつ、相手の排除、排斥(はいせき)を謀(はか)っています。
- ・本当は二つの選択肢以外にも、「存在するかどうか分からない」という別の選択肢もあるのですが、詭弁として批判や反論に利用されるだけでなく、人身攻撃や印象操作、排除、排斥、差別等の目的にも利用される「悪魔の証明」では、こうした「他の可能性」については完全に無視します。
- ※ 詭弁(きべん): 誤っていることを、意図(いと)的に正しいと思わせるように仕向けた 誤魔化しの議論。
- ※排除(はいじょ): 受け入れられないものをその場から無くすこと。
- ※排斥(はいせき):受け入れられないものをその場から遠ざけること。

◎例文の「悪魔」という語を「宇宙人」や「空を飛ぶペンギン」などに読み替えてみよう。 また、「僕はカンニングをしていない」、「私は犯人ではない」といった論題についても、 読み替えて論法の不適切さを確かめよう。

★(30)お楽しみ箱(びっくり箱/気絶フェスティバル)

★(30) <u>お楽しみ和(いつ) マロックの</u>
・設問形式の一つとして、「本文全体の内容の説明」、「文章全体の表現上の特色」等について適切なものを選ぶといった問題については、通常大設問内の最終問題

「コルヴェヤカ ていることが多く、照合と検討に予定外に時間を取られてしまう恐れていることが多く、照合と検討に予定外に時間を取られてしまう恐れていることが多く、照合と検討に予定外に時間を取られてしまう恐れていることが多く、照合と検討に予定外に時間を取られてしまう恐れていることが多く、照合と検討に予定外に時間を取られてしまう恐れていることが多く、照合と検討に予定外に時間を取られてしまう恐れていることが多く、知らないのでは、 容等を速(すみ)やかに確認する必要がある。



■本文と照合、検討する必要のある項目については、「背景・事情」、「本文の内容」、「心情・心情変 化」、「葛藤(かっとう)」、「人物像」、「人物どうしの関係性」、「視点人物」、「場面・構成」、「時間軸(じ <)」、「回想部」、「展開・変化」、「成長・生き方」、「主題・要旨」等の読解関連についての他、「会話表 現の特徴や効果」、「文章の特徴や効果」、「情景描写(びょうしゃ)の特徴や効果」、「一(ダッシュ)」や 「……(リーダー)」等の符合(ムニンラ)の使われ方等の描写全般について、さらに、「象徴(レュラセュō)」や「暗 示 | 等の描写(ʊょうl・ゃ)技巧(ぎこう)について、「比喩(ひゅ)の有無や、その使用頻(ひん)度 | 、「擬音(声) 語・擬態語の有無や、その使用頻度」、「歴史的現在」、「皮肉」、「反語」、「逆説」等の修辞(レゅうじ)に 関するものなど多岐(たき)にわたる。全体視点で様々な「分析アンテナ」を働かせながら通読する訓練 を地道に積んでおこう。

※修辞(しゅうじ):言葉を効果的に使って表現すること。その技術。レトリック。

・筆者(作者)、主人公、第三者等、「誰の視点から語られているか(描かれているか)」を問われる。

【象徴】

・本文において、一見さほど重要でなく思われる部分的な描写であるが、実は「主題」や「人物の心 情」等と深く関連づく、作品上重要な意味や役割を与えられたものごと。 情景描写以外にも、日常あり ふれた器具、飲食物、色、形状、音、臭い、味、感触、人物の言動、様子、また、生き物の様子など、 人間の五感や感情等を通して描かれる種々(しゅじゅ)のものが、作家の意図と工夫により「象徴素材」と して利用される。「**象徴する内容**」については、その物事から受ける「一般的なイメージ」で説明できる わけではないので、あくまで「本文の内容との重ね合わせ」による精度の高い解読訓練が求められる。

【象徴問題の例】

・問題本文の最終行にある、主人公である「私」の「とりあえずウミガメのスープを仕込 **もう。**」という言葉が、以下のように、「私」の今後の生き方への思いを象徴する。

【私が本当に求めている、見た人の胸に真に届き、生きていく気持ちを支える力を持 った絵をいつか描(か)けるようになるために、自分を支えてくれている人達やさまざま なものへの思いを胸に、一日一日を大切に生きてゆこう】

※『ウミガメのスープ』(宮下奈都)~『サピックス 10月度マンスリーテスト(平成30年/2 018年10月実施)』の【大設問4番】、および、『四谷大塚 第3回 合不合判定テスト(平 成30年/2018年9月実施)』の【大設問1番】にて同場面が出題。

【<u>暗示</u>】

・情景描写や種々の事象描写によって、その後に起こる「事件」や「展開」を 予 め読者にそれとなく **ほのめかしておく手法。**伏線(ឆくせん)。暗示内容がその後に具体的な結果や役割として明らかとなる 場合を、俗(ぞく)に「伏線回収」と呼ぶことがある。

【比喩(喩え)】

- ①直喩(明喩):「Aは(まるで・あたかも)B~(ようだ・みたいだ)」等のように、「はっきりと比喩である ことを示した言い方」。「ようだ・みたいだ」といった語が用いられることで、隠喩(いんゆ)に比べて与える 印象はソフトとなる。例:「先生は(まるで) 鬼のようだ(鬼みたいだ)!」
- ②<u>隠喩(暗喩):</u>「ようだ・みたいだ」のような「比喩であることを直接表す言葉」を用いずに、「AはBだ」 のように喩(たど)えて言い切る。直喩よりも鋭(するど)く、強い印象を与える。例:「先生は、鬼だ!」
- ③擬人法(活喩):人間でないものを、人間や、人間の動作や様子に喩(たと)えて表現する方法。親近 感や生き生きとした印象を与える効果がある。「**救急車が(人間ではない主語)→悲鳴を上げている** (人間の動作)」、「冬将軍(冬の寒さの厳(きび)しさを、将軍の険しく厳しいさまにたとえている)」など。

【消えた1.000円の謎】

■問題

・三人の客がレストランで食事をし、一人10,000円ずつ、合計30,000円を支払 (// いました。客の一人が、「少しまけてよ」と持ちかけると、レジ係は店主から「5, 000円を返金してよい」と言われました。するとレジ係は、5,000円だと3人で割 り切れないと考え、こっそりと2,000円を自分のポケットに入れ、客には3,000円 だけを返金しました。



・さて、客は一人9,000円ずつ支払ったことになるので、支払いの合計金額は27,000円です。これに レジ係がくすねた2,000円を足すと、合計29,000円になります。客が最初に支払ったのは30,000円 だったはずです。1,000円はどこへ消えてしまったのでしょう。

■答え

- ・近平君:店主が5,000円の値引きを認めたのだから、本来客側は25,000円を支払えば済んだは ずだ。にもかかわらず、客が支払った金額は27,000円となった。では、この2,000円分の金額は一 体どこから現れたのか。
- ・倍伝君:レジ係が2,000円をくすねさえしなければ、客は25,000円を支払うだけでよかったのだか ら、その「2.000円分はレジ係のくすねた金額」に当たるんだよね。
- 近平君:だとすると、問題文にある「27,000円に2,000円を足す」という計算は、「レジ係のくすねた」 2,000円」を2回足すということになるだろう。
- ・倍伝君:なるほど。問題文自体にウソが仕込まれているんだ。「総額30,000円のお金の動き」とし て見るのなら、客側に返金された3,000円が計算に含まれていないのも、そもそもおかしい。
- 近平君:本当の計算としては、「店の売り上げとなる25,000円」に「レジ係の手に渡る 2,000円 | を加え、さらにそれに「客に返金された3,000円 | を加えると、問題文にある「客が最初に支 払った30,000円」と一致する。
- ・倍伝君:よし、問題文を正してみるよ。「客は一人9,000円ずつ支払ったことになるので、支払いの 合計金額は27,000円です。ただし、この金額には、レジ係がくすねた2,000円分、つまり、本来はレ ジ係が客に返金すべき2,000円分が含(ふく)まれていますが、客側はそれを全く知りません。この 『店側に動いた(客が支払った)27,000円』に『客側に動いた(実際に返金された)3,000円』を加え ると、合計金額は30,000円となり、客が店に最初に支払った金額と一致します。」
- ・倍伝君:ところで、問題文に虚偽の計算が仕込まれていたことは確認できたけれど、どうしてそれ に気づくことができなかったのだろう。不思議だなあ……。
- ・近平君:問題文にある「客の支払った27,000円」という表現は、つい「客側の視点」で一方向的に 文脈を捉(とら)えてしまう。それで、問題の読み手はそこに意識が強く引っ張られて、逆に「店側の 視点」から見たお金の流れが把握(はあく)しづらくなるんだ。※アンカリング
- ・倍伝君: 確かに、さっきの説明のように、「客側が支払った27,000円は、店側が受け取った27,000 円」だと視点を切り替えて捉(とら)え直せば、店側から見たお金の流れが確認できて理解が簡単だ ____ ものね。 計算上の誤(ぁゃぉ)りがすぐにわかった。
- ・近平君:ところが、「視点が固定されて切り替えができずにいる」と、「客側が支払った27,000円に はレジ係のくすねた2,000円分が含まれている」という「前提条件」が読み手の思考からすっぽりと 抜け落ちてしまう。だから、読み手は「レジ係のくすねた2,000円」が二重に加算されていることに気 づけず、筋道(サピみち)を見失って宙(ちゅう)に浮いたようになってしまうんだ。 ※前提操作(『前提 の消失/前提の隠匿(いんとく:かくすこと)』)
- ・倍伝君:はじめは訳(ゎゖ)がわからなくて狐(きっね)につままれたようだったよ。「問題文自体に虚 偽が仕込んである」だけでなく、「心理的な誘導(ゆうどう)トリック」も使われていたのか。作為(さくい) 的に表現を操作して読み手の視点を固定し、その後の判断に歪(ゆが)みを生じさせる「暗示トリッ <u>ク」にかかってしまった</u>、というわけだね。 ※アンカリンク
- ・近平君:おまけに、思考に筋道を立てるうえでの重要な情報である「前提」の一つを見失わせて混 乱させる「論理トリック」も仕組まれている。※前提操作(『前提の消失/前提の隠匿』)
- ·倍伝君:「客側はレジ係の盗(ぬす)みを全く知らない」という状況も、「レジ係がくすねた2,000円を 足す」という虚偽の計算を読み手に信じ込ませるための暗示材料となっているね。
- ・近平君:しかも、その条件だが、「これにレジ係がくすねた2,000円を足すと」という表現のしかたに よって偽(にせ)の計算条件がさも当然のようにして与えられると、読み手は、今度はこの情報を前 提の一つとして新たに筋道を立て直そうと試みる。だが、そもそも「偽の前提条件」を基(もと)にして 計算が合うはずがない。これもまた論理的誘導の一手法なんだ。 ※前提操作(『条件トラップ』)
- ・倍伝君:物の怪(け)の変幻(へんげん)のように、妖(ぁや)し気(げ)に立ち現れたり消えたりを繰り返す 「前提の変幻」に翻弄(ほんろう)されて、考えれば考えるほど、いっそう混迷(こんめい)の淵(ふち)に深 く陥(ぉちい)ってしまうというわけか……。それにしても、ものごとを理解するには「視点の切り替え」 や「相対的視点からの検討」が大事なんだね。それと、「国語力」と、「論理的思考力」もだ!
- ※物の怪(もののけ):人にとりついて祟りをする妖怪・死霊・生霊の類。
- ※変幻(へんげん): 出没(しゅつぼつ)や変化をすばやくすること。
- ※翻弄(ほんろう):思いのままにもてあそぶこと。
- ※『心理操作術(4):アンカリング(初期値提示誘導)』、『基本的な論理③:前提のすり 替え』、『(45)条件トラップ』を参照!

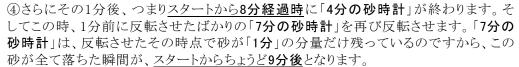
【二つの砂時計】

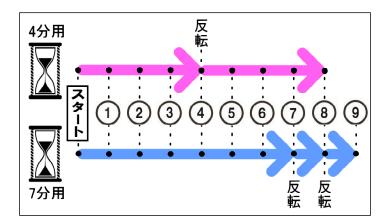
■問題

・ここに二つの砂時計があります。一つは「4分用」で、もう一つは「7分用」です。この二つの砂時計を用いて「9分」を計りたいのですが、どうすればよいでしょう。

■答え

- ①まず、二つの砂時計を同時にスタートさせます。
- ②「4分の砂時計」が終わったら、それを反転させます。この時点でスタートから4分経過しています。
- ③その3分後、「**7分の砂時計**」が終わったら、それを反転させます。この時点でスタートから**7分経過**しています。





■口頭でのアウトプットに挑戦!

・上の解説内容をもとにして、今度は大人を聞き手として、あなた自身がこの問題の解き方を口頭で説明してみてください。ただし、あなたの考え方が聞き手に正確に理解されるよう、説明する内容を予(あらかじ)めよく整理したうえで、論理的に、また、伝わりやすさを工夫して説明に臨(のぞ)みなさい。

■記述問題

・「ロ頭でのアウトプット」がうまくできたら、次にこの問題の解き方を自分なりに記述して説明してみよう。ただし、あなたの考え方が読み手に正確に理解されるよう、指示語や接続語を適宜(てきぎ)用いながら、論理的で伝わりやすい文章を工夫しなさい。

■メモ	

【皮肉】

- ②予想や期待とは反対の(良くない)結果になること。「皮肉にもお巡(まわ)りさんは泥棒に財布を盗まれた」、「まさかあの最下位チームに負けてしまうとは皮肉だ」など。
- ③自分に対する落胆(らくたん)した気分を表す。「雨天により運動会が中止と決定した直後に、皮肉にも雨が上がった」など。
- ※中学受験国語では特に「皮肉①」に関連する出題が多いが、「皮肉②」の関連問題も散見される。

【反語】

- ①「疑問文の形」をとりながら、暗に「強い否定」の意味を表す強調表現。「そんな不思議な話が本当にあるのだろうか(=そんな不思議な話が本当にあるはずがない)」など。
- ※中学受験国語では「反語①」に関連する出題が多いので、しっかりとこれを押さえておきたい。
- ②ある語を本来の意味とは反対の意味に使うことで、皮肉を込める言い方。アイロニー。「(遅刻した人に)随分(サハッシム)とお早い到着ですね。」など。

【逆説】

- ①「急がば回れ」、「負けるが勝ち」、「かわいい子には旅をさせよ」のように、<u>一見矛盾しているようだ</u>が、実は真理の一面を表す説。パラドックス。
- ※中学受験国語では「逆説①」に関連する出題が多いので、しっかりとこれを押さえておきたい。
- ②通常とは反対の方向からものごとを捉(とら)えたり、考えを進めたりするさま。「逆説的に言えば、<u>苦労が多い</u>ほど、<u>人生を豊かにする</u>ということだ」など。類似表現に、「逆に言うと」、「裏を返せば」、「反対に言えば」などがある。

【<u>擬声(音)語</u>】

- ・音や声を言葉に表したもの。オノマトペ。「お腹がゴロゴロと鳴る。」(片仮名表記)【擬熊語】
- ・<u>ものごとの様子や感じを言葉に表したもの</u>。オノマトペ。「日曜日は家で<u>ごろごろと</u>している。」(平仮名表記)

かっとう 【**草 藤**

・(つる性植物である葛《かずら》と藤《ふじ》がもつれ合うことから) **二つの相反する感情の板挟みとなり、迷い悩**(なゃ)**むこと**。「葛藤する」、「心の葛藤」など。

【両価性】

・「愛と憎(にく)しみ」のように、同一の対象に対して相反する感情を同時に持つこと。「(おいしそうなので)食べたいが、(太りたくないので)食べたくない」「(好みの容姿なので)好きだけれど、(性格的に合わなくて)嫌(きら)い」など。アンビバレンス。両面価値。両価価値。

【歴史的現在】

・過去の出来事を、今、目の前で起きているかのように「現在の時制」で表現する技法。史的現在。

【会話表現】

・「会話表現」について、その形式や特徴、効果等について検討が求められる場合がある。

【呼称の変化】

・相手を「**あだ名**」で呼んでいたものが「**さん付け**」に変化したり、自称が「**オレ**」から「**ぼく**」に変化したりするなど、「呼称の変化」の裏にある心情について検討を求められる場合がある。

【主観的と客観的】

- ・主観的:その人だけの見方、感じ方であるさま。
- ・客観的: 当事者から離れて、第三者の立場から物事を観察して考えるさま。

【相対的と絶対的】

- ・相対的:他との比較によって成り立つ(存在する)さま。
- ・絶対的: 他とは関係なく、それだけで成り立つ(存在する)さま。



★(31)飛躍(論理的飛躍) ※基本的な論理⑦『飛躍(論理的飛躍)』(p.7)参照!

・正しい筋道を飛び越えた内容の説明がされている。論理上の飛躍の度合いが小さい場合や大きい場合など、さまざまに調整してある。論理的な思考訓練が不十分で、判断がその都度「印象や感覚」によって揺(ゅ)れやすい小学生を誤答に誘導しやすい。「前提」と「結論」との間の「関連性・連続性・ 因果関係」を的確に捉(とら)え、また、「そうかもしれないし、そうでないかもしれない」といった「可能性 の視点」も持って、客観的、総合的に判断しよう。また、小手先テクニックに見られるような、思考もせずに「言い過ぎだ、大げさだ。だから消去!」などといった方法で安直に判断せず、文章を論理的に 読み、把握(はあく)する訓練を怠(おこた)らぬように。

※飛躍(論理的飛躍):正しい筋道を飛び越えて結論づける論理的な誤り。「前提」と「結論」との間に隔(へだ)たりがあり、因果関係が不明確な場合が多い。

※小手先テクニック: その場をしのぐための、普遍性のない、にわか仕込みの浅はかで安直な技術。

★(32) 意志飛躍(そんなつもりないし!)

・筆者の考え、あるいは、登場人物の考えや気持ちに沿わない「意志表現」で説明してある。『言い過ぎだ、大げさだ、極端だ』のように「印象や感覚」によって判断するのではなく、あくまで「本文の内容に照らして、論理的な隔(ヘだ)たりがあるのかどうか」を客観的に検討し、「筆者(作者)、あるいは登場人物はそのような意志までは抱いていない」と見抜けるようになろう。(31)「論理的飛躍」の一種。

・太郎君:「今回のテスト結果、どの教科も、まあまあの成績だったぜい!」

・次郎君:「次回のテストではクラス上位を<u>狙(ねら)ってる</u>ってわけか!」(狙う=意志)

※動詞に注意! 相手の意志を勝手に飛躍させている!

・次郎君は、<u>太郎君自身の考えを前提に置かず</u>、一方的に自分の考えだけを都合良く押し進めて、 太郎君の「**意志を飛躍させて判断**」しています。

②「歩も**ウ**とする」、「仲直りし**ョウ**とする」、「逃げ**マイ**とする」のように、「<u>意志を表す助動詞</u>」である「<u>う・よう・まい</u>」が用いられている場合が多いが、ぱっと見では目立たないために「飛躍」に気づきにくい。 ③また、「認める・受け入れる・決める・向き合う・選択する・否定する・評価する」といった「<u>もともと意志を含意(がんい)する動詞=意志動詞</u>」や、「~するために・~する目的で」、「~しなければならない・~つもりだ」といった、やはり「意志を含意する表現=意志表現」を用いることで<u>飛躍に気づかれないよう調整</u>してある場合も少なくないので十分に注意しよう。

★(33)意志調整(積極度・消極度の調整)

・本文において、筆者(作者)、あるいは登場人物が、ある事柄について「<u>意志を抱いていることが間</u> <u>違っていない</u>」場合に、選択肢においてはその「<u>意志の度合い」を微妙にずらして説明</u>してある。また、「意志の積極度や消極度を正しくない度合いに調整」してある場合もあるので注意。

★(34)期待·願望飛躍(別に期待してないし/別に願ってないし)

・筆者(作者)、登場人物がそもそも抱(いた)いていない「期待や願望」が述べられている。「仲直りがしたいと考えて」、「帰りたがつている」のように「希望(願望)を表す助動詞」である「~たい・~たがる」が用いられている場合が多いが、ぱっと見では目立たないために「飛躍」に気づきにくい。また、「~してほしい・~を願う・~を望む・~を期待する」といった表現が用いられている場合もあれば、「きっと~だろう」、「きっと~ちがいない」のような表現を用いることで飛躍に気づかれないよう調整してある場合も少なくないので十分に注意しよう。(31)「論理的飛躍」の一種。

★(35)好意飛躍(別に好きってわけじゃないし)

・ある作品において、「<u>男女間における親しい関係</u>」が描かれていても、それが必ずしも「<u>両者間における好意や恋愛(れんあい)感情</u>」を意味しているとは限らない。人物の心情や相互(そうご)の関係性、その後の展開などを、思い込みにより都合よく飛躍させて捉(とら)えてしまわないよう注意しよう。(31)「論理的飛躍」の一種。

【天使と悪魔と人間】

■問題

・天使は常に本当のことを言い、悪魔は常にウソをつき、人間は本当のことを言うこともあれば、ウソをつくこともあります。A、B、Cの3人が、次のように言いました。

A: 私はね、天使ではありませんよ。

B:私はね、人間ではありませんよ。

C: 私はね、悪魔ではありませんよ。

・「もしAが天使なら」、「もしAが悪魔なら」のように仮定して『矛盾はないか』確かめていくと、A、B、C3人の正体が明らかになります。では、問題の解明に挑(いど)んでみましょう!

■答え

①もしAが天使なら、天使がウソを言っていることになるので**矛盾する**。だから、Aは天使ではない。

- ②また、もしAが悪魔なら、悪魔が本当のことを言っていることになるので矛盾する。だから、Aは悪魔ではない。
- ③以上により、「Aは人間」であると考えられる。
- ④次に、もしBが天使なら、本当のことを言っていることになるので**矛盾しない**。だから、「Bは天使」である可能性がある。
- ⑤また、もしBが悪魔なら、悪魔が本当のことを言っていることになるので**矛盾する**。だから、Bは悪魔ではない。
- ⑥以上により、「Aが人間」、「Bが天使」、「Cが悪魔」であるとわかる。3人それぞれの発言に矛盾はない。





※基本的な論理⑥『背理法』(p.6)参照!

■口頭でのアウトプットに挑戦!

・上の解説内容をもとにして、今度は大人を聞き手として、あなた自身がこの問題の解き方を口頭で説明してみてください。ただし、あなたの考え方が聞き手に正確に理解されるよう、説明する内容を予(あらかじ)めよく整理したうえで、論理的に、また、伝わりやすさを工夫して説明に臨(のぞ)みなさい。

■記述問題

・「ロ頭でのアウトプット」がうまくできたら、次にこの問題の解き方を自分なりに記述して説明してみよう。ただし、あなたの考え方が読み手に正確に理解されるよう、指示語や接続語を適宜(てきぎ)用いながら、論理的で伝わりやすい文章を工夫しなさい。





【今週のジャイアン当番】

■問題

- ・今週のジャイアン当番は、**ルイ君、サラさん、メル君、ルルさん、レオ君**の5人です。 以下の情報をもとに、月曜日から金曜日まで、誰がジャイアン当番なのかを特定してく ださい。
 - ①ルイ君はレオ君の数日前が当番です。
 - ②サラさんの当番はルルさんより後です。
 - ③メル君の当番はルルさんの2日前です。
 - ④レオ君は木曜日が当番です。



■答え

- (1)④の情報により、レオ君の当番は木曜日で確定している。
- (2)①によれば、**ルイ君**の当番は**レオ君**の「<u>数日前</u>」なので、「一日前」の水曜日ではなく、月曜日か火曜日のいずれかである。
- (3)もしメル君が水曜日だとしたら、③によりルルさんが2日後の金曜日となるが、それだとサラさんが土曜日以降となってしまい、「当番は金曜日まで」という条件に合わず、矛盾(むじゅん)する。だから、メル君は水曜日ではない。
- (4)もしメル君が火曜日だとしたら、③によりルルさんが2日後の木曜日となってしまい、木曜日で確定しているレオ君と曜日が重なり、<u>矛盾する</u>。だから、メル君は火曜日ではない。
- (5)もしメル君が月曜日だとしたら、③によりルルさんは2日後の水曜日となり、また、②によりサラさんが金曜日であっても矛盾しない。
- (6) さらに、もし**メル君**が月曜日だとしたら、火曜日が**ルイ君**であっても①と<u>矛盾しな</u>い。
- (7)以上により、月曜日はメル君、火曜日がルイ君、水曜日がルルさん、木曜日がレオ 君、金曜日がサラさんと結論される。



■口頭でのアウトプットに挑戦!

・上の解説内容をもとにして、今度は大人を聞き手として、あなた自身がこの問題の解き方を口頭で説明してみてください。ただし、あなたの考え方が聞き手に正確に理解されるよう、説明する内容を予(ぁらかじ)めよく整理したうえで、論理的に、また、伝わりやすさを工夫して説明に臨(のぞ)みなさい。

※基本的な論理⑥『背理法』(p.6)参照!

★(36)<u>カゼオケ論法(ドミノ論法/連鎖飛躍)</u>

【風が吹けば桶屋が儲かる】

【強い風が吹くと、土ぼこりが立つ】→【土ぼこりが目に入って目を傷め、盲人が増える】
→【盲人は三味線の演奏を生業(なりわい・せいぎょう)とするので、三味線のに張るための猫の皮が沢山必要になる】→【猫が減る】→【猫を天敵とする鼠が増える】→【鼠は桶をかじるので、桶の需要が増える】→【桶屋が儲かって喜ぶ】

・「風が吹けば桶屋が儲かる」は、「ある事柄が原因となって、まったく無関係と思われるところに影響が出る」という意味のことわざである。選択肢の説明においては、「AだからB、BだからC、CだからD・・・」のように「複数の因果関係をつなぎ合わせて論理を好き勝手に飛躍させていないか」を確かめる視点も備えよう。(31)「論理的飛躍」、(41)「前提のすり替え」、(45)「条件トラップ」の一種。

★(37)<u>二分法(白黒思考)</u>

- ・「仲間ではない」という説明は、必ずしも「敵である」ことを意味するわけではない。他に「中立」や「無関係」という立場が想定されるにもかかわらず、そのような「中間層の可能性」を排除し、「二者」のみを前提とした説明がされている。(31)「論理的飛躍」、(41)「前提のすり替え」の一種。
 - ・太郎君:今回のテスト、国語の成績が最悪だったよ。
 - ・次郎君:つまり、勉強をさぼったということだね。
- ・次郎君は、「**勉強したか、勉強しなかったか**」の<u>「二つの選択肢」のみを「前提」に置き</u>、太郎君が「努力したにもかかわらず苦手な出題分野だった」、「ミスを連発した」、「集中力が発揮できなかった」といった「他の可能性」を前提に置かずに、一方的に「飛躍した判断」を下しています。
- ★(38)<u>矛盾(両立不可能)</u> ※基本的な論理⑤『矛盾』(p.5)参照!
- ・選択肢に書かれた説明内容が、本文に書かれた意味内容と論理的にかみ合わない。選択肢の説明に「論理的な食い違い」は起きていないかどうか、「両立不可能な言説」が組み込まれていないかどうかをしっかりと検討できるよう訓練を積んでおこう。
- **※矛盾**(むじゅん):二つの事柄(ことがら)のつじつまが合わないこと。筋道が通らないこと。

【自己矛盾】

- ・自分自身の考えや言動の中に食い違いが生じ、矛盾すること。自己の言動に自己を 否定する要素を含んでいること。**自家撞着**(じかどうちゃく)ともいう。
 - ・花子さん:この世界に『絶対』と言えるものなど、『何一つ無い』のだわ!
 - ・愛子さん: 『絶対が存在しない』ことが『**絶対だ**』なんて、あんた、言ってること、 絶対おかしいわよ!
- ・花子さんは、「この世界に絶対といえるものは何一つ存在しない」と主張しつつ、<u>自分のその発言が「絶対のものだ」と断言</u>しているので、その主張は矛盾しています。「あの子、いつも他人の批判ばかりするからダメなのよ(自分自身が『あの子』の批判をしている)」という主張も「自己矛盾の例」として覚えておくとよいでしょう。

★(39) <u>拡大解釈(意味広げたでしょ)</u>

・「休憩 (きゅうけい)してよい」を「遊んでもよい」と解釈するなど、<u>ある事柄についての説明や、選択肢の説明そのものが、本来の意味内容を都合よく広げた解釈となっている</u>。本文中のある事柄について一般化、抽象(ちゅうしょう)化して説明されている場合においても、本文の内容における適正な意味内容を超えていないかどうかを厳密に把握(はあく)できるようにしよう。(31)「論理的飛躍」の一種。

★(40)単純化(単純な話さ)

・例えば、「国語学習では漢字の習得がとても大切だ」という一説を、「国語学習では漢字が書ければよい」と再解釈するように、<u>背景や事情等の重要な要素を意図的に省略し、簡略化して説明</u>する。「単純化」は「抽象化」や「一般化」、あるいは「要約」とは全く異なるが、一見わかりやすく類型化され、また、<u>受け入れやすい</u>ものにも思えるため、安易に飛びついてしまわぬよう注意しよう。(12)「論点違い」、(31)「論理的飛躍」の一種。

※単純化: 物事の重要な要素を意図的に削除して、単純、かつ**類型的**な説明にすり替えること。正確性を欠き、本質を外した底の浅い説明となる。

※類型的:型にはまっていて、個性や特色が見られないさま。

※抽象化:多くのものごとが共通して持っている性質だけを抜き出し、それらを同類のものごととして捉(と5)えること。

※一般化:一部の事例をもとに、それを普遍的な概念に拡張すること。普遍化。

※要約:文章の要点を取りこぼさずに、短くまとめること。

*1:無理な一般化(例外は無いのけ?)

・「ポチも、ゴンも、モモも、人なつこい犬だ。(AもBもCも▲だ)」、「だから、犬はみんな人なつこい動物だ。(だから、全体も▲だ)」のように、例外の存在を前提とせずに、一部の事例をもとに、全てが同じであるかのように一般化して説明する。(31)「論理的飛躍」の一種。

• 花子さん: スズメも、ハトも、カラスも、空を飛ぶことができるわ。

・愛子さん:鳥という生き物は、みんな空を飛べるのね。

・愛子さんは、ペンギンや駝鳥のように<u>飛べない鳥がいることを前提に置かず</u>、「一部の性質」を「全体の性質」として無理やり「一般化」し、「飛躍した判断」を下しています。「一部の性質」がそうであるからといって、「全体の性質」も同じであるとは限りません。

【レッテル貼り】

・「太郎は<u>真面目だ</u>。」、「花子は<u>おしゃれだ</u>」というように、人物や事物について主観的に一般化し、評価を与えることを「レッテル貼(は)り」という。また、「俺って、<u>天才</u>!」、「私って、<u>ダメ人間</u>なの」のように、自分で自分にレッテル貼りをする場合もある。

②「次郎は<u>嘘(うそ)つきだ」</u>、「愛子は<u>意地悪だ」</u>のように、良くない情報のみをもとに主

◎「次郎は<u>嘘(jそ)つきだ」、「愛子は意地悪だ」</u>のように、良くない情報のみをもとに主 観的に一般化し、一方的に悪い評価を与える場合には、皮肉を込めて相手を非難す るにとどまらず、「対人攻撃」として「悪ロ」や「いじめ」、「差別的言動」に繋(つな)がる 場合も少なくない。

*2:逆は必ずしも真ならず(逆立ち飛躍)

・「海には魚がたくさんいる(AはBだ)」を**逆立ち**させて、「魚がたくさんいるのが海だ(BはAだ)」と言い換えても、同義とはならない。これを、「逆は必ずしも真ならず」という。(31)「論理的飛躍」の一種。

・花子さん:海にはね、魚がた~っくさん、いるのよ!

・愛子さん:逆に言えば、魚がた~っくさんいるところが海! ってことよね!

・「魚がたくさんいるところ」は「海」に限らず、「川や湖」、「水族館」なども考えられます。しかし、愛子さんはそうした「他の可能性」を前提に置かずに、花子さんの主張を「単純に逆立ち表現」することによって、それがあたかも真実であるかのように「飛躍した判断」を下しています。

*3:裏返しもまた必ずしも真ならず(AでないならBでない? /裏返し飛躍)

・「自分がされて嫌(いゃ)ことは、人にすべきでない(Aならば、Bである)」を裏返して、「自分がされて嫌でなければ、人にしても良い(Aでなければ、Bでない)」と言い換えても、同義とはならない。このように、本文における「ある表現を裏返して利用」することで、いかにも正しい説明であるかのように偽装(ぎそう)する。選択肢の説明に反対表現や否定表現があると正確な意味を取り違えてしまう恐れがあるので、よく注意しよう。(31)「論理的飛躍」の一種。

【5人の宇宙人】

■問題

・パッブー(A)、ピコペポ(B)、プルッパ(C)、ヨーギェル(D)、テレロ(E)という名の5人の宇宙人が地球にやって来ました。以下の<u>情報③を最初の手がかりとして</u>、どの宇宙人が何をしているかを特定しましょう。

※ヒント: ③の地球儀を踏(ぁ)まえ、次に①、その次に②を検討してみるといいよ。

①Dは地球儀を眺めているか、温泉につかっている。

②A、B、Cの3人は星を眺めてはいない。

③AかEのどちらかが、地球儀を眺めている。

④B、C、Dのうち1人が、**宇宙船**の修理をしている。

⑤居眠(いねむ)りをしているのは、Cではない。



■答え

※説明を簡略化するため、宇宙人の行動をキーワードのみで表記します。

(2)「**D**が温泉」であるのなら、②の「<u>星を眺めているのが**D**か**E**」なのだから、「**E**が**星**」である。</u>

(3)「Eが星」であるのなら、③の「Aは地球儀」である。ここまでで「Aが地球儀」、「Dが 温泉」、「Eが星」と確定する。

(4) ⑤により \underline{C} は居眠り \underline{E} しておらず、また、確定した \underline{A} 、 \underline{D} 、 \underline{E} 」も居眠りをしていないのだから、この \underline{A} 、 \underline{C} 、 \underline{D} 、 \underline{E} \underline{I} 以外の \underline{B} が居眠りとなる。

(5)以上により、最後に残った「Cは宇宙船」である。

■口頭でのアウトプットに挑戦!

・上の解説内容をもとにして、今度は大人を聞き手として、あなた自身がこの問題の解き方を口頭で説明してみてください。ただし、あなたの考え方が聞き手に正確に理解されるよう、説明する内容を予(あらかじ)めよく整理したうえで、論理的に、また、伝わりやすさを工夫して説明に臨(のぞ)みなさい。

■記述問題

・「ロ頭でのアウトプット」がうまくできたら、次にこの問題の解き方を自分なりに記述して説明してみよう。ただし、あなたの考え方が読み手に正確に理解されるよう、指示語や接続語を適宜(てきぎ)用いながら、論理的で伝わりやすい文章を工夫しなさい。

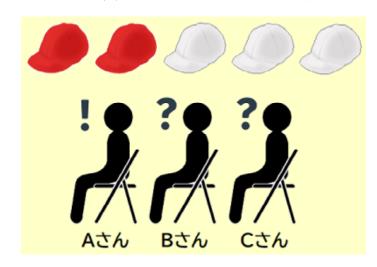


※2005年(平成17年)8月4日千葉市美浜区の『検見川の浜』にて撮影

【Aさんの帽子は何色か?】

■問題

・赤い帽子(ぼうし)が二つ、白い帽子が三つあります。Aさん、Bさん、Cさんの三人の生徒が縦に順に並び、前を向いたまま椅子(いす)に腰(にし)かけました。その後、それぞれが5つの帽子の中のどれかを被(かぶ)りました。3人とも、自分が被っている帽子の色はわかりませんが、3番目にいるCさんには、前の二人が被っている帽子の色が見えており、2番目にいるBさんには、最前列にいるAさんの帽子の色が見えています。



・先生が、まずCさんに自分の帽子の色をたずねると、「わかりません」と答えました。 次に、Bさんに同じ質問をすると、やはり「わかりません」と答えました。Aさんに同じ質問をすると、「わかりました」と答えました。

・そこで、『もしAさんとBさんが二人とも赤い帽子を被っていたなら』から始めて、最前列にいるAさんは自分が何色の帽子を被っているとわかったのかを考えてみましょう。

■答え

①もしAさんとBさんが二人とも赤い帽子を被っていたのなら、Cさんは「自分の帽子は白です」と答えられたはずです。もともと赤い帽子は二つしかないからです。

②でも、Cさんは「わかりません」と答えたので、<u>この仮定は正しくない</u>ことになります。だとすると、「AさんとBさんは、二人とも白い帽子を被っていた」か、「AさんとBさんのそれぞれが、赤か白、いずれかの帽子を被っていた」のだと考えられます。

③次に、<u>もしAさん</u>が赤い帽子を被っていたなら、Bさんは「自分の帽子は白だ」とわかったはずです。なぜなら、最初のCさんの言葉から「AさんとBさんが二人とも赤い帽子を被っている」ことが既(すで)に否定(ひてい)されているからです。

④ところが、Bさんは「わかりません」と答えました。

⑤そこで、Aさんは、「自分の帽子が赤でないのなら、白だ」とわかったのです。

■口頭でのアウトプットに挑戦!

・上の解説内容をもとにして、今度は大人を聞き手として、あなた自身がこの問題の解き方を口頭で説明してみてください。ただし、あなたの考え方が聞き手に正確に理解されるよう、説明する内容を予(あらかじ)めよく整理したうえで、論理的に、また、伝わりやすさを工夫して説明に臨(のぞ)みなさい。

※基本的な論理⑥『背理法』(p.6)参照!

【前提操作】

★(41)前提のすり替え(聞いてないよ!) ※基本的な論理③『前提のすり替え』(p.5)参照!・本文における「正しい前提(正しい事実内容)」を「正しくない前提」にすり替えたうえで論理展開している。本文における「前提(正しい事実内容)」と「解答者の把握した前提内容」とが合致(がっち)していないと、その都度判断が揺(ゆ)れを起こす。本文を通読せず、また、本文との照合もせずに、専(もっぱ)ら記憶に頼(たょ)って選択肢どうしの読み比べによって判断しようとする受験生が相当に存在することを作問者は心得ている。「この説明は、前提がすり替わっている」と見抜けるようになろう。

※前提: 論理を支える土台。因果関係や論理を組み立てるための土台となる重要な条件。

※すり替え:人に気づかれないように、こっそりと別のものに取りかえること。

□「前提のすり替え」は、日常における冗談や励まし、勇気づけなど、善意に基づく会話術の一手段としても意識的、無意識的に用いられるが、詭弁(きべん)や詐欺(きぎ)、悪意に基(もと)づく心理操作などの一手法としてもしばしば利用される。「前提のすり替え」による教育やマスコミ(マスメディア)の情報操作によって知らないうちに思想誘導されたり、特定の価値観を植えつけられたりしてしまわないよう、十分に注意しなければならない。「前提をまず疑い、前提となる事実を自分自身でよく確かめ、自分の頭を使って考え、判断する」ことが大切だ。

■国語を得意とする者は、様々な視点を駆使して多角的に物事を把握する能力が高いため、たった 一回の本文通読時に、広範囲に及ぶ重層的な多くの情報を一気に収集することができ、しかも、分析力や類推力、検討力も優れて高い。そのため、問われている箇(か)所の近辺を瞬時確認するだけでも正確な判断をすることが可能であり、処理スピードも極めて速い。しかし、その域にまで達していない者が、「本文を通読もせずに、問われている箇所の前後数行の内容から判断を下す」といった形ばかり真似た手法にすがり続けていても、読解と解答の精度を実質的に向上させていくことは極めて困難だ。「時間が足りない」という受験生は、「頭脳の高速処理訓練」や「時間短縮訓練」、「速読訓練」を普段の学習に導入し、日々の継続的訓練により脳の機能的向上と思考作業の高速化を図ろう。 ※「本文を通読せず、問われている箇所の前後数行の内容から判断する」といった手法でどの程度得点できるかを実際に試してみたり、ゲームとして節ってみたりするのは、それはそれで面白いだろう

※「本文を連読せず、問われている箇所の前後数行の内容から判断する」といった手法でどの程度得点できるかを実際に試してみたり、ゲームとして競ってみたりするのは、それはそれで面白いだろう。 ※本資料巻末に掲載した「高速トレース(全脳型高速処理訓練)」、「時間短縮訓練」、「時間配分のしかた」、「速読訓練(フラッシュリーディング)」等の資料も併(あわ)せて参照してください。

★(42)暗黙の前提(暗黙の了解) ※基本的な論理②『暗黙の前提』(p.4)参照!

・本文には直接表現されてはいないが、筆者(作者・登場人物)が「暗黙の前提」としている事柄にとがらきもとに説明されている。本文に直接書くまでもない「当たり前の事柄」や、「筆者の主張の根底にある思想」などを「暗黙の前提」として説明されるため、まさかと思うような内容の説明となる場合があり、正解でありながら「明らかな誤り」として早々に除外(消去)してしまう恐れがある。判別難度が高く、正答率を極端に下げるのに有効な手法。本文の内容把握の学習においては、「明示された前提」と「表現の裏にある前提」に加え、「暗黙の前提」の三つをしっかりと押さえ、そのうえで「前提と結論との関係=因果関係」を捉(とら)える訓練をしっかりと積んでおこう。

※暗黙の前提:特に言明せずともわかりきった事柄。

※表現の裏にある前提: 例えば、選択肢の説明内に「決心した」という表現があったとすると、それはその人物が「それまで迷っていた、それまで決心せずにいた」といった意味が考えられ、また、「仲直りした」とあれば、それは「それまで仲違(なかたが)いしていた、仲直りするかどうか迷っていた」といった意味が考えられるが、それが実際に前提として本文の内容に合致(がっち)するのかどうかを正しく掴(っか)んでおく必要がある。

★(43)人物像不一致(人物像のすり替え/あんた誰?)

・登場人物や作者・筆者の「人物像」とは「異なる人物像」にすり替えたうえで説明されている。「人物像(人柄や性格)」という「前提」をすり替えたうえでの説明であるため、本文全体を通して人物像を把握(はあく)しておかないと、判断が揺(ゆ)らぐ恐れがある。表現を支える「見えない前提」を見抜けるようになろう。(41)「前提のすり替え」、(42)「暗黙の前提」の一種。

★(44)人物関係のすり替え(関係性が違くね?)

・本文における「登場人物同士の関係」、もしくは、「作者(筆者)とある他者との関係」が「異なる関係性」にすり替えられ、それを前提として説明されている。「人物像」だけでなく「人物関係」や、さらに「人物同士の関係性の度合い」までをも含(s<)め、本文に直接に明記されていない「見えない前提」を正確に提(と6)えられるようになろう。(41)「前提のすり替え」、(42)「暗黙の前提」の一種。

※違(ちが)**くて**/違く: 俗語(ぞくご)。正しくは「違って/違い」とする。また、「違かった」、「違くない」も、それぞれ「違った」、「違わない」と正すこと。

★(45)条件トラップ(『条件』作ってみた!)

・【[A] 雨が降ると(条件) + [B] 湿度(Loを)が上がる】、【[A] 宿題を済ませた \underline{m} (条件) + [B] 遊べない】、【[A] 仲良くなるとともに(条件) + [B] 理解が深まる】のように、《Aを条件(前提)として + B(となる/である)》の形式で説明されるが、[A]という条件(前提)がそもそも虚偽(きょぎ)であったり、不正確であったり、あるいは、誘導に都合のよい情報であったりする。《虚偽の条件[A]》を「前提」として、しれっと[B] が続くため、よく注意して文脈把握(はあく)しないと《条件[A]》の虚偽に気づくことが難しい。本文を照合せずに、「記憶に頼(たょ)って選択肢どうしの読み比べだけで判断」する受験生が相当に存在することを作問者は心得ており、「見せかけの説得力」と「虚偽の論理」によりまんまと誤答に誘導されてしまわぬよう注意。(41)「前提のすり替え」の一種。

※しれっと: けろっとして。 平然として。 もと俗語 (ぞくご)か。

※聞き手や読み手は、まず最初に提示される【条件(前提)A】を踏まえたうえで後の文脈をたどって思考する傾向が強いため、【条件(前提)A】にウソや誤りがあっても却(かえ)ってそれに気づきにくく、いっそう相手の意図に沿(そ)った方向に誘導されやすくなる。マスメディアによる世論調査などにおいても、調査結果の比率を高めたり低めたりして操作する必要のある場合にこの手法がよく利用され、また、誘導しやすい文脈や表現を調整、操作するために、特定の分野における一部の学者もこれに協力している。

★(46)仮定トラップ(『仮定文』作ってみた!)

・【[A] (もし) 雨が降れ<u>ば(仮定条件)</u> + [B] 湿度(Log)が上がる】、【[A] (もし) 宿題を済ませ<u>ても(仮定条件)</u> + [B] 遊べない】、【[A] (もし) 仲良くなれる<u>なら</u>/仲良くなれ<u>たら(仮定条件)</u> + [B] うれしい】のように、《<u>Aを仮定条件(前提)として</u> + B(となる/である)》の形式で説明されるが、[A] という仮定条件(前提) 自体がそもそも虚偽($e_{x,\bar{x}}$)であったり、不正確であったり、あるいは、誘導に都合のよい情報であったりする。《<u>虚偽の仮定条件[A]》を「前提」として、しれっと[B] が続く</u>ため、よく注意して文脈把握((ltab <))しないと《仮定条件[A]》における虚偽に気づくことが難しい。(41)「前提のすり替え」、(45)「条件トラップ」の一種。

★(47) 因果トラップ(『理由』作ってみた!/イントラ) ※(62) 『偽装因果』参照!

・【[A] 雨が降るから(原因・理由) + [B] 湿度が上がる】、【[A] 宿題を済ませたので(原因・理由) + [B] 遊べる】、【[A] 仲良くなれたため(原因・理由) + [B] うれしかった】のように、《Aを原因・理由(前提)として + B(となる/である)》の形式で説明されるが、[A]という条件(原因・理由/前提)自体がそもそも虚偽(きょぎ)であったり、不正確であったり、あるいは、誘導に都合のよい情報であったりする。《虚偽の条件(原因・理由)[A]》を「前提」として、しれっと《結果[B]》が続くため、よく注意して文脈把握しないと《条件(原因・理由)[A]》における虚偽に気づくことが難しい。(41)「前提のすり替え」、(45)「条件トラップ」の一種。

★(48)基準トラップ(『基準』作ってみた!)

・「一般的に」、「常識的に」、「世代によって」、「文化として」、「世界的に見て」、「伝統的に」のような言葉が用いられ、それが「説明における一つの基準、もしくは視点」となっているが、そもそもその「基準要素(視点要素)」自体が本来の説明において「無関係」であったり、虚偽(きょぎ)であったり、あるいは、誘導に都合のよい情報であったりする。「余計な基準や虚偽の基準要素」を「前提」としてしれっと説明が続くため、よく注意して説明内容を捉(とら)える必要がある。(11)「視点違い」、(41)「前提のすり替え」、(45)「条件トラップ」の一種。

★(49)推定妥当(確かにありうる!)

・本文における主題や要旨(ょうし)を前提として、物語文などでは「<u>登場人物のその後の生き方」</u>、説明的文章では「<u>筆者の発展的な考え」等、推定しうる展開や事柄(ことがら)を「断定的に」説明</u>してある。本文には直接書かれていなくとも、<u>主題や要旨、展開等を踏まえると論理的には推断(すいだん)が可能であり、正答となる。(42)「暗黙の前提」の一種。</u>

★(50)<u>主題違い(要旨違い/主題トラップ)</u>

・「主題(要旨)を捉(とら)える問題」において、「本文全体に底流する『本来の主題や要旨』とは無関係 な説明」となっている。また、「主題(要旨)の意味内容を微妙(びみょう)にずらしてある」場合や、「主題 (要旨)そのものではなく、それに深く関連する副次的な事柄(ことがら)についての説明」にすり替えられ ている場合もある。(41)「前提のすり替え」、(42)「暗黙の前提」の一種。

※「主題(要旨)を捉(とら)える問題」は一般に最終問題(付近)に設けられるが、それ以前の「経過問題」においても「本来の主題(要旨)」を前提としていないと判別が困難な場合があるので注意。ことがよ

※主題:主に文学的作品等において、<u>作者</u>がその作品全体を通して最も強く訴(ラった)えたい事柄。

※要旨(ようし):主に論理的な文章において、筆者がその文章全体を通して最も強く訴えたい事柄。

※副次(ふくじ)的:主要なものに対して、従属した関係にあるさま。二次的。

【犯人を見つけろ!】

■問題

・あるクラスで、「『**やる気**』行方不明事件」が発生しました。 <u>一人の犯人だけがウソをつき</u>、残りの二人は本当のことを言っています。それでは、三人の容疑者の供述を聞いてみましょう。

A君:B君が絶対に犯人だよ。僕は『やる気』を隠していない。

B君:C君が犯人だ。僕も『やる気』を隠していない。

C君:僕は犯人じゃない。『やる気』なんか隠してないよ。

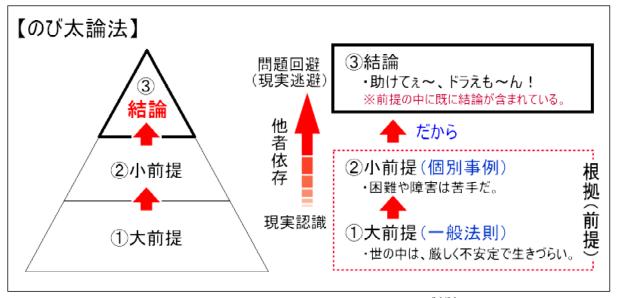
・この三人の中に、『やる気』をどこかへ隠した者が一人だけいます。<u>『もしA君が本当のことを言っているとしたら</u>』から始めて『そこに矛盾(むじゅん)はないか』を確かめていくと、誰が犯人であるかがわかります。では、事件の解決に挑(いど)んでください!

■答え

- ・文雄君:「絶対に」なんて言ってるから、絶対にA君が怪しいよ!
- ・伸幸君:印象で決めつけるものじゃないよ!!!
- ·恋宝さん: 印象だけじゃダメなんですか?!
- ・誠司君: 当たり前だろ! とにかく解決しなくっちゃ!
- ・健太君:まず、もしA君が本当のことを言っていると仮定すると、「C君が犯人だ」と言うB君はウソを言っていることになる。一人だけがウソを言っているのだから、残ったC君は本当のことを言っていると考えていい。この理屈だと、特に矛盾は起きないね。
- ・綾香さん: 今度は、もしB君が本当のことを言っていると仮定すると、「自分は犯人ではない」と言うC君の言葉がウソになるわ。C君が怪しいわ。
- ・雄一郎君: ちょっと待った! でも、もしB君が本当のことを言っていると仮定すると、 犯人ではないはずの「B君が犯人だ」と言うA君もウソを言っていることになるよ。 一人だけがウソを言っているはずなのに、二人がウソをついているとなると、矛盾だよ。
- ・夏男君: やはりB君が怪しいな。 疑惑(ぎゃく)は……
- ・清美さん: 疑惑はさらに深まった!!!
- ・智子さん:あんたはお黙(だま)りなさい! 一応、C君も調べてみようよ。もしC君が本当のことを言っていると仮定すると、「C君が犯人だ」というB君はウソを言っている。一人だけがウソを言っているのだから、A君は本当のことを言っているのね。この理屈で考えても、やっぱり矛盾は起きないわ。
- ・僧兵君:いよいよ陰謀(いんぼう)の真相が明らかになるよ!
- 太郎君:よし、B……
- ・宗男君:よし、B君を逮捕(たいほ)しろ!
- ・竜兵君:聞いてないよ!!!
- ・孝志君: ぶっこわーすを、ぶっこわーす!
- ・ひろゆき君: それっていうのも、ありかなって思うんすよね。
- ・進次郎君:30年後の自分は一体何歳かなと、私はずっと考えていました。
- **・たけし君**:ちょっと何言ってんのかわからない。
- ・瑞穂さん:……ねえ、B君、『やる気』を一体どこに隠したの?
- •B君: 校庭の隅(チネネ)に松の木が一本あるだろ? その下に穴を掘って埋めてあるよ… …。

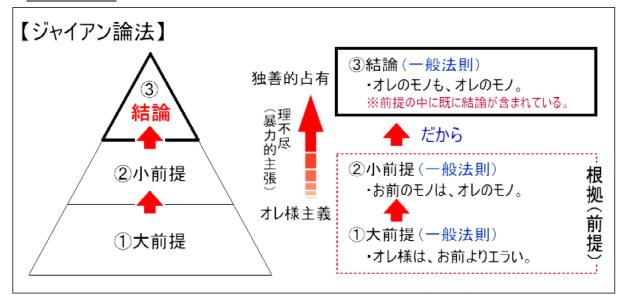
※基本的な論理⑥『背理法』(p.6)参照!

■のび太論法



◎ドラえもんがいつものび太を助けることについて、①**賛成**と、②**反対**双方の立場から、理由や具体例を挙げながら、それぞれについてあなたの意見を自由に述べてください。

■<u>ジャイアン論法</u>



◎ジャイアンが「ジャイアンリサイタル」を開催すると、聴衆が体調を崩したり、飛んでいる鳥が気絶して落下したり、近くの家の窓が割れたりと、大惨事(だいさんじ)になります。その解決策を自由に考えて説明してみましょう。

★(51) 肯定前提/肯<u>定的心情前提(肯定してたっけ?/肯定的心情だったっけ?)</u>

- ・ある事柄(ことがら)について、登場人物(筆者・作者)の考えや心情が『否定的』であるにもかかわらず、選択肢では『肯定的』であることを前提として説明されている。表現を支える「見えない前提」を見抜けるようになろう。(41)「前提のすり替え」の一種。
- ■逆に本文での「肯定前提(肯定的心情前提)」が<u>『否定前提(否定的心情前提)』にすり替わってい</u>る場合もあるので注意。

★(52)前向き前提(前向きだったっけ?)

- ・ある事柄(ことがら)について、登場人物(筆者・作者)の「心情や考え」が『後ろ向きか、前向きでない』にもかかわらず、選択肢では『前向き』であることを前提として説明されている。表現を支える「見えない前提」を見抜けるようになろう。(41)「前提のすり替え」の一種。
- ■逆に本文での『前向き前提』が<u>『後ろ向き前提(前向きでない前提)』にすり替わっている</u>場合もあるので注意。

★(53) 受け入れ前提/受け止め前提(受け入れてたっけ?/受け止めてたっけ?)

- ・ある事柄(ことがら)について、登場人物(筆者・作者)がそれを『受け入れていない(受け止めていない)』にもかかわらず、選択肢では『受け入れている(受け止めている)』ことを前提として説明されている。表現を支える「見えない前提」を見抜けるようになろう。(41)「前提のすり替え」の一種。
- ■逆に本文での『受け入れ前提(受け止め前提)』が<u>『受け入れていない前提(受け止めていない前</u>提)』にすり替わっている場合もあるので注意。

★(54)理解前提(理解してたっけ?)

- ・ある事柄(ことがら)について、登場人物(筆者・作者)がそれを『理解していない』にもかかわらず、選択肢では『理解している』ことを前提として説明されている。表現を支える「見えない前提」を見抜けるようになろう。(41)「前提のすり替え」の一種。
- ■逆に本文での『理解前提』が『理解していない前提』にすり替わっている場合もあるので注意。

★(55)認識前提(認識してたっけ?)

- ・ある事柄(ことがら)について、登場人物(筆者・作者)がそれを『認識していない』にもかかわらず、<u>選択肢では『認識している』ことを前提として説明されている。表現を支える「見えない前提」</u>を見抜けるようになろう。(41)「前提のすり替え」の一種。
- ■逆に本文での『認識前提』が『認識していない前提』にすり替わっている場合もあるので注意。

★(56)好意前提(好きになってたっけ?)

- ・登場人物(筆者・作者)が異性の他者に対して『好意を特に抱いているわけではない』にもかかわらず、選択肢では『好意』を前提として説明されている。表現を支える「見えない前提」</u>を見抜けるようになろう。少年、少女の恋心にいごろうを描(えが)いた作品や、男女間の心の機微(きび)を描いた作品にも是非触れておきたい。(41)「前提のすり替え」の一種。
- ※機微(きび):表面上は分かりにくい、人の心の微妙な趣(おもむ)きや事情。
- ■逆に本文での『好意前提』が『好意を抱いていない前提』にすり替わっている場合もあるので注意。

★(57)期待・願望前提(期待してたっけ?/望んでたっけ?)

- ・登場人物(筆者・作者)がある事柄(ことがら)について特に『期待していない(望んでいない)』にもかかわらず、選択肢では『期待している(望んでいる)』ことを前提として説明されている。表現を支える「見えない前提」を見抜けるようになろう。(41)「前提のすり替え」の一種。
- ■逆に本文での『期待・願望前提』が<u>『期待していない前提(望んでいない前提)』にすり替わっている</u>場合もあるので注意。





★(58)つまみ食い論法(チェリーピッキング/いいとこ取り)

・「今度のテストで敬語の問題が出るよ。幸一君も洋子ちゃんも、同じこと言ってるもん。」のように、多くの情報の中から都合の良い情報だけを選び出し(切り出し・切り取り)、それを根拠(前提)として自分に有利な主張をする。(41)「前提のすり替え」の一種。

※チェリー・ピッキング: おいしい「サクランボ(チェリー)」だけを「選び取って(ピッキング)」食べることから、つまみ食いの意。

- ★(59)<u>ダミー論法(わら人形論法/ダミー攻撃/架空論法)</u>※歪曲・曲 解・誇張
- ・本文におけるある言説をわざと歪(ゅが)めて引用し、その「ダミーの論点」に対して批判をする。
 - ・先生:勉強は大事なんだから、毎日しっかりと勉強するんだぞ!(前提:励まし)
 - ・生徒:「<u>泣こうがわめこうが、引きずり回してでもお前を勉強漬(づ)けにしてやる!</u>」だなんて、そんなひどいことを平然と言う教師がどこにありますか!(話をねじ曲げて「スパルタ教育」に論点(前提)をすり替えて非難し、ついでに人格攻撃)
 - ・先生:誰がそんなこと言ったかね、このスッタコが!
 - ・生徒:……てへぺろっ (・ω<)!</p>
- ・本文における論点と、その論点についての主張や説明内容を正確に捉(とら)えたうえで、選択肢の説明が歪曲(おいきょく)、もしくは不当に誇張(こちょう)されていないかどうかを見極めよう。(12)「論点違い」、(31)「論理的飛躍」、(41)「前提のすり替え」の一種。
- **※歪曲**(わいきょく): 事実をわざと歪(ゆが)め、曲げること。
- ※わら人形論法: 相手の主張を都合良くわざと歪(ゆが)めて引用し(切り取り/切り出し)、その「架空の論点(わら人形/ダミー)」に対して反論する。相手がそもそも言ってもいない論点を作り上げ、その「架空の論点」を標的(わら人形)として反論、攻撃し、自説を有利に導く詭弁(きべん)。

*4: 道徳主義トラップ(道徳をダシにせよ!)

・「カンニングをするのは悪いことだ(道徳的価値観)。だから、僕がカンニングなんてするはずがないじゃないか(事実にすり替え)」のように、「Aは道徳的に善である(悪である)、だから、Aは▲が事実だ」という形式で、「道徳的な価値観を事実にすり替える」論法。「道徳」をはじめから「良いもの・正しいもの」と前提し、そのうえで、「だから、~が事実だ」と、誤った結論を導く。(*5)「自然主義トラップ」の逆パターン。(41)「前提のすり替え」、(31)「論理的飛躍」の一種。

*5: <u>自然主義トラップ(自然に倣え!)</u>

・「人間は本来、夜には眠る動物だ(自然界の事実)。だから、人間は深夜にまで勉強をすべきではないんだ(価値判断にすり替え)。」のように、「Aは自然界の事実である。だから、Aは▲であるべきだ(価値判断)」という形式で、「自然界の事実を価値判断にすり替える」論法。「自然界の事実」をはじめから「良いもの・正しいもの」と前提し、「だから、自然に逆らわない行動が正しい」と、誤った結論を導く。(*4)「道徳主義トラップ」の逆パターン。(41)「前提のすり替え」、(31)「論理的飛躍」の一種。

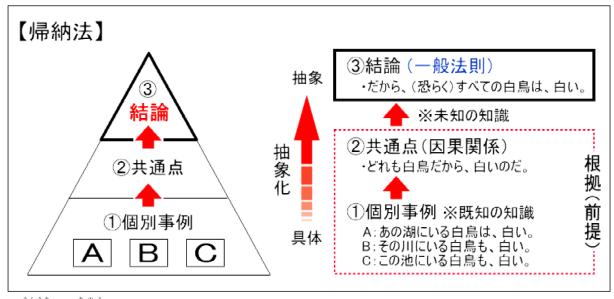
*6:<u>新規主義トラップ(新しければいいの?)</u>

・「この教材は改訂(かいてい)された(新しいものごと)。だから、内容も優れているんだ(価値判断)」、「ざんぎり頭を叩(たた)いてみれば、文明開化の音がする」のように、「『新しいものごと』は無条件に『良いもの・正しいもの』」であると前提し、「過去のものごと」を否定する。新しいものごとが常に正しいとは限らない。(*7)「伝統主義トラップ」の逆パターン。(41)「前提のすり替え」、(31)「論理的飛躍」の一種。

*7:伝統主義トラップ(古ければいいワケ?)

・「人類は数千年にわたり神を信じ続けてきた。だから、神は存在するんだ」、「以前は誰もがテレビや新聞、ラジオなどから情報を得ていた。だから、インターネットの利用はふさわしくないんだ」のように、「『伝統や習慣』は無条件に『良いもの・正しいもの』である」と前提し、「現在のものごと」を否定する。昔のやり方が常に正しいとは限らず、また、昔のやり方が正しかったとしても、現在に通用するとは限らない。(*6)「新規主義トラップ」の逆パターン。(41)「前提のすり替え」、(31)「論理的飛躍」の一種。

■基本的な論理⑫ 帰納法



■<u>演繹法と帰納法</u>

・『四谷大塚 第二回 合不合判定テスト(令和二年/2020年7月実施)』、大設問2番にて「**演繹法**と帰納法(きのうほう)について説明された内容を含む素材文が扱(ぁつか)われ、その関連問題(100字記述)が出題されました(出典:『日本史でたどるニッポン』本郷和人著)。

◎演繹法

- •<u>「一般法則」をもとにして「個別的結論」を導く</u>推論形式を「演繹法」といいます。ですから、「三段論法」は演繹法の一種です。※基本的な論理①『三段論法』(p.4)参照!
- ⑥帰納法:「演繹法」とは逆に、「個別事例(複数の具体例)」をもとに「一般法則」を導き出す</u>推論形式を「帰納法」といいます。『一般法則が出発点』になるのが「演繹法」で、『一般法則がゴール』になるのが「帰納法」ということです。

【帰納法の例】

•前提①:

はくちよう

【個別事例】

A: あの湖にいる白鳥は、白い。(具体例) B: その川にいる白鳥も、白い。(具体例)

C:この池にいる白鳥も、白い。(具体例)

・前提②:どれも白鳥だから、白いのだ。

【共通点/因果関係】

・結論:だから、(恐らく)全ての白鳥は、白いだろう。

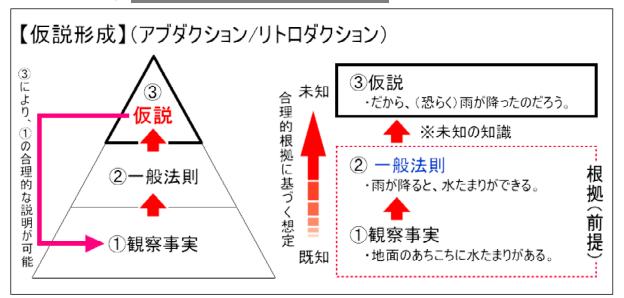
【一般法則】

※帰納法では列挙される具体例以外に例外の出現がありうるため、③の「結論」に「恐らく」を付けてあります。もし例外が出現した場合には、帰納法による「結論」は「一般法則」とは言えず、むしろ「論理的飛躍」、もしくは「論理的な誤り」となってしまうからです。実際、ヨーロッパでは「スワン(swan=白鳥)」は白いものだという常識があったのですが、1697年、オーストラリアで「黒いスワン(固有種の黒鳥(コクチョウ)」が発見され、この「帰納推論による仮説」は明確な誤りであったことが判明しました。

◎「A君はハムスターを、Bさんはウサギを、C君は亀を飼っている。みんな、小動物が好きなんだな」のように、日常においても私たちは無意識的に帰納法を用いて推理や推測をしたり、仮説を立てたりして、生活や発想などに役立てています。帰納法は、「既知(きち)の知識」をもとにして「未知の知識」を得るための強力な思考法の一つなのです。

◎以下に、帰納法を使った簡単な例文を自分でも考えてみましょう。(上図の前提②は省略して可)

【具体例:いくつか挙げる】 (
【抽象化:まとめて捉え、一般化する】	(



◎仮説形成

・ある「観察事実」をもとに、その原因を探るため、「一般的法則や知識・情報等」を照らし合わせ、それ を「前提」として「合理的な説明を想定」する推論法を「仮説形成」(アブダクション/リトロダクション)と いいます。

【仮説形成の例①】

前提①:地面のあちこちに水たまりがある。 【観察事実】 前提②:雨が降ると、水たまりができる。 【一般法則】 結論: だから、(恐らく) 雨が降ったのだろう。 【仮説】

・「仮説形成」は、「既知の知識」をもとにして「未知の知識」を新たに得るための強力な思考法の一つ です。ただし、想定した仮説が必ずしも正しいとは限らないため、「仮説の正しさ」を証明するために 「検証」を行う必要があります。

【仮説形成の例②】

・前提①:太郎を見つめる花子の目が しなっている。 【観察事実】

・前提②:人が異性を好きになると、目が 🕶 になる。

【一般法則】 結論: だから、花子は太郎に恋(こい)しているぞっ(≧ω≦)。 【仮説】

※身近なものごとに目を向けて、このような例文を自分でも考えてみましょう。

【誤った仮説形成の例】

①「太郎君が珍しく学校を休んだ。(観察事実)」→ ②「宇宙人にさらわれると、学 校に来ることができない。(-般法則)」 \rightarrow (3)だから、太郎君は宇宙人にさらわれ たに違(5が)いない!(仮説)」

※都合よく無関係な「前提」を持ち出して推論したために、「論理的に飛躍した(説った) **仮説**|が導出されました。このような例文を自分でも考えてみましょう。

◎物理学者のニュートンは、「リンゴが木から落ちる」という「観察事実」をもとに、一般法則に照らすのみならず、その「創造的な想像力」によって思索(しょく)をめぐらし、ついに「引力」という未知の作用 を「創案=仮説形成」しました。創案(そうあん)とは、今まで誰も考えつかなかったことを最初に考え出すことです。また、理論物理学者のアインシュタインも、「科学的仮説や理論というものは、観察された事実を説明するために『発明されるもの』である」と述べ、一般法則に縛(しば)を知ず、「創造的な思像 **カ」を発揮して合理的な「仮説」を創案する**ことの重要性を指摘しています。 **仮説形成**は、科学におい てだけでなく、日常生活においてもまた、さまざまな物事に対処したり、新しい考えを創案したりするう えで重要な役割を果たす強力な思考法の一つなのです

※思索(Lask): 物事の道理をたどり、秩序立てて深く考えを進めること。

- ★(60)因果の逆転 ※基本的な論理④『因果関係』(p.5)参照!
- ・「受験をする子どもが多いので、この地域は塾が多い(Aだから、Bである)」を「この地域は塾が多い ので、受験をする子どもが多い(Bだから、Aである)」のように、因果関係を逆転させて説明してある。 「要素の有無」や「要素の正否」だけが判断基準だと瞬時には「逆転」に気づかない恐れがある。 ◎「**ので・から・ため(に)**」等の「原因・理由」を示す語を使用すると「因果の逆転」に気づかれやすい ため、「~ことで」や「~ことにより」、「~によって」などの表現に言い換えられていたり、因果関係その ものを捉(ヒら)えづらくするために巧妙(ニラみょう)に表現が調整される場合も少なくない。
 - ・花子さん:アンタ、勉強しないから(原因)、成績が悪いのよ。(結果)
 - ・愛子さん:違うわよ。成績が悪いから(原因)、勉強する気になれないのよ。(結果)
- ・花子さんと愛子さんの主張は、互いに「因果関係が逆転」しています。文章を読む際だけでなく、文 章を書く際や会話をする際においても、正しい因果関係を強く意識するよう心掛けよう。
- ※因果関係:原因と結果との関係。「原因や理由」が「前提」となって「結論」が導かれる。
- ★(61)因果要素の倒置 ※基本的な論理④『因果関係』(p.5)参照!
- ・「風邪を引いたから、学校を休んだ(Aだから、Bだ)」を、「学校を休んだのは、風邪を引いたからだ (Bであるのは、Aだからだ)」と倒置しても因果関係は変わらず、意味は全く同じである。このように、 本文中の「AだからBである」という語順を、選択肢において「Bであるのは、Aだからだ」と倒置して説 明されると、因果関係そのものに気づかなかったり、因果関係の確認に手間取る恐れがあるので注 意。(2)「カモフラージュ」の一種。
- ★(62)偽装因果(因果関係作ってみた!) ※(47)『因果トラップ』参照!
- ・本文中の、もともと因果関係の存在しない「ある内容《A》」と「ある内容《B》」とを、【A~ので(理由・ 原因) + Bである(結果) 】のように機械的に連結し、因果関係を偽装(ぎそう) する。「見せかけの根拠」 や「見せかけの説得力」によって誘導されないよう注意しよう。(45)「条件トラップ」の一種。
- ★(63)無関係(関連性無し/虚偽の関連付け)
- ・本文中における本来無関係な複数の事柄(ことがら)を無理やり関連づけて、それらしい説明に仕立て てある。本文を照合せず、記憶に頼(たよ)って選択肢どうしの読み比べだけで判断しようとする受験生 が相当に存在することを作問者は心得ている。「見せかけの説得力」によって判断を誤(ぁゃま)らぬよ う、「事柄どうしの関連性」についてよく吟味(ぎんみ)し、判断しよう。
- ★(64)<u>踏み込み不足(寸止め/あと一歩)</u> ※(16)『表面的説明(形式的説明)』参照!
- ・選択肢の説明内容が、(16)「表面的説明」のような「上辺(ラゎベ)をなぞっただけの説明」よりは踏み 込んでいるが、「本質や核心にまではあと一歩(あと一段階/寸前)」というところで止(とど)まっている。 (16)「表面的説明」の一種。
- ※踏(ふ)み込む:物事の本質や核心に一段と深く迫る。
- ※寸止め:剣道や空手などで、強烈(きょうれつ)な打撃(だげき)を相手の体に当たる寸前で止めること。
- ★(65)類比論法(その喩えは無関係!) ※基本的な論理⑩『類推(類比推論)』(p.37) 参照! ・筆者(作者・登場人物)の考えに沿(モ)うと見せかけた「喩(たと)え」を引用して説明し、それを根拠(前 提)の一つとして、いかにも正当な説明であるかのように偽装(ぎそう)してある。「説明内容に類似した 喩(たと)え(類比) |は、抽象的な事柄(ことがら)や難解な事柄(ことがら)を理解する一助になるうえ、その説 明に説得力を与える効果を持つが、元来説明そのものとは「別物」であるため、その「喩(たと)え」に本 質的に異なる点(相違点)が無いかどうか、また、その「喩(たと)え」が説明における正しい根拠や補完 情報として機能しているかどうかをよく検討する必要がある。
- ※「慣用句」や「ことわざ」が類比として引用される場合もある。 そのことわざや慣用句の正しい意味 **や用法**を知っていないと、それが**適切な「類比」**であるかどうか自体の判断が困難になるので注意。

★(66) 比較トラップ(別に比べてないし!)

・本文中でそもそも比較対象とされていない「ある内容《A》」と「ある内容《B》」とを、【AよりもBが~】、 【Aに比べてBは~】のように比較する形にして説明し、見せかけの説得力により誤答に誘導する。本文に「対比的な事柄(ことがら)」があったとしても、それが即(すなわ)ち「比較される内容」であるとは限らない。また、【Aと違ってBは~】、【Aと異なりBは~】、【Aとは対照的にBは~】、【A以上にBは~】のように表現を変えて比較に気づかれないよう調整してあることが多いので注意。

★(67)価値トラップ(価値判断してないし!)

・本文においては、ある事柄(ことがら)について特に「良い・悪い」等の「価値や評価」を与えているわけではないのに、選択肢の説明においては作為(さくい)的に価値(評価)を与えた意味内容とし、見せかけの説得力により誤答に誘導する。「良い・悪い」、「正しい・間違っている」、「大切だ・重要ではない」、「素晴らしい・最低だ」、「好ましい・好ましくない」のように、物事について価値や評価を与える言葉を「価値語(評価語)」という。本文において、「筆者(作者・登場人物)は何に『価値』を置いているのか」、あるいは、「そもそも『価値や評価』が読み取れるのかどうか」などを正確に把握(はあく)しよう。

★(68) 比較価値トラップ(比較と価値の合体!)

・本文中の「ある内容《A》」と「ある内容《B》」とを比較し、そのうえで、さらに【Aに比べてBは良い(悪い)】のように「不必要な評価や価値」を与え、見せかけの説得力により誤答に誘導する。本文に「対比される事柄(ことがら)」があったとしても、それを比較形式によって必ずしも「両者いずれかに評価や価値を与えている」とは限らないので注意。(66)「比較トラップ」と(67)「価値トラップ」を複合した手法。

★(69) <u>同語反復(循環論法/おんなじこと言ってる!/オウム返し)</u> ※(98) 『前後同一』参照!・「世界平和のためにはどのような社会にすべきだと筆者は考えていますか」という問いに対し、「戦争の起きない社会にすべきである」といった一見もっともらしい説明が書かれてある。しかし、これは、「戦争が起きない社会を実現する必要がある」と言っているのと同じことなので、実は設問の要求には何も答えていない。設問の内容がそのまま選択肢の説明において無意味に繰り返されていないかどうかを確かめる視点を持とう。

※同語反復:「善人は善い人だ」、「雨が降る日は天気が悪い」のように同語や類義語を無意味に繰り返すことを「同語反復」(同義反復・類語反復)という。トートロジー。

■循環論法:「彼は勤勉だ(結論)。なぜなら、彼は真面目だからだ(根拠)」は、「彼は真面目だ(結論)。なぜなら、彼は勤勉だからだ(根拠)」と同じ意味であり、このように、「結論と根拠とが単純に循環し、証明とならない」論法を「循環論法」という。選択問題において、「Aであるのはなぜか」と問われているのに、「それはAだからだ」といかにも理由らしく説明されていないかどうかを確かめる視点を持とう。また、「消しゴム貸して。だって、消しゴム貸してほしいから」のように、日常においてもうっかりと循環論法によって言い訳をしたり反論したりすることがあるので注意しよう。※p.26を参照!

※本項とは別に、「<u>『選択肢の説明文内』において『同語反復や循環論法』が用いられている場合」に</u>ついては、(98) 『前後同一(ダブり/同語反復/循環論法)』を参照のこと。

★(70)偽装飛躍(これ正解かよ!)

・説明における表現や文脈を巧妙(こうみょう)に調整することで、正しい内容でありながら、飛躍した、もしくは飛躍した印象を与える説明となっている。一般に多くの小学生(受験生)が消去するよう指導されている、「『言い過ぎ』の印象や『大げさ』な印象を与える表現」を作為(さくい)的に組み込んで誤認を図(はか)る場合も少なくないので注意。(2)「カモフラージュ」の一種。

★(71)<u>屁理屈(ああ言えば、こう言う)</u>

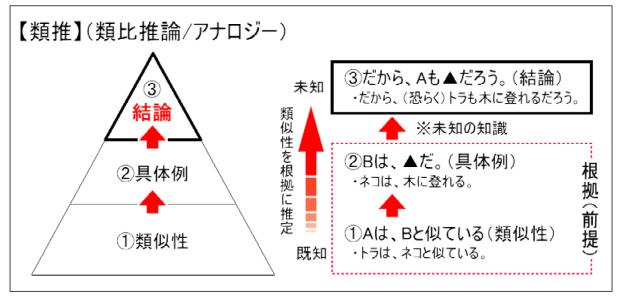
・無関係な事柄(ことがら)を無理やり関連づけて主張される、まるで筋の通らない理屈。日常においては、自分の非を認めたくないときや言い逃れをするときに、咄嗟(とっさ)に屁理屈を言ってしまうことがあるかもしれない。自分で面白い屁理屈の例文を考えてみよう。

·警官:この牛泥棒め、逮捕する!

・犯人:だんな! 誤解ですぜ! あっしはたまたま綱を拾っただけで、そしたら牛が繋がっていましてね、牛のやつが勝手に付いて来ただけですってば!



■基本的な論理⑩ 類推(類比推論)



・「類推(類比推論)」とは、ある事柄について、「Alt、Bと似ている」と「類似性」を認め、次に「Bが▲(という性質)なら」、「(恐らく)Aも▲(という性質)だろう」と推理する方法です。

【類推の形式】

①Aは、Bと似ている。

【類似性の確認】

・花子さん:トラは、ネコに似ているところがあるね。

②Bは、▲だ。(Bは、▲という性質を持つ。)

【具体例の提示】

・愛子さん: ネコは、木に登れるわ。

③だから、(恐らく) Aも ▲ だろう。(Aも ▲ の性質を持つだろう。)

【類推結論】

・花子さん: それなら、きっとトラだって木に登れるはずよ!

- ・花子さんが①「トラは、ネコに似ている」と類似性を指摘したので、愛子さんは身近な存在であるネコの性質について考えてみたところ、②「ネコが木に登っている」姿を思い浮かべました。そこで、花子さんは、そうした情報を根拠(前提)として、③「トラがネコと類似した性質を持っているなら、きっとトラも木に登れるだろう」と類推したのです。ちなみに、トラやライオン、チーター、ヒョウ、ジャガー等のネコ科の動物は木に登ることができます。
- ◎「類推(類比推論)」は、「類比」、「アナロジー」とも呼ばれ、「<u>既知の知識」をもとにして「未知の知識」を新たに得るための強力な思考法</u>の一つです。日常においても私たちは、ものごとについて推測したり、仮説を立てたりする際に、無意識的にこの「類推(類比推論)」という思考法を活用しています。

◎類比論法

・類似性のある例を挙げて、自分の主張に説得力を持たせる論法です。

・お母さん: [A] 勉強はね、[B] スポーツと同じなの!

【類似性の確認】

・翔平君: [B]スポーツは、[▲]目標に向けて毎日練習することが大事だね。【具体例の提示】

・お母さん: だから、[A]勉強も、[▲]合格を目標に毎日努力することが大事よ! 【類比結論】

◎選択問題においては、「ことわざや慣用句」等も「類比論法」に利用される場合がある。厳密な読解と検討によって、それが「適切な類比」として機能しているのかどうか、あるいは、単にダミーとして見せかけの説得力のためだけの類比となっていないかどうかを見極められるようになろう。

■基本的な論理⑨ 弁証法

【弁証法】

【高次の克服・解決】・

AIとの共存・人間性の回復と向上

~人間らしい、より良い生き方の獲得~ 人間本来の能力や五感を積極的に生かし、 自ら思考、判断し、真に人間らしく生きる

アウフヘーベン(止揚)

※矛盾を捨てず受け入れたうえで(保持したまま)

AIによる人間操作 矛盾

人間の能力と、五感の減退

※内包されていた矛盾の現出(対立・葛藤へ)

AI社会の実現

·AIの進化と、AIへの依存 ※AI: 人工知能

※弁証法は、『対立するものを上手く融合して別の新しい発想をする方法』のことでは ありません。また、「良い所」だけを取り上げて上手くまとめる『折衷案(せっちゅうあん)』とも、 「双方が譲り合って一致点を見出す『妥協案(だきょうあん)』とも本質的に異なります。

・「弁証法」とは、①【正=命題(出発点となる問題)】がまずあり、その内部から②【反=矛盾(対立・葛藤】 が現れ出ると、その【反=矛盾】を捨てず、受け入れたうえで(保持したまま)、③【合=統合(高い次 元での克服(こくふく)・解決)】へと至(いた)らしめる思考形式です。そして、【反】を受けて【合】へと進化 (深化)・発展させる、この最終段階を【止揚(しょう=アウフへーベン/ドイツ語)】といいます。

・【反=矛盾】は完全に否定し捨て去るのではなく、むしろそれを認め、受け入れて発展のための糧と してこそ【合=統合(高次の克服・解決)】の実現を可能としますから、弁証法は、一般に同様のものと 解釈されている、「対立するものを上手く融合(ゅラごラ)して別の新しい発想を生む方法」のことではあり ません。また、「良い所だけを取り上げて上手くまとめる『折衷案(せっちゅうあん)(良いとこ取り)』」とも、 「双方(そうほう)が譲(ゆず)り合って一致点を見出す『妥協案(だきょうあん)』」とも本質的に異なります。

■『サピックス 新小6·3月度組分けテスト(令和四年/2022)3月実施)』で扱(ぁっゕ)われた文章(『スマ ホを捨てたい子どもたち一野生に学ぶ「未知の時代」の生き方(山極寿一)』を例に「**弁証法的解釈**」 をすると、以下のようになります。(筆者自身が『弁証法的思考法』により主張を展開しています)

【弁証法の形式と例文】

- ①【正】命題(出発点となる問題)
- ・「現代はAI(人工知能)が進化し、人間はAIへの依存を強めている」
- ②【反】内包(ないほう)されていた矛盾の現出(対立・葛藤へ)
- ・「AIへの依存が強まるとともに、人間が持つ本来の能力や五感の働きが生かされず、 ますますAIに操作され、人間らしさが失われてゆく」
- ③【合】統合=【反】を受け入れて発展のための糧とし、高次の克服・解決を実現する。
- ・「機械化、情報化が進展する現代、AIに依存しすぎず、人間本来の能力や五感をもっと 積極的に生かして、自分の頭を使って考え、判断し、また、主体的に行動することで、AI と共存しつつ、真に人間らしい、より良い生き方を獲得し、実践すべきだし
- ◎文学的文章の場合でも、例えば、①【正】『主人公の、周囲に流されるまま、自分を偽り、自分らし さを失った消極的な現在の生き方』から、②【反】『今のままの自分であり続けてよいのか』という 「矛盾(対立・葛藤)」が生じ、何かのきっかけを経て、③【合】『それまでの自分のあり方を否定せず、むしろそれをありのままに認め、受け入れて成長の $粗(か\tau)$ とし、本当の自分らしさを求めて、自分に 正直に、力強く前向きに生きてゆく』といった「高次の克服・解決(より良い生き方の獲得(かくとく)= 人間性の向上)」がもたらされる、というように「弁証法の思考形式」を読解に適用できる場合があり、 これにより、各種問題への解釈の仕方や記述答案の質にも大きな違いが出てきます。
- ◎日常においても、私たちはさまざまな場面において無意識的に「弁証法的思考法」によって物事を 考えたり、対処したりすることがあります。文章を書くとき、話し合いをするとき、図画や工作などの創作 に取り組むとき、創造的な発想に挑(いど)むとき、困難を克服しようというとき、自分のあり方や生き方に 悩(なや)むとき、未来への道筋を思い描(えが)くときなどにおいても、意識的に「弁証法的思考法」を活 用してゆきましょう。

*8:前後即因果(祈ったから合格した!)

・「入試前日に必死に合格を祈(wの)ったら、本当に合格した。だから、合格したのは祈ったからに違 いない。」のように、「『ある事柄(前件A)』が起きた後に、続いて『別のある事柄(後件B)』が起きた」 という連続的な事実を捉(とら)えて、そもそもそこに因果関係が存在しないにもかかわらず、「《前件A》 が《後件B》の原因(理由)である」と無理やり因果づけることを「前後即(そく)因果」という。選択問題に おいては、本文におけるある事柄どうしが自然な形で連続していても、それが即(すなわ)ち因果関係を **示しているとは限らない**ので、「**見せかけの説得力**」に引きずられないよう、論理的に文章を読み、理 解し、また、記憶に頼らず、本文との照合、検討を徹底しよう。

*9: <u>疑似相関(見せかけの相関)</u> ※p.26参照!

- ・「(A)アイスクリームの販売量が上がった。」、「(B)夏の間、電気代が増えた。」、「だから、アイスクリ ームの販売量の増加が、夏の電気代が増えた原因だ。」のように、本文中のある内容(A)と(B)との 間に相関関係が認められる場合に、無理やりそこに因果関係をこじつけて説明してある。
- ・ちなみに例文の場合、実際には(A)と(B)は(B)の要因(C=気温の上昇)」によって変化しているのだが、それがはっきりと目に見えるものではないために、(A)と(B)とが「因果」によって関連づいてい る印象を与えてしまう。
- ※相関関係:一方の値と別の一方の値とに関連性があること。
- ※因果関係:原因と結果との関係。因果関係のあるものには相関関係があるが、相関関係があるか らといって、それがそのまま因果関係を示しているとは限らない。

※疑似相関: 見せかけの相関。ある事柄(A)が変化するとともに他のある事柄(B)も同時に変化して いる場合、その(A)と(B)との「相関関係に因果関係があるように誤(ぁゃぉ)って捉(とら)えてしまうこ

・「十代の若者(または高齢者)に自動車を運転させるのは非常に危険だ」という主張 は、「運転をする若者(または高齢者)自身が事故等の危険な目に遭(ぁ)いやすい」と いう意味と、「若者(高齢者)の運転によって他者が危険にさらされる可能性が高い」と いう意味のいずれにも解釈ができ、曖昧である。

※曖昧(あいまい): 意味内容が二通り、または二通り以上に解されること。 意味内容をしつ かりと捉(ヒら)えにくく、はっきりしないこと。



※2012年(平成24年)8月10日 千葉市美浜区の『検見川の浜』にて撮影

【疑似相関(見せかけの相関)】

- ・友紀夫君:アイスクリームの販売量が、上がっていますな!(A)
- ・進次郎君:熱中症になる人も、増えている!(B)
- ・友紀夫君:アイスクリームの販売量の増加が、熱中症増加の原因ですな!!!
- ・進次郎君: 今のままではいけない! だからこそ、日本は今のままではいけない!
- ·ひろゆき君: それって、あなたの感想ですよね!
- ・竜兵君:くるりんぱ!
- **・たけし君**:ちょっと何言ってんのかわからない。

ことが

・ある事柄(A)が変化するとともに他のある事柄(B)も同時に変化しているとき、そこに「相関関係がある」というが、単に相関関係を示しているだけのものに「因果関係」を捉(とら)えてしまうことを「疑似相関(ぎじそうかん = 見せかけの相関)」という。

※相関関係:一方の変化とともに、他方も変化するような関係。

・例文の場合、実際には(A)と(B)は「別の要因(C=気温の上昇)」によって変化しているのだが、それがはっきりと見えるものではないために、(A)と(B)とが「因果」によって関連づいている印象を与えてしまう。「因果関係のあるものには相関関係がある」が、相関関係があるからといって、それが因果関係を示しているとは限らない。

【循環論法】

・友紀夫君と進次郎君とは特殊な通信方法を使って互いに自由に意思疎通できるようですが、二人の会話は論理が破綻(はたん)していて、一般の人たちには全く意味不明ですね。竜兵君もたけし君も呆(ぁき)れてしまいました。ちなみに進次郎君の、「今のままではいけない! だからこそ、日本は今のままではいけない!」のような論法を「循環論法」といいます。同語を無意味に繰り返して、いかにも根拠に基づいた主張らしく見せかけるだけの論法ですから、話の中身が空っぽで、何の問題解決にもなりません。※(69)、(98)『同語反復(循環論法)』を参照!

・そこで、ひろゆき君は、堂々と「空っぽの主張」をして誇らしげな進次郎君に対し、「問題に対して真摯(LAU)に向き合いもせず、平然と論点をはぐらかし、明確な根拠も具体案も示さず、虚勢(きょせい)を張っては自己満足に浸(ひた)っているばかりで、ただ当たり障(さわ)りのないその場限りの感想を述べて能天気に受け流して済まそうとする言動は、実にいい加減、かつ無責任であり、人を馬鹿にしている」と非難しているのです。

- ※破綻(はたん): 物事が修復不可能な状態にまで壊(こわ)れること。...
- ※虚勢(きょせい)を張る: 実際よりも優(すぐ)れたものに見せかける。空いばりする。
- ※真摯(しんし): 真面目(まじめ)に、ひたむきに物事に取り組むさま。
- **※能天気**(のうてんき):何事も深く考えず、常に呑気(のんき)で気楽なさま。また、その人。





(7)事後情報効果

・ある出来事を経験した後に、実際の出来事には含まれていなかった情報を与えられると、その誤った情報に沿(そ)うように記憶が変容する現象。自分の理解した内容が、選択肢の説明内に含まれているさまざまな情報によってその都度揺(Φ)れたりぶれたりしないよう、本文の正確な内容把握訓練を徹底しよう。論理的には「前提操作」として利用される。

(8)催眠誘導(トランス誘導/幽体離脱誘導)

・哲学的な内容の文章や、抽象表現の多用された難解な文章、間接描写が多く意味が捉えづらい作品、あるいは、筆者(作者)独自の世界観に基(もと)づく極(きゎ)めて個性的な内容の文章などが素材文として扱(ぁつか)われると、選択肢の説明も必然難解となり(かつ長文化する場合もある)、解答者が文面を見つめるうちに朦朧(もうろう)とし、やがて催眠状態に陥(ぉちい)ってしまう。あるいは、トランス状態や幽体離脱に陥り、浮遊感や快感を伴(ともな)いながら「ホゲー」となる危険性もある。平常より難解な文章に対しても全力で食らいつき、頭脳をフル回転させて問題解決に取り組む訓練を積み、対応力をしっかりと強化しておこう。

- ※催眠(さいみん): 眠気(ねむけ)を催(もよお) すこと。
- ※朦朧(もうろう): 意識がおぼろげで、はっきりしないさま。
- ※トランス: 魂(たましい)が抜けてうっとりとした状態。
- ※幽体離脱(ゆうたいりだつ):意識や霊魂(れいこん)が肉体から離れている状態。体外離脱。

■難易にかかわらず、問題文の文字を見た瞬間に気絶してしまう受験生は少なくない。また、集団授業などにおいても、授業中に目を開けたまま気絶している受験生や、瞑想(めいそう)中の受験生、目下(もっか)幽体離脱中の受験生の姿もしばしば見受けられることだろう。中学受験を人生のステップとして自ら選択した以上、自分一人の力ではどうにもならないなどと諦(あきら)めてしまわず、時に信頼できる先生や大人たちの力も借りながら、まずは自分にできることから始めよう。「未来の自分」の姿をはっきりと思い描(えが)き、それに強く、強く自分を引き付け、高めていく努力を日々積み重ねていってほしい。「自分の力で自分を育てる」姿勢、「自分の力で自分を作り上げる」姿勢の大切さを忘れないこと。

(9)ゾンビ効果

・一度誤答であると確信を抱いて消去したにもかかわらず、その後も、「もしかしたら本当は正解なのではないか」、「手招きする方へ行けば自分は楽になれるのではないか」といった観念に度々(たびたび) 襲(おそ)われては、いよいよ増幅する恐れと不安の中で、やがてふいに正常な判断力を失い、気が付くとまんまと誤答へと引きずり込まれてしまっていたのかよ! という、それはそれは恐ろしい現象。※ゾンビ:邪悪(じゃぁく)な霊力(れいりょく)などによって、生きた姿を与えられた死体。蘇生(そせい)死体。※取り憑(つ)く:霊などが乗り移る。

(10) サブリミナル効果(隠し誘導文)

・「こっちへおいでよ♡」、「正解はこれだよん♡」、「もうお前を離さないもんね\(^o^)/_」のような、受験生の潜在(せんざい)意識に強く働きかける文言(もんごん)をいくつかの要素に分解したうえで、それを選択肢の表現の中に巧妙に埋め込み、誤答へと暗示誘導する。咄嗟(とっさ)には認識不可能な潜在情報を説明内に密(ひそ)かに埋め込むことで受験生をまんまと誤答へと誘導する、それはそれは、マジで恐ろしい暗示手法。

※サブリミナル効果:映画やコマーシャル等において、例えば「コーラを飲もう」、「ポップコーンを食べよう」といったメッセージを表示した一コマをフィルムの中に何枚か挟(はさ)み込んで映写すると、数千分の1秒という、視覚では通常認識できない極めて短い時間に繰り返して表示されるそのメッセージが、コーラやポップコーンの売り上げ増加に反映するとされる現象。ある知覚刺激が非常に短時間であるなどの理由で意識としては認識できないが、潜在意識に対して一定の影響を及ぼすことができるとされる。心理学や認知科学の分野での実証が困難とされているが、心理操作や暗示誘導、洗脳、マインドコントロール等に悪用される恐れがあるため、日本では90年代にNHKや民放がこの手法を使用しての放送を禁じ、海外でも同様に禁止している国が多い。

※洗脳:暴力的な手段など強制力により、相手の思想や主義を根本的に変えさせること。

※マインドコントロール:暴力的な手段などを用いずに相手の心理状態を制御(せいぎょ)し、特定の意思 決定や行動へと誘導すること。

【心理操作術】

(1)確証バイアス

・自分が信じている考えや判断を裏付ける情報にばかり注目し、逆に不都合な情報については無視する心理傾向。バイアスとは、偏見(ヘルけん)のこと。選択問題においては、「論理的飛躍」や「前提操作」といった手法に利用される。思考に方向性を定めること自体は大事であるが、都合の良い情報にばかり目を向けて判断を誤らせてしまうことのないよう注意しよう。

(2) 初頭効果

・選択肢の説明において、後半部に誤った内容を述べながら、前半部に正しい内容を述べることで目立たせ、正解としての印象を強く与えて誤答に誘導する。「人間は最初に与えられた情報ほど信じやすい傾向をもつ」という、心理学でいう「初頭効果」を作為 (さくい) 的に利用する。時間節約のため、専 (もっぱ) ら選択肢の説明における冒頭 (ぼうとう) 部や前半部に書かれた内容によって正否 (せいひ) を判断する傾向の強い解答者を誤答に誘導しやすい。

※初頭効果:最初に提示された特性が印象に残り、その後の評価に影響を及ぼす心理的作用。逆は「新近効果(心理学用語としては、表記は「親近」ではなく「新近」が正しい)」。

(3)新近効果

・選択肢の説明において、<u>前半部に誤った内容を述べながら、後半部や末尾に正しい内容をべることで目立たせ、正解としての印象を強く与えて誤答に誘導する</u>。「人間は最後に与えられた情報ほど信じやすい傾向をもつ」という、心理学でいう「新近効果」を作為(さくい)的に利用する。小手先テクニックとして、選択肢の説明における末尾や後半部に書かれた内容によって正否(せいひ)を判断するよう指導されている解答者を誤答に誘導しやすい。

※新近効果:最後に与えられた情報や、直前に与えられた情報が特に印象に残り、その後の評価に影響を及ぼす心理的作用。尚(ਖ਼ਖ਼)、心理学用語としては、表記は「親近」ではなく「新近」が正しい。 逆は「初頭効果」。

(4)アンカリング(初期値提示誘導)

・例えば、「ピザ」という語を相手に10回繰り返させた後、「 $\hat{\mathbf{h}}$ 」を指差して「これは何か」と問うと、相手がつい「ヒザ」と答えてしまう現象を経験することがある。あるいは、ある商品の値札に書かれてある「元の値段」が二重線で消され、 $\hat{\mathbf{H}}$ (あわ)せて「割引価格」や「値下げ価格」が書かれてあると、それを見て「この商品は得だ」という印象を抱(いだ)いてしまうこともある。このように、「最初に提示された情報(初期値)」が「アンカー=基準」となって、その後の判断に影響が及ぶ心理現象を「アンカリング」という。論理的には「前提操作」の一種。

※アンカー: 船の錨(いかり)のこと。最初に与えられた情報が「アンカー」となって心にとどまり、その後の思考や判断がその「アンカー」に引っ張られてしまう心理現象を「アンカリング」という。

※本資料の47ページに『消えた1,000円の謎』という論理パズルを掲載(けいさい)しています。「アンカリング」による心理操作と「前提操作」を念頭に、是非問題解決に挑(いど)んでみてください。

(5) 誤前提暗示(二分法の罠)

・「サイドメニューはポテトになさいますか、それとも、サラダになさいますか。」のように、「いずれか一方を必ず選択する」ことを「前提」として二者択一(たくいつ)を提示して誘導する暗示手法(二分法の罠(かな))。もっともらしい選択肢が与えられると、限定されたその選択肢の中から判断をしがちであるという人間の心理傾向を作為(さくい)的に利用する。選択問題においては、説明文中に「否定できない二つの要素を選択的に並列」することで暗示をかけ、誤答へと誘導する。論理的には「前提操作」の一種。※日本のマスコミ(マスメディア)による世論調査やアンケート等においても、(4)「アンカリング」、(5)「誤前提暗示」などの暗示手法や、(41)「前提のすり替え」、(45)「条件トラップ」などの「論理操作(前提操作)」によって質問項目の表現や文脈を巧妙(こうみょう)に調整し、回答者の心理と判断を意図的に一定の方向へ誘導しようと図るケースがしばしば見受けられる。

(6)イエス誘導法

・選択肢の説明文に、解答者が「YES(イエス=その通りだ)」と肯定せざるをえない語句や表現を複数仕込み、「肯定の認知を連続させる」ことで誤答に誘導する。「同意の積み重ね」により自然と反論意識が弱まっていく人間の心理傾向を作為(さくい)的に利用する。選択問題では、「本文中の語句が沢山含まれているから正解だ」、「肯定要素が複数あるから正解だ」といった、頭を使わない安直な機械的判断をしないよう注意しよう。論理的には「前提操作」の一種。

★(72)主語のすり替え(えっ、マジか!)

・選択肢の説明における主語(主部)が別のものにすり替わっている。また、逆に主語や視点・論点が正しくとも、それに続く説明が虚偽(きょぎ)の内容や無関係な内容にすり替わっている場合もあるので注意。普段、「主語と述語の係り受け」をほとんど意識せずに文章を読んだり書いたりしている受験生が相当に存在することを作問者は心得ている。「主語と述語の係(かか)り受け」、「語句と語句との係り受け」を意識し、「文脈」を正しく把握しながら読み、書き、話す習慣を持とう。

※主語:「何が」「誰が」に当たる言葉。他に、「は・も・の・こそ・だって・さえ・まで」などの助詞は「が」 に替(m)えて用いられるので注意。(空が泣いている=空は/も/だって/さえ/まで泣いている)

★(73)心情違い(気持ちが違う)

・人物の心情に合致(がっち)しない心情にすり替えてある。「不思議に思っている」、「予想外に思っている」、「驚(ぉどう)いている」、「願っている」、「興味を引かれている」等の表現によって人物の「共感度や受け止め具合」を低めたり、ぼかしたりする場合や、逆に、「絶望している」、「決意している」等の表現によって「共感度や受け止め具合」を高めてある場合もあるので注意。普段の生活においても、「なんとなくそのような気持ち」といった感覚で済ますのではなく、「対象への共感や理解」を深め、それを「ふさわしい言葉で表現する」心掛けを持つことが大切だ。

★(74)理由違い(理由のすり替え)

・説明における『理由(根拠)』が、本文における本来の「理由(根拠)」とは異なったものにすり替えて<u>ある</u>。この『理由を示す部分』の説明は、本文中からの引用である場合や、変造や捏造(ねつぞう)による場合もある。また、「~から(ので・ため)」のような表現を用いるとそこが『理由を示す部分』であることに気づかれやすいため、「~ことで(によって)/~わけで/~せいで(おかげで)」のように言い換えられることが多い。

※変造:既存(きそん)のものを加工して、形状や内容を不正なものに作り変えること。

★(75)<u>目的違い(目的のすり替え)</u>

・説明における『目的』が、本文における本来の「目的」とは異なったものにすり替えてある。この『目的を示す部分』の説明は、本文中からの引用である場合や、変造や捏造(ねっぞう)による場合もある。また、「~ために」のような表現を用いるとそこが『目的を示す部分』であることに気づかれやすいため、「~に向けて」、「~をしに」、「~となるように」のように言い換えられることが多い。

★(76)対象違い(対象のすり替え)

・<u>ある事柄(ことがら)についての「対象」が、別の事柄や人物にすり替わっている</u>。記憶に頼(たよ)って判断しようとせず、本文との照合作業によって、「何に対して」、あるいは「誰(だれ)に対して」なのか、対象となるその内容を正確に捉(とら)えるようにしよう。

★(77)定義のすり替え(定義ちがくね?)

・筆者、あるいは作者によって「特に定義づけられた概念や語句」を、それとは異なる意味合いにすり 替えて説明してある。本文中の概念や語句については、筆者(作者)によって「特定の意味合い」で使用されているのか、あるいは「一般的な意味合い」で使用されているのかをきちんと区別しよう。

※定義:用語の意味や概念(がいねん)の内容を明確に限定すること。その意味・内容。

※概念(がいねん): 認識した内容の本質や性質。物事の大まかな意味内容。 ※(82)を参照のこと。 ※違(5が) $\langle \mathbf{T}/\mathbf{a} \mathbf{f} \rangle$: 俗語(ぞくご)。正しくは「**違って**/**違い**」とする。また、「違かった」、「違くない」も、それぞれ「**違った**」、「**違わない**」と正すこと。

★(78)趣旨違い(脱線/意味違い/意味ズレ)

・「仲直りして、握手(ぁくしゅ)した(事柄の前後関係を示す文脈)」と、「握手して、仲直りした(並行的状況を示す文脈)」とでは意味が異なるように、説明の趣旨や文脈が正確でなかったり、ずらされていたりする。「記憶に頼(たょ)って選択肢の読み比べだけで判断」しようとしても、あるいは、「要素の有無」や「要素の正否」だけを基準に判断しようとしても、趣旨や文脈を巧妙(ニラみょラ)に調整してあるため、一見しただけでこれに気づくことは難しい。普段から速く、正確に文脈を辿(たど)り、文意を掴(つか)む訓練を積み、また、文章を書くときや話をするときにも、正しい文意・文脈を強く意識するようにしよう。

※趣旨(しゅし): 言おうとしている中心的な内容。趣意(しゅい)。主旨(しゅし)。

※文脈:「文章中の文と文」や、「文中の語と語」の論理的なつながり具合。

★(79)説明不足(具体性欠如/過度な抽象化/テキトーだな)

・趣旨(しゅし)や方向性はほぼ正しいが、具体性に欠けていたり、あるいは、過度に抽象化されていたりするため、説明として不十分、もしくは不完全となっている。その説明が「具体的でわかりやすいかどうか」、「的確であるかどうか」、「曖昧(ぁぃぁぃ)な所は無いかどうか」をよく検討できるようになろう。

★(80)語のすり替え

・日常においては、例えば「共感」、「同情」、「理解」は感覚的に似た意味の語として捉えられることがあるが、そのような一般的傾向を利用し、本文の内容に合致(がっち)しない意味の語にすり替えてある。

※共感:他人の考えや感情について、<u>自分もその通りだと感じること</u>。他人が抱いている感情と同じ感情を自分が持つこと。

- ※理解:内容や意味などがわかること。他人の気持ちや立場に立って思いやること。
- ※同情:他人の苦悩や不幸を**気の毒に思い**、自分のことのように思いやっていたわること。

※他に、「反省⇔後悔」、「認識 (知ること) ⇔理解 (分かること)」、「真面目 (まじめ) ⇔素直・正直」、「嫌 (いゃ) だ⇔嫌 (きら) いだ」、「絶望⇔希望を持てない」、「疑う⇔信じられない」、「信頼が揺(ゆ)らぐ⇔信頼 を損(そこ) ねる」、「中立⇔無関心」、「中途半端⇔いい加減」、「負い目⇔引け目」、「意外だ⇔不思議 だ」などはそれぞれ同義ではないので、うっかりと捉(とら) え違えてしまわぬよう注意。

■日常においては、それぞれの語を意味や用法を厳密に区別せず感覚的に開いて済ませてしまうことがある。国語学習においては、言葉の辞書的な意味や用法を適宜(てきぎ)国語辞典を用いて確認するなど、言葉に関わる取り組みや言語生活への姿勢をより強く意識することが大切だ。

■国語辞典を使用して言葉の意味を調べる際には、意味が分からない言葉があったら何も考えずに即座に辞書を引くのではなく、まずは文脈や言い回し、その言葉に含まれている漢字等を手掛かりに、知識や語感、また、それまでの生活体験等にも照らし、自分なりに意味を推定し、そのうえで本来の正しい意味や用法を確認するという手順を踏むほうがよい。そして、何より、その言葉を単に知識事項や暗記項目として済ますのではなく、今後自分が生きていくうえで使いこなしていく言葉の一つとして、あるいは、これからの「自分」というものを作り上げてくれる大切な素養の一つとして捉(とら)え、積極的に自分の中に取り込み、生活の中で活用していく姿勢で学ぶことが大切だ。

★(81)換言トラップ

・選択肢の説明において本文中のある内容や表現が言い換えられている場合に、本来の意味内容を変えてあったり、微妙にずらしてあったりする。「抽象化」や「一般化」により「言い換え」がなされている場合、それが本文の意味内容と合致(がっち)する表現であるかどうかをよく検討しよう。 ※換言(かんげん):言い換(か)えること。

★(82)<u>ぼかし語トラップ(概念語によるはぐらかし)</u>

・「不思議な出来事/経験」、「奇跡的な経験/出会い」、「未知の世界/未知との出会い」、「正反対の結果/考え」、「本質的な価値/意義」、「本物の価値/関係」、「次元の異なる経験/段階」のように、本文中のある内容が「概念語(抽象語)」によって言い換(か)えられている場合に、その「概念語」が本文の内容に即(そく)した適切な意味としてではなく、単に「意味のぼかし/説明のはぐらかし」として利用されている。「概念語」を感覚的に「何となくそんな意味」で捉(とら)えていると、印象による誘導にかかる恐れがある。

※概念(がいねん):物事の本質や性質について、抽象的、普遍的に捉(とら)えた意味内容。

■概念録

- ・物事の本質や性質について、その内容を抽象化して表す語。
- ・例: 友情・信頼・共感・理解・同情・喜び・悲しみ・安心・不安・好意・愛情・決意・親切・希望・失望・絶望・疑問・正義・対比・比較・対立・矛盾(むじゅん)・客観・主観・絶対・相対・文化・習慣・自然・個人・社会・人生・教育・情報・技術・現在・過去・未来・時間・空間・理想・現実・直接・間接・平和・自由・思考・認識・判断・論理・価値・評価・可能性・表面的・合理的・多様性・因果関係、民主主義、など。※自身の「言葉の引き出し」にしまい込まれている様々な言葉を適宜(てきぎ)引き出して自在に使いこなせるよう、普段から記述や口述によって意識的にアウトプットする訓練を継続することが大事だ。

★(83)結論違い(ゴール間違えた!)

・論理的な筋道は正しいが、そこから導き出される結論が誤っていたり、ずれていたり、不完全だったり、あるいは、「可能性の一部」に過ぎない内容だったりする。普段から「自分の頭をよく使い、論理的に文章を読み、論理的に考え、検討し、適切な結論を導く訓練」を怠(おこた)りなく。

★(84) 道筋違い(コース間違えた!)

・選択肢の説明における結論自体は正しいが、そこに至るまでの論理的な筋道に誤 $(\underline{b} + \underline{b}) \underline{b} \underline{b} \underline{b}$ 。結論の正しさに引きずられて慌 $(\underline{b} + \underline{b})$ でて判断してしまわぬよう注意。普段から「自分の頭をよく使い、論理的に文章を読み、論理的に考え、検討し、適切な結論を導く訓練」を怠 $(\underline{b} + \underline{b}) \underline{b} \underline{b} \underline{b}$ 。



★(109) おびき寄せ(つぎはぎ/コラージュ作品)

・本文における「キーワード」や「文中語句」を説明内に複数使用して目立たせ、誤答におびき寄せ<u>る</u>。「キーワードに注目!」、「よく出てくる言葉に注目!」といった単眼的な判断の仕方をせず、国語学習においては、本文の内容把握(はあく)にまず重点を置き、種々(しゅじゅ)の視点と検討力とをもって選択肢の正誤を確実に判断できるよう訓練しよう。

※おびき寄せ:騙(だま)して誘(さそ)い寄せること。

※コラージュ: 現代絵画(カゥレンガ)の一技法。印刷物や写真の切り抜き、布や針金などの雑多なものを台紙に貼(は)り付けて一枚の作品とするもの。もとはフランス語で「のりで貼(は)る」という意味。

★(110)おとり(また引っかかったもん♡)

・本文の内容上、解答者が最も誤解しやすいと推定される解釈を説明し、誤答におびき寄せる。また、「そうだったらいいな」、「そうであってほしいな」のように、解答者自身がいかにも抱きやすい願望や「希望的観測」が説明内容とされていることもあるので注意。(109)「おびき寄せ」の一種。

※希望的観測:「そうだったらいいな」、「そうであってほしい」のように、根拠や事実等によるのではなく、自分の願望を優先して都合の良いように事の成り行きを推測すること。「今日の組分けテスト、前回よりもすごくよくできた。今度こそクラスアップできそうだ」など。例文の場合、「テスト結果という事実(根拠)」が明らかとなる前に、「都合よくクラスアップするという自身の願望を推測に反映」させている。他に、「最近、いろいろと運がいいから、お小遺(こづか)いを多めにもらえそうだ」など。

★(111)正答もどき(ゴースト/パラレルワールド/トワイライトゾーン/蜃気楼)

・「正答肢」の要素・文脈・表現等に非常によく似せ、真偽(LAぎ)の判断を困難にする。本文との照合において、問われている箇所とその前後近辺の情報を単眼的に確認しただけでは「正しい内容や要素」を読み取ることができない場合があるため、本文における前提内容、論理構造、文脈、表現、ニュアンス等を含め、厳密(げんみつ)かつ総合的に判断する必要がある。(109)「おびき寄せ」の一種。

※ゴースト:多重像。幽霊(ゆうれい)。亡霊(ぼうれい)。

※パラレルワールド: 並行(へいこう)世界。現実の世界と並行して存在するとされる別の時空世界。

※トワイライトゾーン: 昼でも夜でもない曖昧な時間帯である夕暮れ時。二者間の境界が曖昧な領域。時空の歪(ゆが)みに陥(おちい)ったり、超能力や心霊(しんれい)現象などの超常現象を経験したり、あるいは、宇宙人、タイムトラベラー、透明(とうめい)人間、地底人などの異世界の存在と遭遇(そうぐう)したりといった怪異(かいい)が起こるとされる時間帯。アメリカで制作されたSFテレビドラマのタイトルが語源。



※蜃気楼(Lんきろう): 光の異常屈折によって地上の物体が浮き上がって見えたり、逆さまに見えたりする現象。海上や砂漠で起こる。ミラージュ。





★(107)成り済まし(偽装理由)

・「なぜですか」という「理由説明を求める問題」でありながら、「問われている箇所の意味内容を説明してあるだけ」となっており、実は設問の要求である「理由」については何も答えていない。設問の要求をよく確認もせずに取り掛(か)かると、「それはどういうことですか」といった「内容説明を求める問題」と勘違(かんちが)いしてしまいやすい。また、「問われている箇所の表現を別表現に書き改めてあるだけ」の場合もあるので注意。本文の読解訓練だけでなく、「設問で何が要求されているか」や、「設問文そのものの読解」もしっかりとできるよう訓練しておこう。(109)「おびき寄せ」の一種。

★(108) <u>それってあなたの感想ですよね!</u>

・本文における「ある箇(か)所の意味内容を問う問題」等において、「本文の内容を踏まえた適切な解釈」ではなく、「単にその表現や内容から抱(いだ)きそうな主観的な感想や印象を述べ連(つら)ねてあるだけ」となっている。そもそも、求められているのは「感想や印象」などではないはずだ。「自分の抱(いた)いた感想(印象)と同じことが書いてあるから正解だ!」と見当外(はず)れの判断をしてしまわぬよう、本文の読解訓練を基本として、「設問の要求」を正しく把握(はあく)し、かつ、「設問文そのものの読解」もしっかりとできるよう訓練しておこう。(12)「論点違い」の一種。

*10: 論点混在(めまいがするわ)

・説明内に<u>複数の異なる「論点」が組み込んである</u>。それぞれの論点自体は重要なことかもしれないが、「何を中心の論点としているのか」が不明確で、焦点がぼやけてしまっている。「設問における論点」を正確に掴(つか)み、その「中心となる論点」に正しく沿(そ)って思考する訓練を積んでゆこう。

*11:単純例示

・本文中に挙げられている具体例、またはその一部がそのまま選択肢の説明に組み込まれているだけで、説明として成立していない。冷静に対処すれば、例示の引用だけでは説明にならないことにすぐに気づけるはずだ。

*12:否定不能(消極的肯定)

・最後の三択での「絞(しぼ)り込み」において、「積極的に肯定されうる選択肢」と「消極的に肯定されうる選択肢」とがあり、その判別が非常に困難となっている。いずれの選択肢も内容的には否定できず、際(きゃ)どい見極めが必要となる。設問の要求はもとより、思考の方向性、視点、論点、諸要素の有無や正否(せいひ)、因果関係、前提の正否、暗黙の前提、論理的飛躍、踏み込みの度合い、換言の適否(てきひ)、表現やニュアンスの調整等、さまざまな角度からの検討力が求められる。

【ダブルスタンダード(二重基準)】

・「同じことをして兄は怒られたのに、弟は何も答められなかった」のように、同じ一つの事柄(ことがら)について、状況によって二つの異なる基準を使い分けること。

※二重基準(ダブルスタンダード): 基準となる事柄が二つあり、立場やそのときの状況によってそれぞれの基準を都合よく使い分けること。日常における身近な例としては、「倫理(ワルク)に基(セと)づき、公正、中立に、事実を正確、かつ客観的に報道する」ことを責務として掲(かか) げながら、特定の思想や主義の上に立った偏向(ヘルこう)報道や歪曲(わいきょく)報道、捏造(ねっぞう)報道などによって世論誘導を図ったり、自らに都合の悪いことは一切報道しなかったりするなど、状況によって姿勢や見解を都合良く変える日本のマスメディア(マスコミ)の活動が挙(ぁ) げられる。

※マスメディア: テレビ・新聞・ラジオ・雑誌・インターネットなどの、マスコミ(大衆伝達・大量伝達)の手段となる、大量の情報伝達が可能な媒体(ばいたい)。また、マスメディアにより情報を発信する組織。

※マスコミ:マス・コミュニケーションの略。不特定多数の人々に対する各種情報の大量伝達。また、情報伝達の活動。

★(85)きっかけ違い

・本文中に書かれた「きっかけ」とは異なった不正確な「きっかけ」にすり替えて説明してある。「確か本文にはそのように書いてあったはずだから」と、「不確かな記憶や思いこみによって判断」したり、本文との照合無く「選択肢の読み比べだけで判断」したりせぬよう注意しよう。

★(86)<u>いきさつ違い(経緯違い)</u>

・本文中に描かれた「経緯(成り行き)」とは異なった不正確な「経緯」にすり替えて説明してある。「確か本文にはそのように書いてあったはずだから」と、「不確かな記憶や思いこみによって判断」したり、本文との照合無く「選択肢の読み比べだけで判断」したりせぬよう注意しよう。

※経緯(けいい):ことの成り行きや、それに伴(ともな)う様々な事情。

★(87) あらすじトラップ

・本文における「<u>ある部分の粗筋や要約文が書かれてあるだけ</u>」で、設問の要求には何も答えていない。<u>粗筋や要約文としては正しい内容であっても、「設問の要求」を正しく捉(とら)</u>えずに「選択肢の読み比べだけで判断」したり、「不確かな記憶や思いこみによって判断」したりせぬよう注意。

★(88)比喩説明不適 ※実在トラップ

・本文中の指定部分における比喩表現についての解釈が本文の内容に即しておらず、「単にその比喩表現が与える一般的なイメージの説明」、「主観的な印象の説明」、「単に辞書的な意味の説明」となっている。また、「単に別の比喩への言い換え」をして誘導を図る場合もあるので注意。比喩表現をいくつかの部分に「視点分割(要素分け)」し、それぞれの意味やニュアンス、文脈などが「本文の内容や主題等に即した具体的、かつ適切な解釈」となっているかどうかを慎重に検討しよう。

■『実在トラップ』… 例えば、「闇」という語が本文では「真実を秘めるもの」のように象徴的な意味合いを与えられているとして、それが選択肢においては「暗くて見えないところ/部分」のようにぼかしながら単に「実在・物理的存在」として、あるいは、単に「辞書的な意味」にすり替えて説明されている。

★(89) 暗示·象 徴トラップ ※『象徴・暗示』(p.14) 参照!

・単なる光景等の描写(びょうしゃ)について、無理やり主題や心情を投影させた「暗示」、もしくは「象徴的な意味」を与えた説明となっている。「暗示」や「象徴」を捉(とら)える視点は必須(ひっす)であるが、単なる光景や事物(じぶつ)の描写にまで無理やり意味付けをしてしまわぬよう注意。

※暗示: その後に起こる「事件」や「展開」を情景描写や種々の事象によって予(あらかじ)め読者にそれとなくほのめかしておく手法。 伏線(ふくせん)。

※象徴: 本文の内容において、一見さほど重要でなく思われる部分的な描写であるが、実はその作品の「主題」や「人物の心情」等と深く関連づく、作品上重要な意味や役割を与えられたものごと。

★(90)事実の主張へのすり替え

・本文では「花子さんは<u>女性だ」と書かれているものが、選択肢の説明では「花子さんは女性らしくあるべきだ」のように、「事実」を「主張」にすり替えて説明</u>されている。本文における「事実」と「意見(主張)」とをしっかりと区別して読むようにしよう。(12)「論点違い」の一種。

★(91) 具体例照合(落ち着いて慌てろっ ♡ ヾ(°▽°)′ ♡)

・「本文中の具体例は重要ではないので読み飛ばせ」と指導されている受験生が相当に存在することを作問者は心得ており、そこで、具体例をあらためて照合しないと選択肢の検討に進めないようにしてある。本文の通読段階において、具体例は速やかに内容を整理しつつ、本文全体におけるその意味や機能、また、筆者(作者)の主張との関連性などを総合的な観点から確かめよう。

★(92)非主要(後回しでよくね?)

・「設問における論点」とは異なる、「主要(中心)とは言えない論点」について説明されている。「設問における論点」から外(はず)れ切っているわけではなく、あるいは、『主要な論点に深く関連する内容』であることが多いため、判断に迷う恐れがある。「設問における論点」については、感覚的に「何となく」ではなく、「本旨(ほんし)」をしっかりと捉(とら)え、そのうえで「正しく方向づけて思考する」ことが大事だ。(12)「論点違い」の一種。

※本旨(ほんし):本来の趣旨(しゅし)。趣旨とは、言おうとしている中心的な内容のこと。

★(93) 一般論(一般論はさておき)

・本文の内容に沿(そ)わない、無関係な一般論が書かれてある。説明内容自体は「一般論として正しい」ために否定(ひてい)できないので、本文の内容をよく把握(はあく)をせずにいると誘導に陥(おちい)る恐れがある。「一般論としてはそのとおりだが、筆者の主張、本文の内容とは無関係である」と見抜けるようになろう。(109)「おびき寄せ」の一種。

※一般論:個々の具体的な事柄を考えず、広く全体を論じる議論。世間一般に広く認められると考えられる論。「自然保護は大切だ」、「適度な運動は健康によい」、「勉強すれば将来の役に立つ」など。

★(94)常識・道徳論

・「常識」や「道徳」としての説明となっている。常識として、あるいは道徳的に正しい事柄に対しては否定(ひてい)しづらく、逆にそれにふさわしくない事柄に対しては肯定(こうてい)しづらい一般心理を作為(さくい)的に利用する。「常識的、道徳的にはそのとおりだが、本文の内容とは合致(がっち)しない」と見抜けるよう、本文内容をあくまで客観的に把握する訓練を積んでおこう。(109)「おびき寄せ」の一種。※常識:健全な一般の社会人が共通に認めている、普通の知識や思慮(しりょ)分別。社会通念。※道徳:社会生活を送るうえで、個人が守るべき規範(きはん)。人が踏(ふ)み行うべき正しい道。尚、倫理(りんり)と道徳とは同義であり、根本的な相違はないが、現代の日本では、道徳の場合、「『徳』という意味合いを強く含意(がんい)し、自発的に正しい行為へと促(うなが)す個人の内面的原理として働く」というニュアンスを含む。

★(95) 迂言法

・例えば、「親友」のような「直接表現」ではなく、「①仲がよく+②相談し合える関係」のように、「複数の語を組み合わせて直接表現と同意となるよう言い換(ゕ)えて正答肢に用い、逆に誤答肢にはわかりやすい「直接表現」を用いて目立たせ、誤答への誘導を図る。「言い換え」に気づいたら、それが文脈上正しい内容の適切な表現であるかどうかをよく確かめよう。(2)「カモフラージュ」の一種。

※迂言(ラเサん)法:あることを、単一の語句で直接言い表さず、複数の語句を用いて同意となるよう間接的に表現すること。

※他の例:幸福(=恵まれた状態に満ち足りた心持ち)、勇気(=恐れずに立ち向かおうとする思い)

★(96)要素倒置(要素不足誤認)

・線部等、問われている箇所(かしょ)の内容が、例えば「A-B-C」の要素に分解できるとして、それを選択肢の説明では「C-A-B」のように要素の順序を変えて文脈構成し、一見したところでは「要素不足」であるかのように誤認させる。また、順序そのものは「A-B-C」と一致させながら、表現を調整することで「要素不足」であると誤認させる場合もあるので注意。(2)「カモフラージュ」の一種。

★(97)半分ずっこ(ハーフ&ハーフ)

・選択肢の説明が内容的に大きく二つに分けられるような場合に、<u>前半か後半のいずれかは完全に正しい内容であるが、一方が完全に間違っているか、あるいは、意味があやふや</u>である。「本文中のキーワード」や(4)「キラキラワード」などを巧(たく)みに組み込み、直感の誘発(ゆうはつ)や印象操作によって誤答への誘導を図(はか)る。検討が不十分だと、あやふやな記憶に頼(たよ)って判断してしまったり、「ハロー効果」による直感頼(だよ)りの判断に落とし込まれたりするので注意。

※半分ずっこ: 半分ずつにする、の意。

※ハロー効果: ある対象を評価するとき、その「一部の特徴的な印象」に引きずられて、全体について 歪 (ゅが) んだ評価をしてしまう心理現象。「halo (ハロー)」とは聖像などの頭部や全身を包みこむ後光 (ごこう)や光輪(こうりん)。また、太陽や月の周囲を取り巻く「かさ」のこと。後光効果。

★(98)前後同一(ダブり/同語反復/循環論法) ※(69)『同語反復(循環論法)』参照!

・説明を成立させるための要素が本来二つ必要であるのに、前半の説明内容と後半の説明内容とが同一となっている。「AはAである(善人は善い人だ)」のような前後を同内容とした説明であることが露見(ろけん)しないよう、表現や言い回しを巧(たく)みに調整し、見せかけの説得力により誤答へと誘導する。また、「AだからAだ(彼は真面目だから勤勉だ)」のように、前後で同内容となる「同語反復」であるとともに「因果関係」の形式をとる「循環論法」となっている場合もあるので注意しよう。

※「同語反復や循環論法」が本項のように「『選択肢の説明内』で用いられている場合」とは別に、「『設問文』と『選択肢の説明文』との間で用いられている場合」については、(69)『同語反復(循環論法)』を参照のこと。

※**露見**(ろけん):秘密(ひみつ)や悪事など、隠していたことが表に現れること。

※ダブり:「重複」の意の俗語。「二倍・重複」等の意味を持つ英語の「double(ダブル)」に由来する。

★(99)別の事柄の説明(別件の説明/不正流用)

・設問の要求する事柄(ことがら)についての正当な説明そのものではなく、本文中の無関係な別件(別の事柄)についての説明にすり替わっている。「確か本文にはそのように書いてあったはずだから」と、不確かな記憶や思いこみによって判断してしまわないよう注意。また、本文との照合なく、「選択肢の読み比べだけで判断」するのも危険だ。(12)「論点違い」の一種。

※流用:本来の使途(レヒ)を外れて別の使途に用いること。

★(100)替え玉(身代わり)

・「『筆者、あるいは登場人物は』どう考えているか」のように問われているにもかかわらず、その当人ではなく、本文に引用されている、もしくは本文に登場する別の人物の考えや気持ちを、筆者自身のものとしてすり替えて説明されている。

※替え玉(かえだま):本人だと偽(いっわ)って別人を使うこと。また、その人。

※身代わり(みがわり):他人のかわりになること。また、その人。

★(101) 偽証トラップ

・本文中に書かれてある、「登場人物が本心を隠して述べる気持ちや考え」、あるいは、「筆者自身が 想定する他者の反論」等を引用し、それが「登場人物(筆者・作者)本人の本心や考え」であるかのようにすり替えて説明してある。「確か本文にはそのように書いてあったはずだから」と、不確かな記憶や思いこみによって判断しないよう注意。また、本文との照合なく、「選択肢の読み比べだけで判断」するのも危険だ。

※偽証(ぎしょう): 真実でないことを真実であるかのように述べた証明。

★(102)反対語トラップ

・「満足」を、反対語である「不満」を使って「不満ではない」と言い換えても、同義とはならない。このように、本文におけるある語句の「対義語」を用いて「反対表現にする」ことで、いかにも正しい説明であるかのように偽装(ぎそう)する。選択肢の説明に反対表現や否定表現があると正確な意味を取り違えてしまう恐れがあるので、よく注意しよう。(31)「論理的飛躍」の一種。

★(103)可能性トラップ

・ある事柄について、本文では「▲の可能性が『ある』」と述べられているのに対し、選択肢の説明に おいては「▲の可能性が『高い』」といった内容にすり替えてある。「可能性の有無」と「可能性の程度 (高さ・低さ)」とは別問題であるため、「可能性」という言葉につい引っ張られて判断を誤(ぁゃぉ)らないように注意しよう。(41)「前提のすり替え」、(12)「論点違い」の一種。

★(104)回想部の変造(思い出作ってみた!/思い出作り)

・本文における「回想部」を説明に引用する際、さり気なく<u>回想部の時系列や内容等を改変</u>してある。 読解作業においては、回想部の内容や展開も正確に掴(つか)むことを忘れずに。

※回想部:過去を振り返って、あれこれと思い出す部分や場面。

※変造: 文書、通貨など既存(きそん)のものを加工して、その形状や内容などを変えること。

※改変: 内容を変えて、もとと違(ҕが)ったものにすること。

★(105) 語句矮小化(なんか意味弱まった…)

・「いじめ」を「不仲(ふなか)」と表現するように、本来説明にふさわしい的確な語句や表現を用いるのではなく、「本質を外した、意味を弱めた表現」にすり替えて説明してある。一見しただけでは微妙な意味の違いが区別できず、判断を誤る恐れがある。受験学習においても、普段の言語生活においても、感覚的に読み、書き、話すばかりでなく、言葉の意味や使い方、また、正確性や論理性、伝わりやすさについて、もっと意識するようにしよう。(12)「論点違い」の一種。

※矮小化(わいしょうか):物事や、物事の重要性を小さく見せること。

★(106) 論点矮小化(大した問題かよ!)

・「いじめというのは、子どもの悪ふざけの一形態である」のように、<u>ある問題(論点)について、それをわざと小さく取り上げたり、重要性を低めたりして説明</u>する。論点についての方向性が一致していても、問題の本質が不明確であり、説明として不完全である。(12)「論点違い」の一種。

※矮小化(わいしょうか):問題を小さく見せること。物事の重要性を小さくしたり、物事の一部だけを断片的に捉(とら)えて問題を小さくしたり、小さく見せたりすること。日常においては、ある問題について、それが「大した問題ではない」と、言い逃れや責任回避(かいひ)をする時などに用いられる場合が多い。